

# 大久保遺跡(第3次)発掘調査報告

## －三重郡菰野町潤田－

2017（平成29）年

三重県埋蔵文化財センター





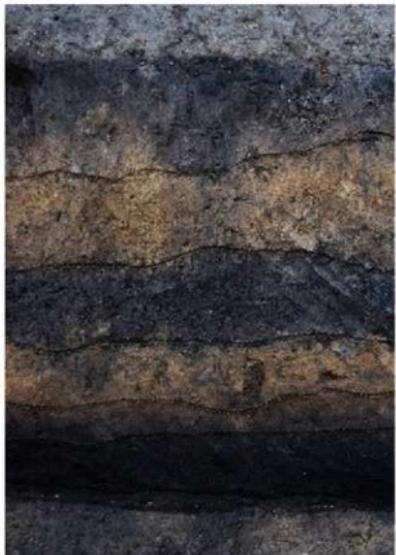
調査区全景（北から）



S B301（東から）



卷頭図版 2





## 例言

1. 本書は三重県三重郡菰野町潤田に所在する大久保遺跡（第3次）の発掘報告書である。
2. 発掘調査は平成27年度一般国道477号四日市湯の山道路整備（改築）事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けて実施した。
3. 現地での調査は平成27年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘を行った面積は1,832m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

主査 中井英幸

技師 石井智大

土工作業受託者 安西工業株式会社

5. 本書は第I章第1・3節、第II章、第IV章の一部を中井英幸、第VI章第2節を一般社団法人文化財科学研究所金原正子・金原裕美子・杉山真二、第VI章第3節を日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所・TACセンター大澤正己・鈴木瑞穂が執筆し、それ以外を石井智大が執筆した。遺物写真の撮影は、中井が行った。全体の編集は石井が行っている。
6. 現地における発掘調査や整理作業、そして本報告書の作成にあたっては、地元の方々をはじめ、下記の機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝いたしたい。  
（五十音順、敬称略）県土整備部四日市建設事務所プロジェクト推進室高規格道路課、菰野町教育委員会、NEXCO中日本
7. 大久保遺跡の発掘調査に関する記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

## 凡例

1. 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」、2006三重県共有デジタル地図（平成19年測図）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：三総合地第148号）。
2. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系に基づいている。
3. 本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。
4. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。
5. 本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。  
S B : 挖立柱建物 S K : 土坑 S D : 溝 Pit : 柱穴・小穴
6. 挖立柱建物や柱列の柱穴の検出時に、平面で柱痕あるいは柱の抜き取り痕と思われる土色の変化が確認されたものについては、平面図において、その位置をグレーの網掛けで示している。
7. 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、小型の石製品・金属製品や、縄文土器の小片などについては1/2・1/3としたものもある。各遺物の縮尺は図中スケール及び図版キャプションにて明示している。
8. 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺構・遺物写真の縮尺は不同である。

# 目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 過去の調査	1
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序	9
第1節 現地調査の方法	9
第2節 基本層序	10
第Ⅳ章 繩文時代の遺物	15
第Ⅴ章 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物	16
第1節 遺構	16
第2節 遺物	32
第VI章 自然科学分析	41
第1節 分析の目的と試料の採取	41
第2節 大久保遺跡における花粉分析・珪藻分析・ 植物珪酸体分析・火山灰分析・螢光X線分析	43
第3節 大久保遺跡（第3次調査）出土鉄滓の分析調査	69
第VII章 調査のまとめと考察	76
第1節 地形環境の形成	76
第2節 大久保遺跡の中世集落の様相	78
第3節 掘立柱建物の構造と位置づけ	82
第4節 中世の土地開発と大久保遺跡	86
第5節 結語	87
附章 薩野町内の中世遺物	88

# 図版目次

<b>第Ⅰ章 はじめに</b>	
第1図 調査区位置図	..... 2
<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>	
第2図 地形分類図	..... 4
第3図 周辺遺跡位置図	..... 6
<b>第Ⅲ章 調査の方法と基本層序</b>	
第4図 調査区グリッド配置図	..... 9
第5図 調査区東壁土層断面図	..... 11
第6図 調査区北壁土層断面図	..... 12
第7図 調査区全体図	..... 13
<b>第Ⅳ章 繩文時代の遺物</b>	
第8図 繩文時代遺物実測図	..... 15
<b>第Ⅴ章 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物</b>	
第9図 S B301 P16遺物出土状況図	..... 16
第10図 S B302 P 8 遺物出土状況図	..... 16
第11図 S B301平面図・土層断面図	..... 17
第12図 S B302平面図・土層断面図	..... 18
第13図 S B310平面図、S K308・309平面図・土層断面図	..... 20
第14図 S B310土層断面図①	..... 21
第15図 S B310土層断面図②	..... 22
第16図 S K307平面図・土層断面図・遺物出土状況図	..... 22
第17図 S B311平面図・土層断面図	..... 23
第18図 S B314平面図	..... 24
第19図 S B314土層断面図①	..... 25
第20図 S B314土層断面図②	..... 26
第21図 S K315・316平面図・土層断面図	..... 27
第22図 S K315遺物出土状況図	..... 28
第23図 S K316土塊出土状況図	..... 28
第24図 S A317平面図・土層断面図	..... 29
第25図 溝・土坑平面図・土層断面図	..... 30
第26図 S D303平面図・土層断面図	..... 31
第27図 A41Pit 1 遺物出土状況図	..... 31
第28図 挖立柱建物・柱列出土遺物実測図	..... 33
第29図 S K316出土土塊実測図	..... 34
第30図 溝・土坑・ピット・その他出土遺物実測図	..... 36
<b>第VI章 自然科学分析</b>	
第31図 土壌分析試料採取位置図	..... 42
第32図 大久保遺跡における花粉ダイアグラム	..... 56
第33図 大久保遺跡における主要珪藻ダイアグラム	..... 57
第34図 大久保遺跡における植物珪酸体分析結果	..... 58
第35図 大久保遺跡におけるテフラ分析結果	..... 59
第36図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅰ	..... 60
第37図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅱ	..... 61
第38図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅲ	..... 62
第39図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅳ	..... 63
第40図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅴ	..... 64
第41図 大久保遺跡の花粉・胞子	..... 65
第42図 大久保遺跡の珪藻	..... 66
第43図 大久保遺跡の植物珪酸体（プラント・オペール）	..... 67
第44図 大久保遺跡のテフラ写真	..... 68
第45図 楯形鍛冶津（含鉄）の顕微鏡組織・EPMA調査結果	..... 74
第46図 鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA調査結果	..... 75
<b>第VII章 調査のまとめと考察</b>	
第47図 大久保遺跡第1次調査区全体図	..... 78
第48図 大久保遺跡第1次調査出土遺物実測図	..... 79
第49図 大久保遺跡遺構分布図	..... 80
第50図 S B310・314柱穴属性グラフ・模式図	..... 84
<b>附章 茂野町内の中世遺物</b>	
第51図 杉谷城跡・觀音寺跡遺物実測図	..... 89

## 表目次

第1表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表①	..... 38	第10表 大久保遺跡におけるテフラ分析結果	..... 55
第2表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表②	..... 39	第11表 供試材の履歴と調査項目	..... 73
第3表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表③	..... 40	第12表 供試材の化学組成	..... 73
第4表 大久保遺跡第3次調査遺構一覧表	..... 40	第13表 出土遺物の調査結果のまとめ	..... 73
第5表 分析試料土層・遺構名等対照表	..... 41	第14表 土壌分析結果一覧表	..... 76
第6表 分析試料リスト	..... 43	第15表 S B310・314柱穴一覧表	..... 83
第7表 大久保遺跡における花粉分析結果	..... 52	第16表 杉谷城跡・觀音寺跡採集遺物一覧表	..... 89
第8表 大久保遺跡における珪藻分析結果	..... 53	第17表 大久保遺跡第1次調査出土遺物一覧表	..... 90
第9表 大久保遺跡における植物珪酸体分析結果	..... 54		

## 写真図版目次

卷頭図版 1 調査区全景（北から）		S B310 P18土層（西から）	
S B301（東から）		S K307（西から）	
卷頭図版 2 東壁サブトレンド土層（西から）		S K307土層（西から）	
S B301 P16遺物出土状況（北から）		写真図版 4	..... 96
S K310 P8土層（西から）		S K308（南から）	
S K307遺物出土状況（西から）		S K308土層（西から）	
写真図版 1	..... 93	S K309（東から）	
調査区全景（南から）		S K309土層（西から）	
調査前風景（北から）		S B311（西から）	
調査区北壁土層（東から）		写真図版 5	..... 97
S B301 P6付近調査区東壁土層（西から）		S B314（西から）	
調査区南部東壁土層（西から）		S B314 P5土層・遺物出土状況（南から）	
写真図版 2	..... 94	S B314 P6土層・遺物出土状況（南から）	
東壁サブトレンド北端部土層（南から）		S K315・316（西から）	
S B302 P6土層（南から）		S K315西半部土層（南から）	
S B302 P8土層（西から）		写真図版 6	..... 98
S B302 P8遺物出土状況（南から）		S K315遺物出土状況①（北から）	
S B302（東から）		S K315遺物出土状況②（北から）	
写真図版 3	..... 95	S K316西半部土層（北から）	
S B310（東から）		S K316北半部土層（東から）	
S B310 P13土層（西から）			

S K316東端部床面断ち割り状況（北から）	写真図版 9	..... 101
S K316土塊出土状況（南から）	S K306土層（北から）	
S A317（北から）	S K312（北から）	
写真図版 7 .....	S K313土層（北から）	
S A317 P 1 土層（西から）	A41Pit 1 土層・遺物出土状況（南北）	
S A317 P 2 土層（西から）	調査区西部落ち込み検出状況（北から）	
S D303検出状況（東から）	注口土器出土状況（南から）	
S D303西端部（東から）	調査風景（南から）	
写真図版 8 .....	写真図版10 出土遺物① .....	102
S D303西部土層（東から）	写真図版11 出土遺物② .....	103
S D303東部土層（東から）	写真図版12 出土遺物③ .....	104
S D304土層（東から）	写真図版13 出土遺物④ .....	105
S D305土層（東から）	写真図版14 出土遺物⑤ .....	106
S D304（東から）	写真図版15 出土遺物⑥ .....	107
S D305（東から）	写真図版16 出土遺物⑦ .....	108

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

三重県四日市建設事務所が所管する一般国道477号四日市湯の山道路整備（改築）事業は、現道のバイパス機能と、現在建設中の高速道路（近畿自動車道名古屋神戸線）へのアクセス機能の役割を担う事業で、平成25年度から行われている。

発掘調査の原因者である三重県四日市建設事務所との事前協議の経過については、刊行済みの『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』<sup>1)</sup>を参照されたい。

なお、今回の発掘調査に関する文化財保護法等にかかる諸通知は以下のように行っている。

<文化財保護法等にかかる諸通知>

文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項にかかる通知

- 平成26年1月14日付け 四建第784号（県教育長あて県知事通知）

文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告

- 平成27年8月11日付け 教理第157号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

遺失物法にかかる文化財発見・認定報告

- 平成28年2月12日付け 教委第12-4424号（四日市西警察署長あて県教育長通知）

### 註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』 2016。

## 第2節 過去の調査

大久保遺跡では、過去に2回にわたって発掘調査が行われており、今回の調査は第3次調査にあたる（第1図）。

### ①第1次調査

第1次調査は、昭和57年度に都市計画街路菰野～潤田線新設事業に伴って、菰野町教育委員会が主体となって行われた<sup>2)</sup>。

調査面積は約2,000m<sup>2</sup>で、昭和57年9月に行われた試掘調査によって発掘調査の対象範囲が決定された。昭和57年12月から昭和58年2月にかけて本格的な発掘調査が実施され<sup>3)</sup>、昭和58年2月13日には現地説明会も開催されている。

発掘調査は大きくA地区とB地区に分けて行われている。調査の結果、掘立柱建物7棟以上、堅穴建物と思われる方形土坑3基、井戸1基、石組遺構1基のほか、多数の溝や土坑が検出された<sup>3)</sup>。溝には掘立柱建物と方向を合わせるように掘られたものもある。

遺物としては山茶碗や土師器の小皿・鍋・羽釜、陶器の皿・甕・天目茶碗、青磁のほか、鉄製品、砥

石、銅錢なども出土している。

また、縄文時代後期のものと考えられる土器片が数点出土している。

### ②第2次調査

第2次調査および第3次調査は一般国道477号四日市湯の山道路整備（改築）事業に伴うものである。調査は三重県埋蔵文化財センターが行った。

事前に実施した範囲確認調査の結果に基づいて発掘調査の対象範囲を決定し、そのうち2,445m<sup>2</sup>について、平成26年度に第2次調査として発掘調査を行っている<sup>4)</sup>。

第2次調査では、A地区、B地区、C地区の3地区に分けて調査が行われた（第1図）。A地区で鎌倉時代のものと思われる掘立柱建物1棟が検出されたほか、各調査区で土坑やビットが検出された。

B地区は第3次調査の調査区の南西側に隣接するが、中世の遺構としては不整形な土坑が検出されたのみで、建物跡などは検出されなかった<sup>5)</sup>。また、北西部で河川跡とされる大きな落ち込みが検出されている。



このほか、第2次調査では縄文土器が複数出土し、A地区では竪穴住居の残れの可能性もある浅い土坑が検出され、第1次調査時に想定されていた縄文時代の遺構・遺物の存在が、改めて確認された。

### ③その他の調査

このほか、第3次調査区の北側で、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴って、三重県埋蔵文化財センターによって部分的に調査が行われている<sup>6)</sup>。

大久保遺跡の範囲にかかる13,000m<sup>2</sup>ほどの事業地のうち800m<sup>2</sup>について、一次調査として発掘調査を行っているが、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗の細片が出土したのみで、遺構は検出されていない。

#### 註

- 1) この道路は、現在国道306号となっている。調査区の位置は第VII章の第49図に示している。

- 2) 萩野町教育委員会『大久保遺跡発掘ニュース』No.1 1982、  
萩野町教育委員会『大久保遺跡発掘ニュース』No.2 1983、  
萩野町教育委員会『大久保遺跡現地説明会資料』 1983、  
3) 遺構の数は『大久保遺跡現地説明会資料』に掲るが、『大久保遺跡発掘ニュース』No.2の図中では掘立柱建物は10棟が図示されている。なお、竪穴建物を囲む柱列が確認されたとされ、それも図示されているが、この竪穴建物については掘立柱建物内の土坑と考えた方がよく、これを合わせると12棟ほどの掘立柱建物が存在したと想定される。  
4) 三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』 2016、  
5) 第3次調査で検出された掘立柱建物の一部がB地区内にも及んでいるが、ごく一部であるため、第2次調査の時点では建物跡と判断できなかった。  
6) 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV』 2014、

## 第3節 調査の経過

現地での発掘調査は、平成27年8月7日より開始した。8月31日より重機による表土掘削を開始、11月24日には現地での作業を終了した。

現地調査の開始から終了までの調査進行の概略は、以下の調査日誌（抄）の通りである。

#### <調査日誌（抄）>

- 8月31日 表土掘削開始、掘立柱建物 S B301・302  
を検出
- 9月3日 S D303を検出
- 9月8・9日 台風18号接近により作業中止
- 9月11日 表土掘削を進める一方で、北側より包含層掘削開始
- 9月29日 表土掘削完了
- 10月6日 包含層より石織出土
- 10月7日 掘立柱建物 S B310を検出
- 10月9日 掘立柱建物 S B311を検出
- 10月13日 S B311遺構写真撮影
- 10月15日 縄文土器（注口土器の注口部）出土

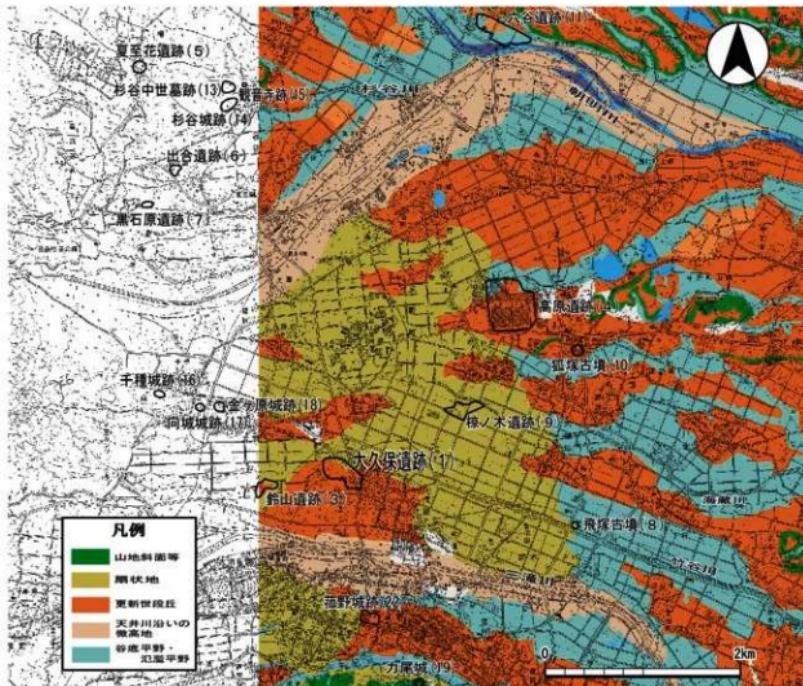
- 10月19日 掘立柱建物 S B314を検出
- 10月20日 萩野町立千種小学校2年生54人、引率教員4人の遺跡見学対応
- 10月23日 S B314遺構写真撮影
- 10月28日 調査区全景写真撮影
- 10月29日 四日市市記者クラブにて現地説明会に開催する資料提供
- 11月4日 調査区平面図作成開始
- 11月6日 萩野町立千種小学校6年生60人、引率教員3人の遺跡見学対応
- 11月7日 現地説明会開催（参加者数170人）
- 11月11日 拡張区掘削開始、表土掘削完了
- 11月12日 S B301・302全プラン検出
- 11月13日 S B301・302遺構写真撮影
- 11月13日 S A317を検出
- 11月20日 調査区平面図完成
- 11月24日 調査終了、機材撤収

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大久保遺跡(1)は、三重県の北勢地域、三重郡菰野町潤田に所在する。三重県と滋賀県との県境となる鈴鹿山脈を西縁にするこの北勢地域には、山脈の山々を源とした多くの川が形成され、伊勢湾へと注ぎ込んでいる。そうした河川の1つ、古くは三重川と知られた三滝川は、御在所山(1,212m)に流れを発し、菰野町、四日市市を潤す。この三滝川と、駿河ヶ岳(1091.9m)の南部を源とする朝明川の溪口をかなめとして、朝上(あさかみ)扇状地と呼ばれる扇状地が広がる<sup>1)</sup>。この朝上扇状地は、鈴鹿山脈に発達する扇状地の中でも最も新しいとされる。ま

た、三滝川・朝明川間には台地群が点在し、特に朝上扇状地の領域内にある台地群は、約1万年以前にできた上段丘で桜面と呼ばれている<sup>2)</sup>。大久保遺跡のある現在の菰野町潤田集落は、三滝川左岸の標高約76mの桜面上に展開する。潤田集落と同様に、現在存在する多くの集落は桜面上にあり、その一方で、扇状地に分類される地域は主に水田として開発されている。そして、三滝川・朝明川の間を流れる竹谷川(海蔵川支流)が潤田集落のある桜面北縁に沿って流れ、一部その枝川が大久保遺跡を分断する形で流れている。



第2図 地形分類図 (1:50,000)

※国土地理院土地条件図を基に作成

鈴鹿山脈の地質・形成にも目を向けてみたい。鈴鹿山脈は、地帯構造区分では美濃-丹波帯に属する。その形成は、古生層および白亜紀末に貫入した花崗岩類からなり、その接触部付近は熱による接触変成化している<sup>3)</sup>。また、鈴鹿山脈の東縁は顕著な逆断層の一志断層によって限られており、山脈部と低地との境に険しい急斜面の崖が認められるのはそのためである。この一志断層は、新世代・第四期の地殻変動によるもので、古生層・花崗岩類と鮮新・更新統の奄芸層群とを分けるとともに、鈴鹿山脈を隆起させ今の形を作るもとなつた。その後の山脈から流れる河川の働きにより、厚く堆積した奄芸層群を覆う形で新田の扇状地が広く分布する<sup>4)</sup>。また、三瀧川付近には、菰野断層と呼ばれる断層があり、一志断層系の活断層群の1つとされる。三瀧川左岸沿いでは、南北方向に平行する西のぼりの崖地形として広く分布し、三瀧川右岸では、奄芸層群を切る逆断層として認められている<sup>5)</sup>。

なお、こうした地殻変動活動は、菰野町の産業を育み、生活に影をもたらした。この地で採れる「菰野石」は、造園・石碑づくりに重宝され、また、三瀧川上流ではこの花崗岩層に浸透した地下水がラジ

ウム鉱泉として湧水し、「湯の山温泉」として長きにわたって人々に愛されている。さらに、菰野町北部には、湧水によって湿地が形成され、伊勢湾周辺の一部地域のみに生育し「生きている古代の植物」とも称されるシデコブシが自生する。このシデコブシと湿地性の植物群落は、その文化財的価値が認められ、「田光のシデコブシ及び湿地植物群落」として平成17年に国の天然記念物に指定されている<sup>6)7)</sup>。

## 註

- 1) 国土地理院『土地条件調査報告書(伊勢湾西部地域)』 1969.
- 2) 註1) に同じ。
- 3) 太田陽子・寒川旭「鈴鹿山脈東麓地域の変異地形と第四期地殻変動」『地理学評論』57(Ser.A)~4 1984.
- 4) 註3) に同じ。
- 5) 註3) に同じ。
- 6) 菰野町教育委員会『こもの文化財だより』第27号 2013.
- 7) 菰野町『広報こもの』3月号 (No.547) 2006.

## 参考文献

- 太田陽子ほか(編)『日本の地形6 近畿・中国・四国』 東京大学出版会 2004.  
原山智也『御在所山地域の地質』 地質調査所 1988.

## 第2節 歴史的環境

丘陵地の多い菰野町においては、東側に広がる北勢地域の平野部と比べて周知遺跡が希薄で、特に大久保遺跡(1)のある三瀧川近辺の扇状地における歴史的な展開は、いまだ不明な面が多い。ここでは大久保遺跡の近隣の遺跡を通して、菰野町南部における三瀧川流域の歴史的展開を中心にみていくたい。

### ①旧石器時代から縄文時代

菰野町において、旧石器時代の遺跡は今のところ認められない。

三瀧川流域の縄文時代の遺跡としては、大久保遺跡の約2km上流部に位置し、地元では「菰野富士」と称される江野高原に西江野A・B遺跡(2)があり、矢柄研磨器が見つかったという記録が残っている<sup>1)</sup>。また、大久保遺跡より約600m上流部に位置する鈴山遺跡(3)では、縄文時代早期の煙道付炉穴・集石炉・縄文時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・落

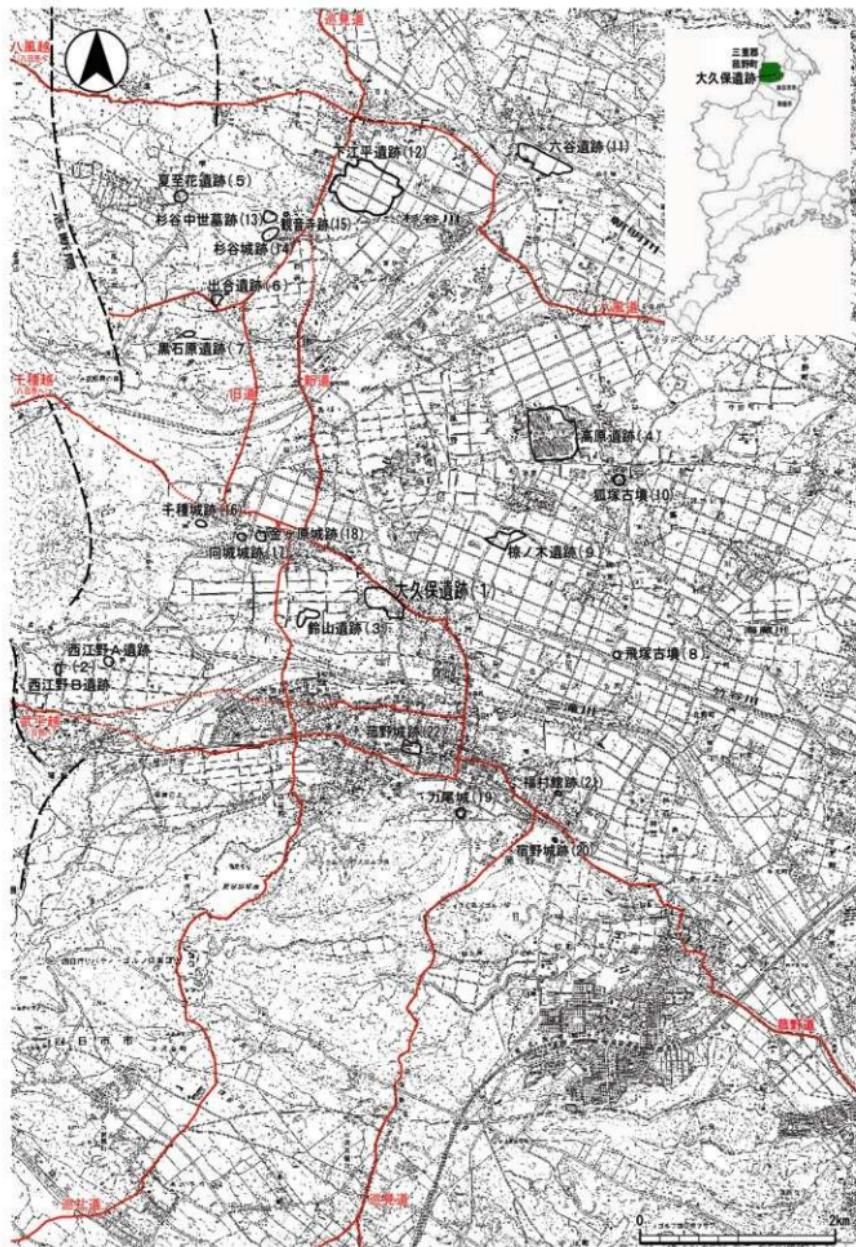
し穴が見つかっている<sup>2)</sup>。さらに、大久保遺跡より1kmほど下流部にある高原遺跡(4)では三頭石斧が見つかっている<sup>3)</sup>。

大久保遺跡では、1982年の第1次調査において、縄文時代後期のものと思われる土器片と黒曜石製のスクレイバーのような石器が見つかっているが、それらに連なる遺構は見つからなかった<sup>4)</sup>。また、2014年の第2次調査においては、縄文土器深鉢の口縁部・底部が出土し、竪穴住居の断片的な残りである可能性もある土坑も検出されている<sup>5)</sup>。

朝上扇状地の北西に位置する尾高高原の山麓部においては、夏至花遺跡(5)、出合遺跡(6)、黒石原遺跡(7)の各遺跡からは、石器・石織などが採集されている<sup>6)</sup>。

### ②弥生時代

大久保遺跡の北8kmの杉谷川(朝明川支流)の上



第3図 周辺遺跡位置図 (1:50,000)

流部にある杉谷集落や、北6kmの朝明川右岸にある高塚遺跡などの複数の遺跡（四日市市所在）から、弥生時代の遺構・遺物が見つかっている<sup>7)</sup>。

三滝川については、大久保遺跡の10km東、三滝川中流の自然堤防上には隣接して存在する永井遺跡、上畠遺跡（ともに四日市市所在）があり、永井遺跡では、多量の弥生時代の遺物が出土し、弥生時代前期から後期まで断続的に集落が営まれていることが分かっている。一方の上畠遺跡では、後期の住居7棟が確認されている。そして、大久保遺跡の2km下流部、扇状地の扇端で氾濫平野が始まる場所に位置する飛塚古墳（8）では、弥生時代後期の山中式併行期のものとされる堅穴住居が墳丘の下層から確認され、高壇や甕が出土している<sup>8)</sup>。また、大久保遺跡の下流1kmの椋ノ木遺跡（9）では、飛鳥時代の堅穴住居の埋土中から弥生時代中期の土器の壺頸部と甕口縁部が出土したが、その下層調査では、遺構やさらなる遺物は認められなかった<sup>9)</sup>。

### ③古墳時代

菰野町域では、多数の円墳が6世紀から7世紀前半にかけて築造されている。現在まで、前方後円墳は確認されていない<sup>10)</sup>。また、それらの古墳に対応する集落跡は現時点で見つかっていない。

三滝川および海藏川流域においては、5世紀代の古墳は認められていない。4世紀末から5世紀初頭にかけて、下流域に志氏神社古墳（四日市市所在）、大久保遺跡より2km下流部に町内最大となる径35mの円墳（4世紀末）の飛塚古墳、径11mの小円墳の孤塚古墳（10）が存在する。特に、飛塚古墳では、家形埴輪、壺形埴輪、朝顔形を含む円筒埴輪など、多種の埴輪が出土している<sup>11)</sup>。こうした多様な埴輪群からは、伊勢湾を介して三重県南勢地域や尾張・西三河地域とのかかわりが考えられる。大久保遺跡に比べて標高が20mほど低いこの地より上流部では、いまだ古墳時代の遺跡は見つかっていない。

なお、菰野町で確認された古墳の多くは、一定の場所に集中して造られた古墳群で、しかも朝明川沿いに集中する<sup>12)</sup>。三滝川の北に位置する朝明川沿いは、その地理的な好条件から古くから開けていたとされる<sup>13)</sup>。

### ④飛鳥・奈良・平安時代

平安時代中期に編纂された『倭名類聚抄』によると、菰野町は、律令の郷里制下において、現在の鈴鹿市国府に国衙を置く伊勢国に属していたとされている<sup>14)</sup>。その国衙のもとは13の郡が置かれ、菰野町は朝明郡と三重郡をまたぐ位置にあった。大久保遺跡のある潤田集落は、三重郡内の葦田郷に属していたとされる<sup>15)</sup>。

大久保遺跡の下流1km、潤田集落と池底集落に所在する椋ノ木遺跡からは、7世紀中ごろのカマド跡の残る堅穴住居群が見つかっている<sup>16)</sup>。また、田光川（朝明川の支流）の沿岸の六谷遺跡（11）では、奈良時代前半の集落跡と思われる堅穴住居と掘立柱建物群が見つかっている<sup>17)</sup>。

朝上扇状地の北には、朝明川と田光川に挟まれた根の平扇状地が形成され、その東端に下江平遺跡（12）が存在する<sup>18)</sup>。そこでは、8世紀前半期と12世紀を中心とする時期に営まれた集落跡が見られた<sup>19)</sup>。

### ⑤平安時代後期～中・近世

鎌倉時代に神宮の神領地を記した『神鳳鈔』によると、菰野町内では、平安時代後期ごろから、大久保遺跡のある潤田集落を含む御厨が11か所、御園が1か所、神領地として寄進されていたという<sup>20)</sup>。本来、御厨と御園には区別はなかったが、御厨は水田を、御園は畠を指すようになっていったようである。伊勢国のお厨の分布は、非条里地帯の山間地が多く、また北勢地域に多い。その一方で、神宮に近い南勢地域には御園が多くみられる。記録では、潤田御厨は二十六町分の水田面積を持っていたとされ、神宮への上納分として、内宮と外宮に三石ずつ計六石を、毎年6月・9月・12月の3回に分けて献上していたようである<sup>21)</sup>。

鎌倉初期には、源頼朝の厚い神宮崇敬により、それぞれの神領地は最盛期を迎えるが、室町時代になると諸国の守護が両国内の荘園を侵略し、荘園制が崩壊していくことになる。最盛期に11か所あった菰野町のお厨も、室町末期には潤田を含む4か所になってしまったという記録も残っている<sup>22)</sup>。

朝明川上流の朝明谷の杉谷集落では、杉谷中世墓跡(13)、杉谷城跡(14)、観音寺跡(15)などの中世の遺跡が数多く認められる。杉谷中世墓跡では、約200基の五輪塔や石仏のほか、12世紀～16世紀の常滑産の壺や甕、13～15世紀の瀬戸産の壺や水差し・四耳壺、14世紀の中国製の鉄軸壺などが見つかっている<sup>23)</sup>。杉谷城跡は、杉谷中世墓跡の南に所在する。城主は、1570（元亀元年）年に千種越えの織田信長を襲撃した萩原善住房（せんじゅぼう）（杉谷善住坊）であると伝えられている<sup>24)25)26)</sup>。通称「城の腰」と呼ばれた杉谷集落の西側の丘陵地にあり、城域は南北に約200m、東西の幅は約60mの大きさを示す<sup>27)</sup>。また、杉谷中世墓跡の谷を隔てた北300mに観音寺跡が見られ、今も石碑といくつもの礎石が残る。永禄の信長の兵火にかかり滅亡したといわれており、礎石の表面には、焼けた跡が見られる<sup>28)</sup>。

三瀧川流域においては、大久保遺跡の第1次調査にて、鎌倉時代後半～室町時代の集落跡として、掘立柱建物（7棟以上）と井戸が見つかっている<sup>29)</sup>。また、扇状地の両翼の山裾には、その特徴的な地形を生かした遺跡が多く認められている。左翼側には、千種城跡(16)、向城城跡(17)、金ヶ原城跡(18)などが非常に近い位置関係で存在する。一方の右翼側には、力尾城跡(19)、宿野城跡(20)・福村館跡(21)などの中世城館がある。その内、力尾城跡はかつて菰野城と呼ばれ、織田信雄の部下、土方雄久が天正11～18年の間、城主を務めていたことが文献によってわかっている<sup>30)</sup>。そして、近世城館としては、力尾城跡の北西に位置する菰野城跡(22)の発掘調査が行われており、近世の遺構が発見されている。

朝明谷周辺は、鎌倉時代から安土・桃山時代まで、近江商人や伊勢商人の通行で、大変な販賣を見せていましたようである。鈴鹿山脈を越える峠は多数利用されていたが、千草集落を経て朝明川の源流である根の平峠を越える千草越は、時代の移ろいによって衰退していく峠道がある中、永く利用されていたといいう。

江戸時代に入り、徳川家光が諸国に巡見使を派遣するため、菰野町全城に巡見道とよばれる街道を整備した。巡見道は、潤田集落の中心を通り、今もその主な部分が国道306号として利用されている<sup>31)</sup>。

## 註

- 1) 菰野町教育委員会『菰野町史』上巻 1987。
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『鈴山遺跡第2次発掘調査現地説明会資料』 2015。
- 3) 註1) に同じ。
- 4) 菰野町教育委員会『大久保遺跡現地説明会資料』 1983。
- 5) 三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』 2016。
- 6) 註5) に同じ。
- 7) 註1) に同じ。
- 8) 三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』 2015。
- 9) 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V』 2015。
- 10) 註1) に同じ。
- 11) 註8) に同じ。
- 12) 註1) に同じ。
- 13) 註8) に同じ。
- 14) 註1) に同じ。
- 15) 註1) に同じ。
- 16) 註9) に同じ。
- 17) 三重県教育委員会『昭和58年度農業基盤整備事業地埋蔵文化財発掘調査報告』 1984。
- 18) 菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告I』 1987。
- 19) 菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告II』 1988。
- 20) 註1) に同じ。
- 21) 註1) に同じ。
- 22) 註1) に同じ。
- 23) 註1) に同じ。
- 24) 註1) に同じ。
- 25) 三重県埋蔵文化財センター『力尾城跡発掘調査報告』 2001。
- 26) 三重県教育委員会『三重の中世城館一開発集中地域中世城跡分調査報告一』 1976。
- 27) 註1) に同じ。
- 28) 註1) に同じ。
- 29) 註4) に同じ。
- 30) 註25) に同じ。
- 31) 三重県教育委員会『美濃街道・濃州道・八風道・菰野町・巡見道・巡礼道・鈴鹿の幹道』 1984。

## 第III章 調査の方法と基本層序

### 第1節 現地調査の方法

**調査区の設定** 第3次調査の調査区は、第2次調査の北東側の隣接地である。範囲確認調査において遺構・遺物が確認された範囲を中心に、1,744m<sup>2</sup>の東西に長い平行四辺形に近い形の調査区を設定した(第1図)。

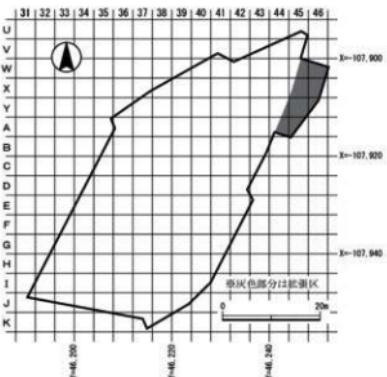
北西側は竹谷川支流によって深い谷となっているため、この谷の落ち込み際までを調査区とした。

なお、遺構検出時に掘立柱建物S-B301・302が調査区の東側へ続いていることが判明したため、当初の調査区の遺構掘削及び全景写真撮影終了後、調査区北東部を東側へおよそ88m<sup>2</sup>、台形に突出させるように拡張し、これらの遺構の全体を検出した。この拡張部分については、拡張区と呼称する。

当初の調査区と拡張区とを合わせた最終的な調査面積は1,832m<sup>2</sup>である。

**グリッドの設定** 調査区を設定した後に、調査区全体にわたりて4m四方の大きさのグリッドを設定した(第4図)。

グリッドは、国土座標の方位軸に沿って設定した。



第4図 調査区グリッド配置図 (1:1,000)

各グリッドには南から北へ向かってAから順にアルファベットを、西から東へ向かって1から順に数字をふり、このアルファベットと数字の組み合わせによって各グリッド名を表したが、第2次調査のB地区と隣接しているため、第2次調査B地区からの通し番号とした。

表土掘削、遺構検出段階において出土した遺物はこのグリッドごとに取り上げを行っている。ただし、拡張区についてはグリッドごとの遺物の取り上げは行っていない。

**掘削** 現地調査開始後、まず耕作土等の表土を重機で除去し、遺構面まで掘り下げた。掘削土については一度調査区の南側に集積した後にダンプトラックで搬出した。

その後、北東側から順次人力で遺構の検出作業を行った。遺構検出後、それぞれの遺構を人力で掘削した。

**遺構番号の付与** 今回の調査では、すべての種類の遺構に、通し番号で301から順に遺構番号を付与した。300番台からの番号を用いたのは、第2次調査までの遺構番号と区別するとともに、第3次調査において検出された遺構であることを分かりやすく示すためである。表記時には、遺構番号の前に、凡例で示したようにSK、SDなど遺構の種類ごとの略称を付している。

ただし、掘立柱建物の柱穴については各柱穴に個別の番号を振り、番号の前にPitを表すPを付して表記している。

なお、調査区内で多数検出された近世～近代の耕作溝と思われる溝については、遺構平面図等では搅乱ではなく遺構として示したが、個別に遺構番号は付与していない<sup>1)</sup>。

#### 註

1) 耕作溝から出土した遺物については、それぞれの耕作溝単位ではなく、グリッド単位で取り上げを行っている。

## 第2節 基本層序

調査区内では、地表面から遺構検出面まで約60～80cmほどの深さがあり、その間に黒ボク土の堆積などが認められた。ただし、調査区西部では竹谷川支流に沿って落ち込みがあり<sup>1)</sup>、粗い砂礫土が厚く堆積していたため、調査区西側の壁面では黒ボク土の堆積は確認できなかった。

そこで、黒ボク土層がよく観察でき、遺構面の遺存状況もよい、調査区東側の壁面について土層断面図を作成した（第5図）。この東壁沿いでは、遺構検出面より下層における縄文時代の遺構・遺物の有無や、土層の堆積状況を確認するため、長さ11mにわたってサブトレーンチを設けており（以下、東壁サブトレーンチと呼称）、その壁面上層についても同化している。

また、調査区西側の砂礫土の堆積状況を確認するため、調査区北側の壁面に沿ってサブトレーンチを設け、土層の観察を行うとともに、土層断面図を作成した（第6図）。

**東壁（第5図）** 調査区内では、西部を除く全体にわたって黒ボク土の堆積がみられた。黒ボク土は地表面から遺構検出面にかけて厚く堆積しているが、詳細に見ると複数の層に明瞭に分かれる（第1～4層）。客土もしくは耕作等の要因により、複数の層が形成されたものと考えられる。

第1～3層からは遺物の出土は確認できなかった。第1層は、宅地造成に伴う擾乱層よりも後に堆積しており、跡跡外からの客土である可能性も考えられる。

調査区において多数検出された耕作溝は、第3層上面から掘り込まれている。耕作溝中からは近代までの遺物が出土していることから、第3層が形成されたのは中世以降、近代までと推定される。

第3層下では、第4層上面から掘り込まれたと考えられる遺構状の落ち込みも見られる（B・C層）。これらについては、中世以降近代までの時期に位置づけられるものの、性格は不明であり、遺構としては掘形もやや不明瞭である。

第4層は安定した黒ボク土層である。大きく擾乱を受けた痕跡はなく、地山となる第8層との間に

漸移層（第5層）が形成されている。

古代末～中世前期の遺構は、第5層上面から掘り込まれているように見えるが、黒ボク土中で遺構の掘形を認識することが困難であるため、実際には第4層中あるいは第4層上面から掘り込まれている可能性が高い。

東壁サブトレーンチ内で確認した第8～17層については、比較的粗い砂粒や礫を含む層と、黒ボク土に近い黒色土層が数度にわたり堆積している状況が確認できた<sup>2)</sup>。黒色土層についてはそれほど厚く堆積しておらず、砂粒を多く含んでおり、黒ボク土と砂礫が混ざったような印象を受けた。また、これらの土層は土質が一定しておらず、側方変化が認められる。土壤の分析結果などから、河川の氾濫もしくは土石流等によって二次的に堆積した土層であると推定される<sup>3)</sup>。

なお、第8～17層からは、遺物の出土は全く確認できなかった。調査区内で出土した縄文時代遺物は、第4～7層に包含されていた可能性が高い。

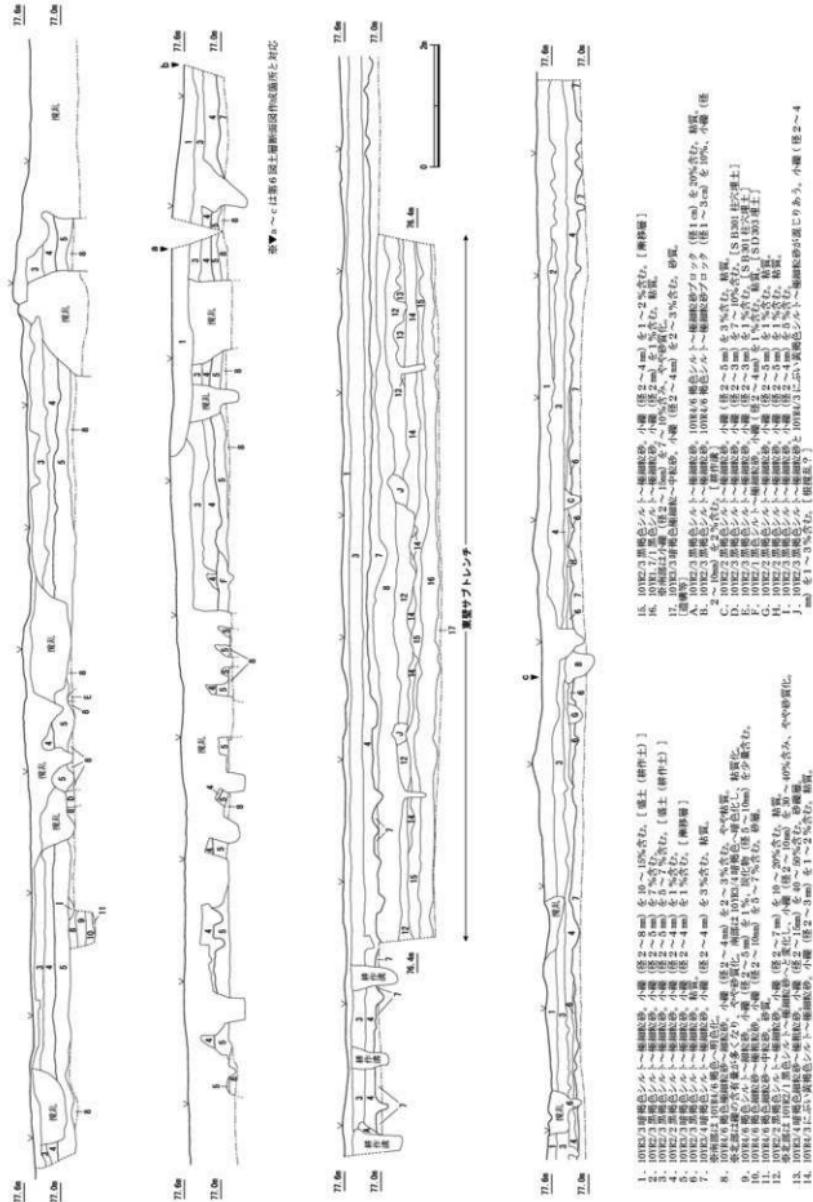
**北壁（第6図）** 調査区の北壁では、竹谷川支流沿いに形成された落ち込みの東西方向の断面が明瞭に観察できた。

第2・3層は東壁第3層と対応するものと思われる。この第2・3層が、落ち込み上部を覆っている。

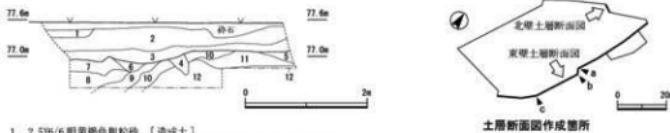
第6～8層は落ち込みを埋積する埋土で、砂質で締まりが弱い砂礫土である。

第9層は黒ボク土層であり、安定した土層であることから、東壁第4層と対応するものと考えられる。第10層は第9層から第12層への漸移層である。第9・10層は落ち込み斜面に沿って西側へと落ち込んでいており、第11・12層を削り込む形で落ち込みが形成された後に、第9・10層がその落ち込み内に堆積したことが窺われる。

第9層と、その上層に堆積する第6～8層は、全く土質が異なることや、第7・8層の間に明確な間層や漸移層が認められないことなどから、第9層が堆積した後に、砂礫土によって一気に落ち込みが埋積されたものと推定される。堆積状況からは、人為的に埋められたような状況は明確には確認できなか



第5圖 調查區東壁土層斷面圖 (1:80)



1. 2.5V/6 明黄褐色粗松砂。【造成土】
2. 10V2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。小礫（径2～5mm）を3%含む。
3. 10V2/3 墓園色シルト～中粒砂。10V2/6 黄褐色中粒砂を斑状に30%含む。【堆積土?】
4. 10V2/3 墓園色シルト～中粒砂。
5. 10V2/3 墓園色シルト～細粒粘砂。小礫（径2～5mm）を3%含む。
6. 10V2/3 黑褐色粗松砂を斑状に含む。小礫（径2～5mm）を7%含む。砂質。
7. 10V2/3 黑褐色粗松砂を斑状に含む。小礫（径2～5mm）を10%含む。砂質。【落ち込み堆土】
8. 2.5V/4 オリーブ褐色中粒砂～細粒粘砂。小礫（径2～5mm）を10～20%含む。砂質。縦まり弱い。【落ち込み堆土】
9. 10V2/3 黑褐色シルト～細粒粘砂。小礫（径2～5mm）を1%含む。【落ち込み堆土】
10. 10V2/3 にぶく黄褐色シルト～中粒砂。小礫（径2～5mm）を3～5%含む。【落ち込み堆土】
11. 10V2/6 黃褐色細粒粘砂～細粒砂。含む砂質。縦まり強い。
12. 10V2/6 黄褐色細粒粘砂～細粒砂。含む砂質。縦まり強い。

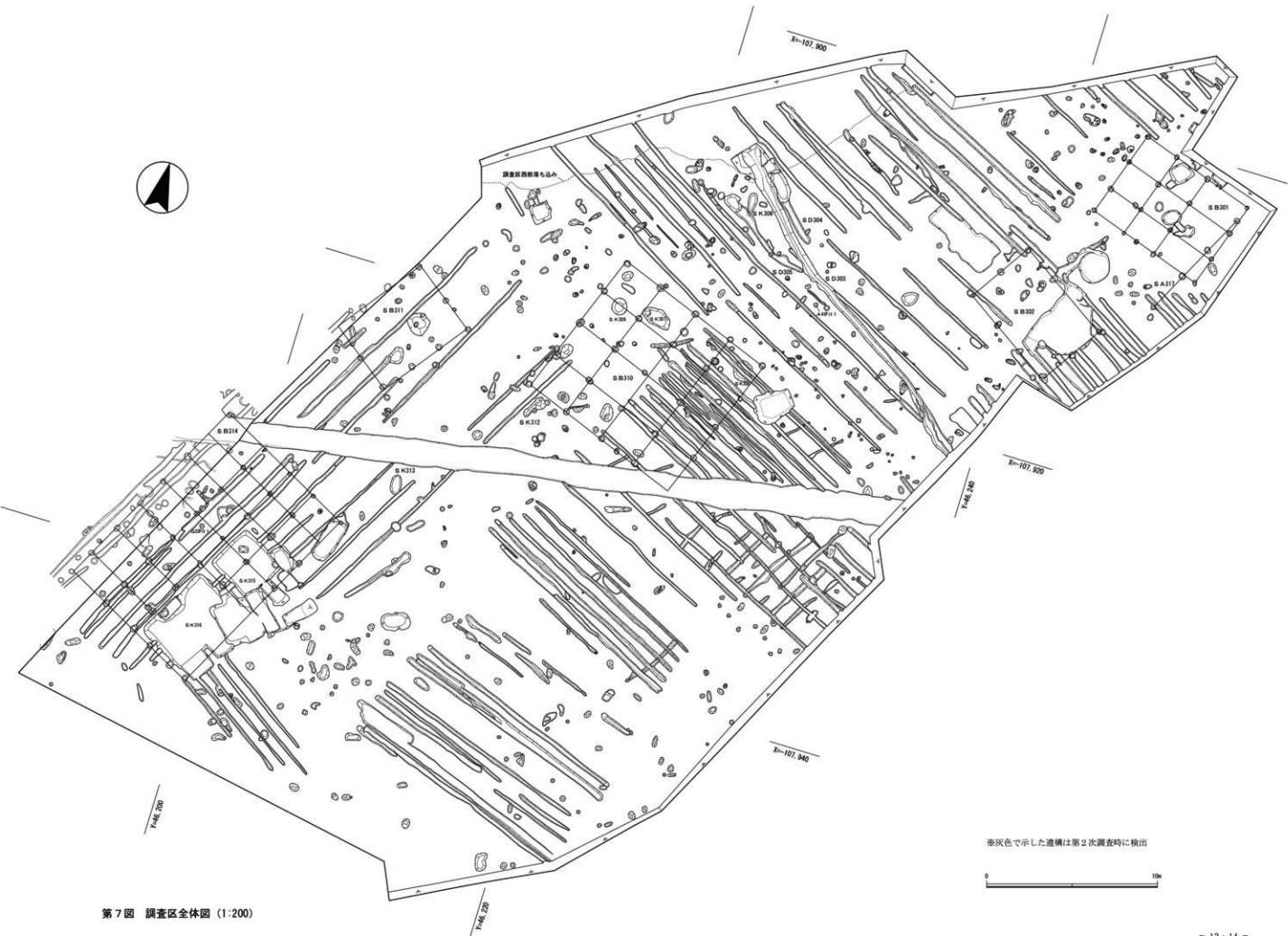
第6図 調査区北壁土層断面図 (1:80)

った。

なお、平安時代末～鎌倉時代前期の溝S D303がこの落ち込みへ排水する機能を持つことと、落ち込み内の砂礫土の堆積はSD 303の埋没後であること<sup>4)</sup>、落ち込み上面にも近世～近代の耕作溝が確認できることから、落ち込みが砂礫土によって埋没したのは近世の可能性が高い。

## 註

- 1) 第2次調査において河川跡 (SR45) とされたものである。
- 2) 竹谷川支流よりも西側で工事の際に露出した土層断面を観察したところ、同様に黒色土層が2～3層堆積している状況が認められた。局所的なものではなく、調査区周辺に広く認められる堆積状況であると考えられる。
- 3) 第VI章第2節、第VII章第1節参照。
- 4) 第V章第1節参照。



第7図 調査区全体図 (1:200)

10m



## 第IV章 縄文時代の遺物

第2次調査では、縄文時代の遺構とされる不整形な土坑状の遺構がいくつか検出されているが、今回の調査では縄文時代の明確な遺構は検出されなかつた<sup>1)</sup>。

ただし、包含層や耕作溝などから縄文時代の遺物が少量出土している。

**縄文土器（第8図1～3）** 1～3は縄文土器である。

1は内傾する口縁部片で、外面には口縁部直下に口縁と平行する沈線が2条みられる。下位の沈線はやや屈曲しており、直線ではない可能性が高い。外面の口縁部と沈線との間には、撚糸文もしくは条線文と思われるものが、わずかに残る。中期後葉～後期中葉のものと考えられる。

2は注口土器の注口部である。注口部のみの破片で、体部へつながる部分は遺存しない<sup>2)3)</sup>。東壁の第7層にあたる土層<sup>4)</sup>もしくはその上面から出土している。わずかに反りがあり、外面はミガキによって調整されている。後期中葉のものと考えられる。

3は刻目のある突帯が貼り付けられた、突帯文土器深鉢の口縁部片である。突帯は細く低平で、刻目はD字形である。晚期後葉の五貫森式期のものと考

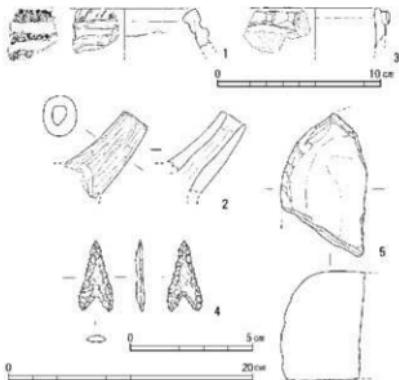
えられる。

**石器（第8図4・5）** 4は全長2.9cmの回基無茎石鐵である。包含層より出土した。縄文時代早期から後期にかけて作られていた形態である<sup>5)</sup>。側縁は直線的に調整されており、剥離調整の痕跡が鋭く残る。石材はサスカイトで、重量は0.91gである。

5は台石であると思われる。耕作溝より出土した。破損しており全体の形態は不明である。粗粒玄武岩の転石を利用して作られている。平らな面を底にすることで使用時の安定を図ったと考えられる。上面には、使用に伴う摩耗によってできたなだらかな窪みが縁部から中央部に向かってみられる。

### 註

- 1) S K306とした土坑からは縄文土器と思われる土器の細片のみが出土したが、中世以降の溝S D305を切っており、縄文時代の遺構ではないと判断される。
- 2) 大久保道路では第2次調査でも注口土器の注口部が出土しており、縄文土器全体の出土量が少ない割に、注口部が2点も出土している点は注意されよう。
- 3) 注口土器については、祭祀等に関わって注口部と体部の意図的な分割がなされていた可能性も指摘されている。  
川添和哉「縄文時代後期注口土器の発達状況に基づく分析—豊田市今朝平遺跡出土資料より—」『研究紀要』第12号・愛知県埋蔵文化財センター 2011。
- 4) 第Ⅲ章第2節参照。
- 5) 菅栄太郎「石鐵資料の形式および製作技法の編年的検討」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』 大阪市文化財協会 1995。



第8図 縄文時代遺物実測図  
(1・3は1:3、2・5は1:4、4は1:2)

# 第V章 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物

## 第1節 遺構

平安時代～鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物、柱列、溝、土坑、ピットが検出されている。以下、個々の遺構について種別ごとに詳述したい。

なお、いくつかの土坑については掘立柱建跡の内部から検出されており、建物に伴う施設と考えられるため、掘立柱建物とともに記述する。

### ①掘立柱建物

**S B301 (第11図)** 調査区北部で検出された、7.3 × 5.4mの規模を持つ総柱建物である。調査区の拡張によって全体を検出した。

桁行3間、梁行3間の建物である。柱間は桁行が1.6～1.9m、梁行が2.2mほどであるが、桁行の東側1間についてはやや柱間が長く、2.9mある。

柱穴埋土の状況や柱穴内の遺物出土状況などから、建物廃絶時に柱はすべて抜き取られたものと考えられる。

柱穴P16から陶器片口鉢の底部片が出土している(第9図)。大きな破片で、柱穴の中央部から出土

していることから、柱を抜き取った後に柱穴に入れられたものと思われる。

建物内部からは土坑などは検出されなかった。

柱穴から出土した遺物からみて、平安時代末～鎌倉時代前期の建物と考えられる。

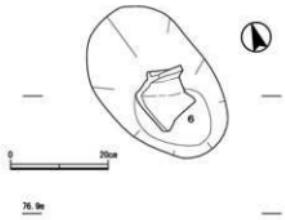
**S B302 (第12図)** 調査区北部で検出された、6.1 × 4.1mの規模を持つ側柱建物である。調査区の拡張によって全体を検出した。

桁行3間、梁行2間の建物で、柱間はいずれも2.2mほどである。

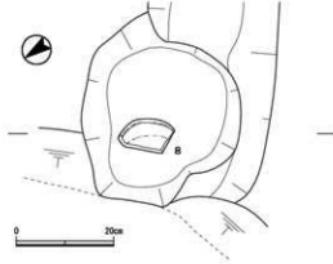
柱穴P3・9では柱の抜き取りによると思われる柱穴の変形がみられたことや、柱穴埋土の堆積状況、柱穴内の遺物の出土状況から、建物廃絶時に柱はすべて抜き取られたものと考えられる。

柱穴P4・8から土器器皿が出土している。P8から出土した破片はやや大きく、柱穴の中央部から出土していることから、柱を抜き取った後に柱穴に入れられたものと思われる(第10図)。

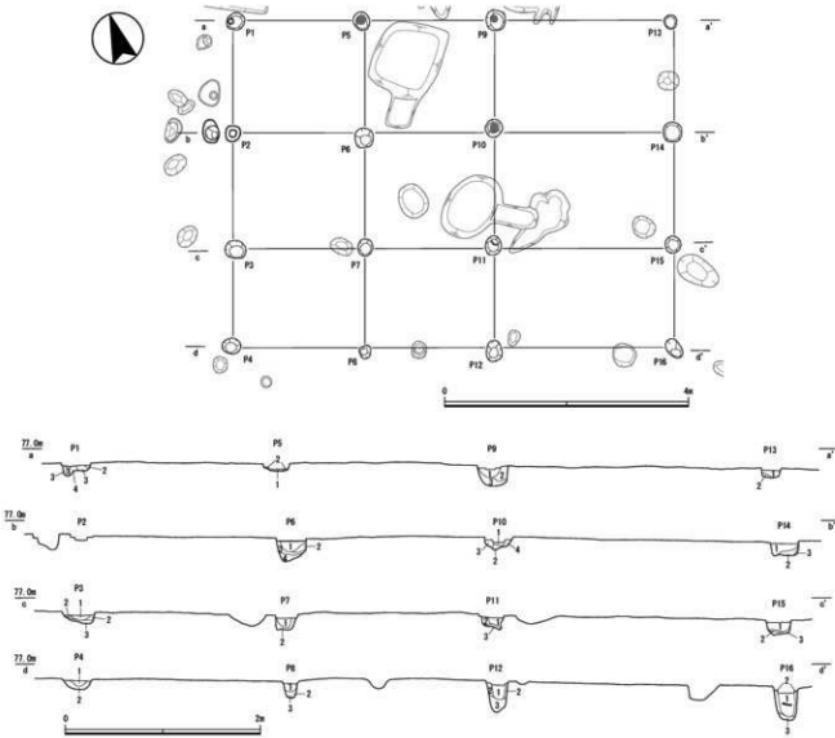
また、柱穴P7と重複する耕作溝内から黒色土器



第9図 S B301 P16遺物出土状況図 (1:10)



第10図 S B302 P8遺物出土状況図 (1:10)



[P1]

1. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。縫まり弱い。[動物屍見？]
2. 10YR4/4 黑褐色シルト～中粒砂。含む。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。縫（径 2～5 mm）を 3 % 含む。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5 cm）を 20%、小穢（径 2～4 mm）を 1 % 含む。

[P2]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5～1.5cm）を 30 % 含む。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5～1.5cm）を 30 % 含む。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂が現状に混じりあう。

[P3]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小穢（径 2～3 mm）を 1 % 含む。

[P4]

1. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

[P5]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小穢（径 2～4 mm）を 1 % 含む。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂が層状に混じりあう。
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 棕色シルト～細粒砂が現状に混じりあう。
4. 10YR2/3 棕褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 1～2 cm）を 10 % 含む。

[P6]

1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 5～10 cm）を 2 % 含む。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5～1.5 cm）を 40 % 含む。

[P7]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小穢（径 2～4 mm）を 1 % 含む。
2. 10YR2/3 棕褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 棕色シルト～細粒砂が層状に混じりあう。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

[P8]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小穢（径 2～4 mm）を 1～2 % 含む。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 棕色細粒砂～中粒砂が層状に部分的に含む。

3. 10YR2/3 黑褐色シルト～中粒砂。やや砂質。

[P10]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂が現状に混じりあう。

[P11]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。下面は一部が 7. 5YR6/6 棕色シルト～細粒砂に変化する。縫より強く混じる。

[P12]

1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

[P13]

1. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/4 棕褐色シルト～細粒砂。

[P14]

1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

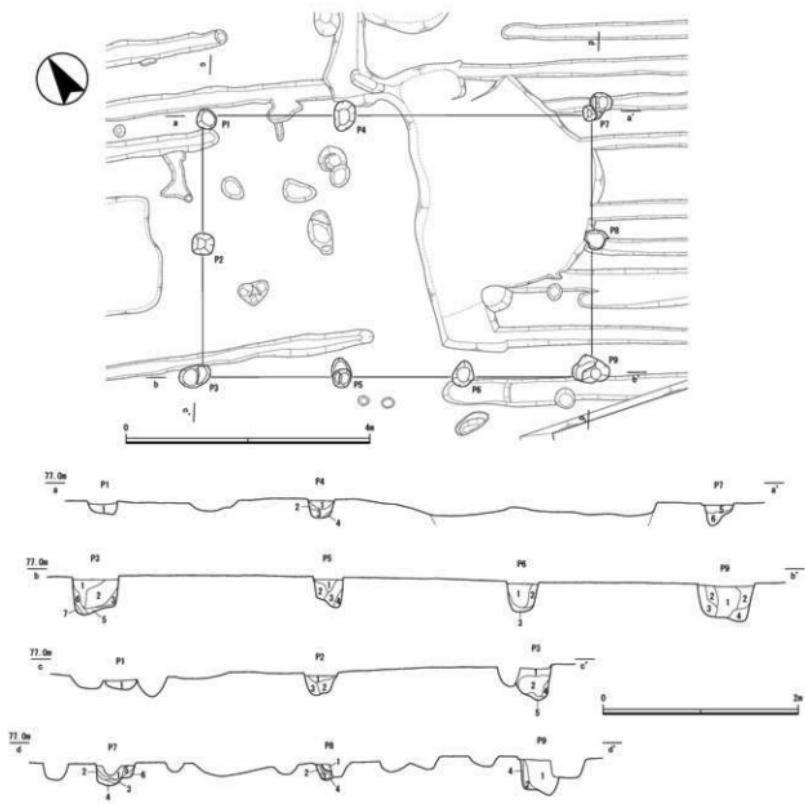
[P15]

1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

[P16]

1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

第11図 SB301平面図・土壌断面図 (1:80, 1:50)



[P1] 1. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、小礫（径2～4mm）を3～5%含む。  
[P2]

1. 10TR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR2/1 黒色シルト～極粗粒砂ブロック（径 1cm）を 1%、10TR4/6 棕褐色シルト～粗粒砂ブロック（径 0.5cm）を 3%、小礫（径 2～4 mm）を 2% 含む。  
2. 10TR4/6 棕褐色シルト～粗粒砂。10TR9/9 棕褐色シルト～極細粒砂ブロック（径

2. 101R4/6 暗褐色シルト～細粒砂、101R2/3 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1～2 cm）を20%含む。

3. 10YR3/4 單褐色シルト～細粒砂。やや貧質。  
**[P3]**  
 1. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1～2cm）を30%、10YR2/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック（径1cm）を3%。

1~2cm)を30%, 101221黒色シルト~細砂粘土プロタク(径1cm)を3%, 小礫(径2~4mm)を1%含む。

2. 10TR3/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1cm）を3%含む。  
 3. 10TR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm）を40%含む。

4-101E3/4 増強色シルト～繊維粒砂。

5. 101R4/6 棕褐色シルト～極細粒砂と 101R2/2 黒褐色シルト～極細粒砂が斑状に混じり合う。  
 6. 101R2/1 黑色シルト～極細粒砂。101R4/6 棕褐色シルト～極細粒砂ブロック（径 0.5 cm）を 5% 含む。

7. 10RE3/4 墓褐色シルト～極細粒砂。

- [4] 1. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。小礫（径2～4mm）を1%含む。  
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂と10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が混じりあう。  
 3. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。小礫（径2～4mm）を1%含む。

4. 101B2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、101B4/6 褐色極細粒砂～細粒砂を斑状に10%含む。

- [P5] 1. 10%2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、小礫（径2～4mm）を1%含む。  
2. 10%2/3 黒褐色シルト～極細粒砂、小礫（径2～4mm）を1%含む。  
3. 10%3/2 黒褐色シルト～極細粒砂、小礫（径2～4mm）を1%含む。

3. 10RE2/3 黒褐色シルト～極細粒砂と 10RE4/6 褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

4. 10%3/4 喰褐色シルト～細粒砂。

【P6】  
1. 10TR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 暗色シルト～極細粒砂ブロック（径  
0.5～1 cm）を15%、10TR2/1 黒色シルト～極細粒砂ブロック（径1 cm）を3%

2. 10TR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。  
 3. 10TR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂と 10TR4/6 暗色シルト～細粒砂が斑状に混じり合う。

りあう。  
〔四〕

1. 10TR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10TR4/6 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm）を10%含む。
  2. 10TR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂、10TR4/6 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1cm）を30%含む。

3. 10TR4/6褐色シルト～細粒砂。

4. 10TR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 棕褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1cm）を30%含む。  
 5. 10TR2/2 黒褐色シルト～極粗粒砂。  
 6. 10TR1/3 黑褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 棕褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1cm）を30%含む。

6. 10RI/3暗褐色シルト～細砂に混じるRI/6褐色シルト～細砂粒砂プロック（粒1cm）を10～20%含む。

- [PS]  
 1. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。土器片含む。  
 2. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 棕褐色シルト～極細粒砂ブロック（径1cm）を40%含む。

3. 10YR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10YR4/6 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm程度）

4. 101R2/3 黒褐色シルト～極細粒砂と 101R4/6 関色シルト～極細粒砂が斑状に混じり、小穢（径 2 mm）を 1% 含む。  
[19]

1. 10TR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂、10TR4/6 暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（径 $\geq 1.5$  cm）を2%含む。

1. 10YR2/3 黒褐色シルト～極細粒砂。10YR4/6 桃色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm）を10%、10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm）を1%含む。
  2. 10YR4/6 桃色シルト～極細粒砂。10YR4/6 桃色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1cm）を1%含む。

3. 10TR2/2 黒褐色シルト～極細粒砂。10TR4/6 暗色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1mm）を10%、10TR2/1 黒色シルト～極細粒砂ブロック（径0.5～1mm）

塊が出土している。破片はすべてP 7付近の耕作溝埋土から出土しており、本来はこの柱穴内に存在した可能性がある。

これらの柱穴から出土した遺物からみて、平安時代末～鎌倉時代前期の建物と考えられる。

**S B310／S K307・308・309（第13～16図）** 調査区中央で検出された、10.2×9.2mの規模を持つ総柱建物である。ほぼ全体が遺存しているが、南東隅の柱穴のみは擾乱によって失われている。

桁行4間、梁行4間のはば正方形の大型の建物で、柱間は桁行が2.4m、梁行が2.2mほどである。

柱穴P 5・6などでは埋土の状況からみて建物廃絶時に柱は抜き取られたと考えられるが、柱穴P 4・8では柱痕と思われる痕跡が検出されている。

柱穴P 1から山茶碗、P 4・9では土師器甕の破片が出土したが、いずれも小片で団化できなかった。

建物内部からは、3基の土坑が検出された。SK 308とSK 309はいずれも平面形が直径1mほどの円形で、深さは20cmほどと、形態に類似性が認められる。SK 308から平安時代末のロクロ土師器甕、土師器甕、山茶碗が出土した。SK 309からは土師器小皿の破片が出土している。

SK 307は長軸1.8m、短軸1mの不整梢円形の土坑で、深さは15～20cmほどある。西端部は若干深く掘り込まれている。床面からやや浮いた位置で、平安時代末の山茶碗、土師器甕、ロクロ土師器甕がまとまって出土した。いずれも完形ではなく、破損した状態で投棄されたものと思われる。

これらの土坑は、いずれも平安時代末の遺物を出土していることや、埋土に共通性が窺われるところから、同時期の遺構である可能性が高い。S B310に伴うものと推定される。

柱穴や土坑内から出土した遺物からみて、平安時代末の建物と考えられる。

**S B311（第17図）** 調査区西部で検出された、5.7×4.4mの規模を持つ側柱建物である。西側の柱列は第2次調査で検出されているが、南西隅の柱穴については耕作溝と重複しており、確認できていない。

桁行3間、梁行2間の建物である。桁行の柱間は1.9～2mほどであるが、梁間はやや広く、2～2.4mほどとなる。

柱穴P 3・4・6などでは柱痕と思われる痕跡が確認できた。P 2では埋土の状況から建物廃絶時に柱は抜き取られた可能性がある。

時期を示すような遺物は出土しなかったが、建物主軸の方向などからみて、S B302と同じく平安時代末～鎌倉時代前期の建物と推測される。

**S B314／S K315・316（第18～23図）** S B311の西側で検出された、13×9.1mの規模を持つ総柱建物である。西端の柱列は第2次調査で検出されている。東端の柱列の一部は擾乱によって失われている。

桁行7間、梁行4間の大型の建物で、桁行の柱間は1.9～2mほどであるが、南北両端の2間のみはやや狭く、1.6～1.68mほどとなっている。一方、梁行の柱間は2.2mほどが基準となるようであるが、西端の1間は2.8mほどと広く、東から2間目については1.9mほどと若干狭い。

北端の柱列は柱穴が他の柱穴に比べて一回り小さい。一方、南端の柱列では、柱穴の大きさは他のものと変わらず、また、柱の数が他の柱通りに比べて1本多い。こうした点は、S B314の建物構造と関係しているものと思われる。

柱穴P 5・6・15・16などでは埋土の状況からみて建物廃絶時に柱は抜き取られたと考えられる。P 1・2などでは柱痕と思われる痕跡が検出されているが、いずれも確実ではなく、ほとんどの柱が抜き取られたものと考えられる。

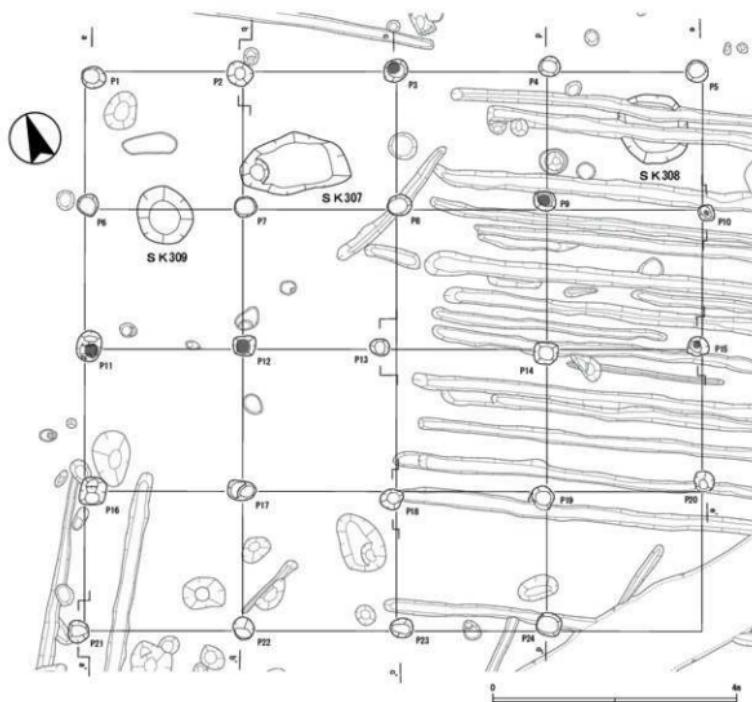
柱穴P Aから土師器小皿、P 5から山茶碗の破片が出土した（写真図版5）。また、P 6からは、柱穴埋土及び柱抜き取り痕と考えられる土層内から鉄滓が1点ずつ出土している（写真図版6）。

建物内部の南東部では、方形の土坑が南北に2基並んで検出された。

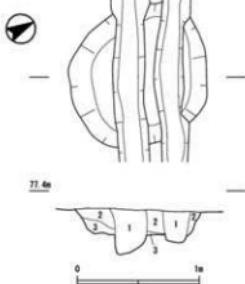
北側のSK 315は南北2.9m、東西3.1mのはば正方形の土坑で、東側を擾乱によって破壊されているが、東壁の一部がかろうじて遺存しており、規模が判明した。中央部の床面で柱穴が検出された。

埋土中からは、山茶碗や陶器広口壺、青磁碗の破片が出土した。いずれも床面直上ではなく、埋土中層や上層からの出土である。

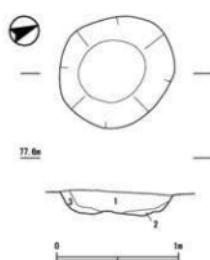
南側のSK 316は南北4.9m、東西3.4mの長方形の土坑である。SK 315と同じく東側を擾乱によっ



SK 308



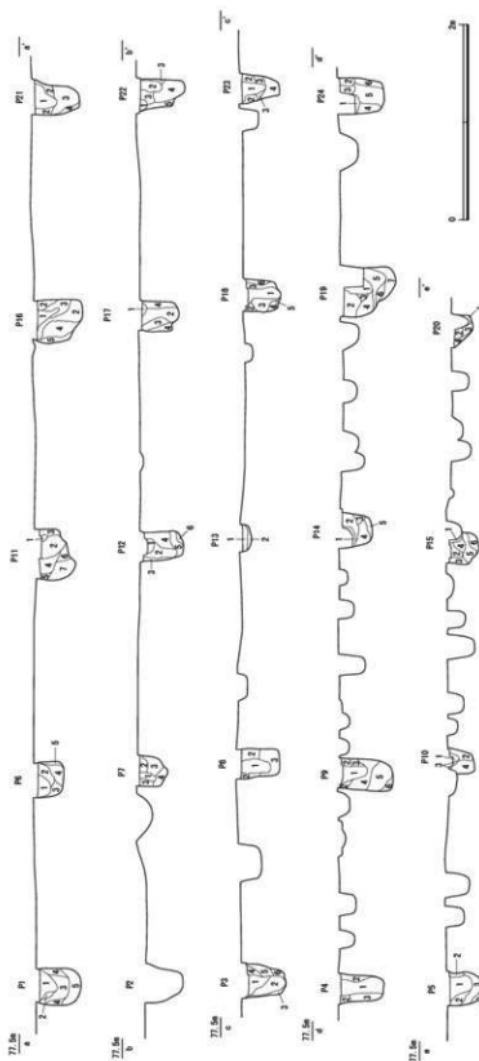
SK 309



1. 10YR2/3 黒褐色細粒砂～細粒砂。10YR4/4 黄褐色細粒砂ブロックを 40%。  
小礫（径 2 ~ 6mm）を 2% 含む。〔斜面帯〕  
2. 10YR2/2 黒褐色細粒砂～細粒砂。小礫（径 2 ~ 6mm）を 5% 含む。  
3. 10YR2/2 黄褐色細粒砂。小礫（径 2 ~ 3mm）を 1% 含む。

1. 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂。小礫（径 2 ~ 5mm）を 1% 含む。土器片  
含む。  
2. 10YR3/2 黑褐色シルト～細粒砂。  
3. 10YR3/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄色シルト～細粒砂を斑状に  
10% 含む。

第13図 SB310平面図(1:80)、SK308・309平面図・土層断面図(1:40)



[P1] 10921/2 黄褐色シルト～細粒砂岩、小槽（径2～3mm）を10～30%含む。  
2. 10921/3 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
3. 10921/4 黄褐色シルト～細粒砂岩、小槽（径2～3mm）を5%含む。砂質。  
4. 10921/5 黄褐色シルト～細粒砂岩、小槽（径2～3mm）を2～5%含む。砂質、縫まり弱い。

[P2] 10921/6 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/7 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
3. 10921/8 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P3] 10921/9 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/10 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P4] 10921/11 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/12 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P5] 10921/13 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/14 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P6] 10921/15 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/16 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P7] 10921/17 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/18 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P8] 10921/19 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/20 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P9] 10921/21 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/22 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P10] 10921/23 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。  
2. 10921/24 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P11] 10921/25 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P12] 10921/26 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P13] 10921/27 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P14] 10921/28 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P15] 10921/29 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P16] 10921/30 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P17] 10921/31 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P18] 10921/32 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P19] 10921/33 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

[P20] 10921/34 黄褐色シルト～細粒砂岩、10%灰黑色角巣岩砂～細粒砂岩をブリオカ状に10%含む。砂質。

## [P12]

1. 10YR2/1 黒褐色シルト～細粒砂。均質。【柱状】
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~3cm）を5~7%、小礫（径2~5mm）を1~3%含む。縫まり無い。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1cm）を5%含む。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2~4mm）を3%含む。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径3cm）を20%含む。
6. 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂。10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂が斑状に混じり、やや粘質。

## [P13]

1. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂。

## [P14]

1. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~2cm）を40%含む。【耕作層】
2. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1cm）を40%含む。
4. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~2cm）を2%含む。
5. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂（径0.5~1cm）を3%含む。

## [P15]

1. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~2cm）を40%含む。【耕作層】
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径0.5cm）を30%含む。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂（径2~3cm）を30%含む。
4. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂が混じりあう。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
6. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2~4mm）を2%含む。縫まり無い。

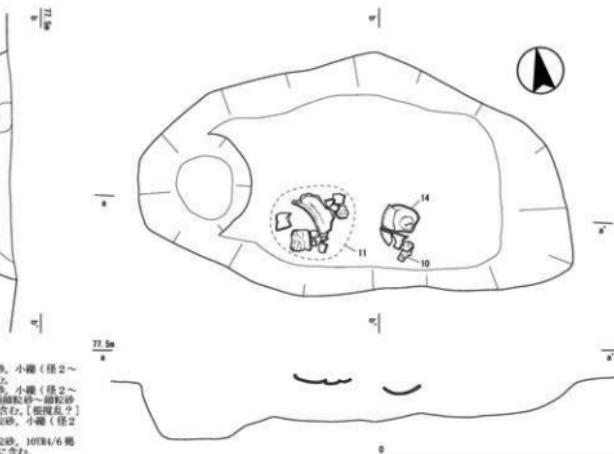
## [P16]

1. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。均質。【柱状】
2. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂を部分的に少量（約1~2cm）含む。
4. 10YR2/3 單褐色シルト～細粒砂と 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2~4mm）を5~7%含む。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~2cm）を3~5%含む。

## [P17]

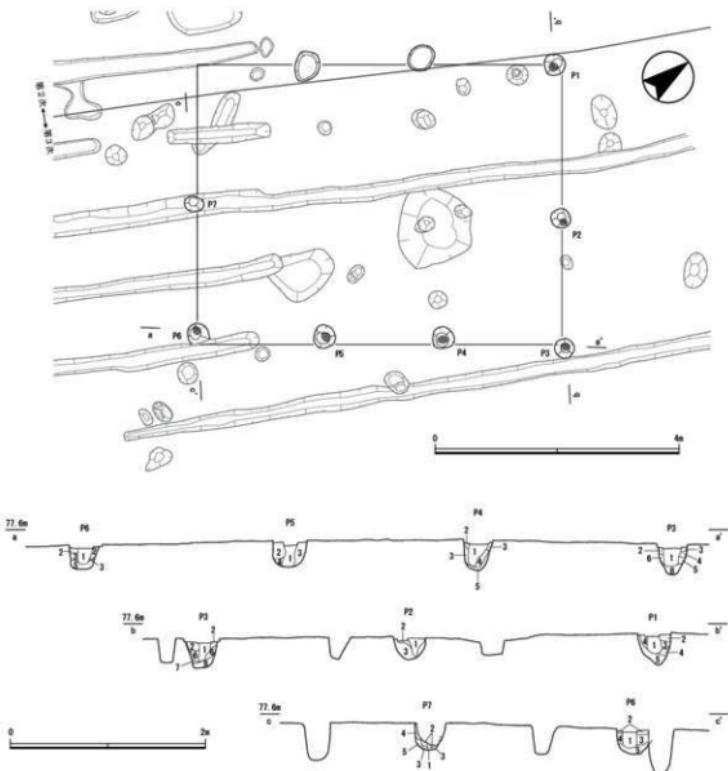
1. 10YR2/4 單褐色シルト～細粒砂。
2. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
6. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

第15図 S B310土層断面図②



1. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2~4mm）を1%、小礫（径2~5mm）を3%含む。
2. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2~4mm）を1%、10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径1~2cm）を10%含む。【耕作層】
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
4. 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
6. 10YR2/1 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

第16図 S K307平面図・土層断面図・遺物出土状況図 (1:20)



[P1]

1. 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。小礫（径2 mm）を1%含む。【柱痕】
2. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。小礫（径2～4 mm）を1%含む。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。10YR3/4 黑褐色シルト～細粒砂が斑状に5～10%、小礫（径2 mm）を1%含む。
4. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒砂。10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂を斑状に1%、小礫（径2 mm）を1～2%含む。【柱痕】
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2～4 mm）を1%含む。やや砂質。

[P2]

1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。10YR3/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に3%、小礫（径2～4 mm）を1%含む。
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2 mm）を1～3%含む。
3. 10YR3/3 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に20～30%、小礫（径2～3 mm）を1～3%含む。やや砂質。

[P3]

1. 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂。均質。【柱痕】
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂ブロック（径0.5～1 cm）を10%含む。
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2～3 mm）を1%含む。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂ブロック（径0.5～1 cm）を30～40%含む。
6. 10YR3/1 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂を斑状に少量含む。
7. 10YR4/3 喀褐色シルト～細粒砂。10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に20～30%含む。やや砂質。
8. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2 mm）を3%含む。やや砂質。

[P4]

1. 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂。均質。【柱痕】
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂を斑状に10%含む。
4. 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂。
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

[P5]

1. 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂。均質。【柱痕】
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2 mm）を1%含む。
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2～3 mm）を3%含む。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂を斑状に20～30%含む。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2～4 mm）を3%含む。

[P6]

1. 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂。均質。【柱痕】
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2～7 mm）を1～2%含む。
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。小礫（径2～7 mm）を3%含む。
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂を斑状に30～35%含む。
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。小礫（径2～4 mm）を3%含む。

[P7]

1. 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂。均質。【柱痕】

2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂と 10YR4/4 喀褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

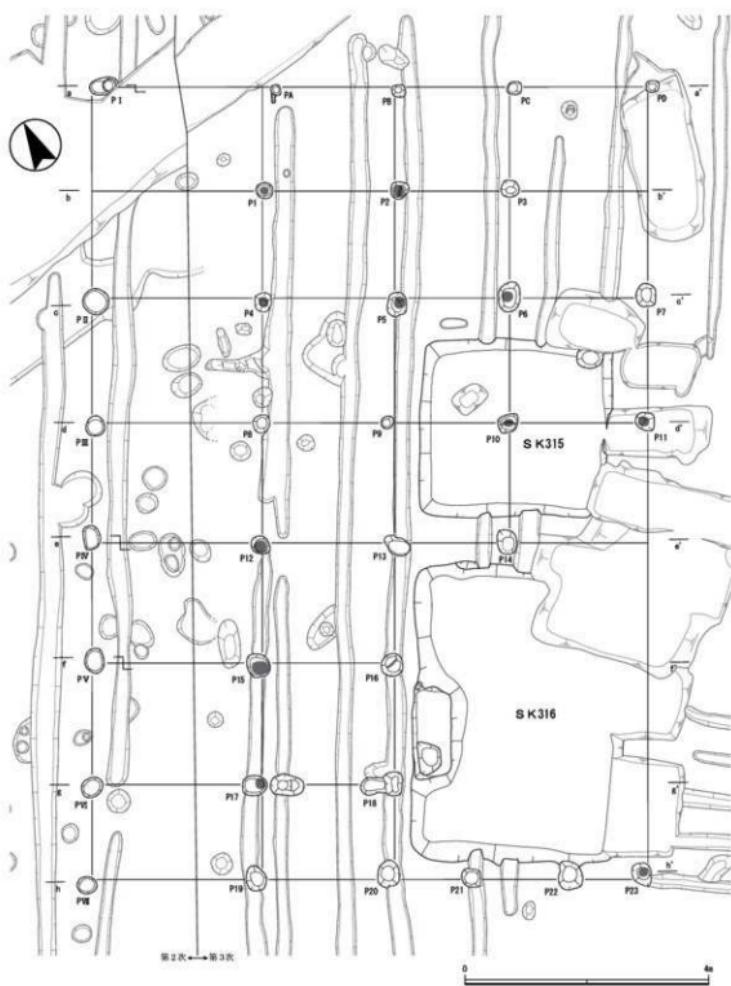
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。

4. 10YR5/2 黑褐色シルト～細粒砂。

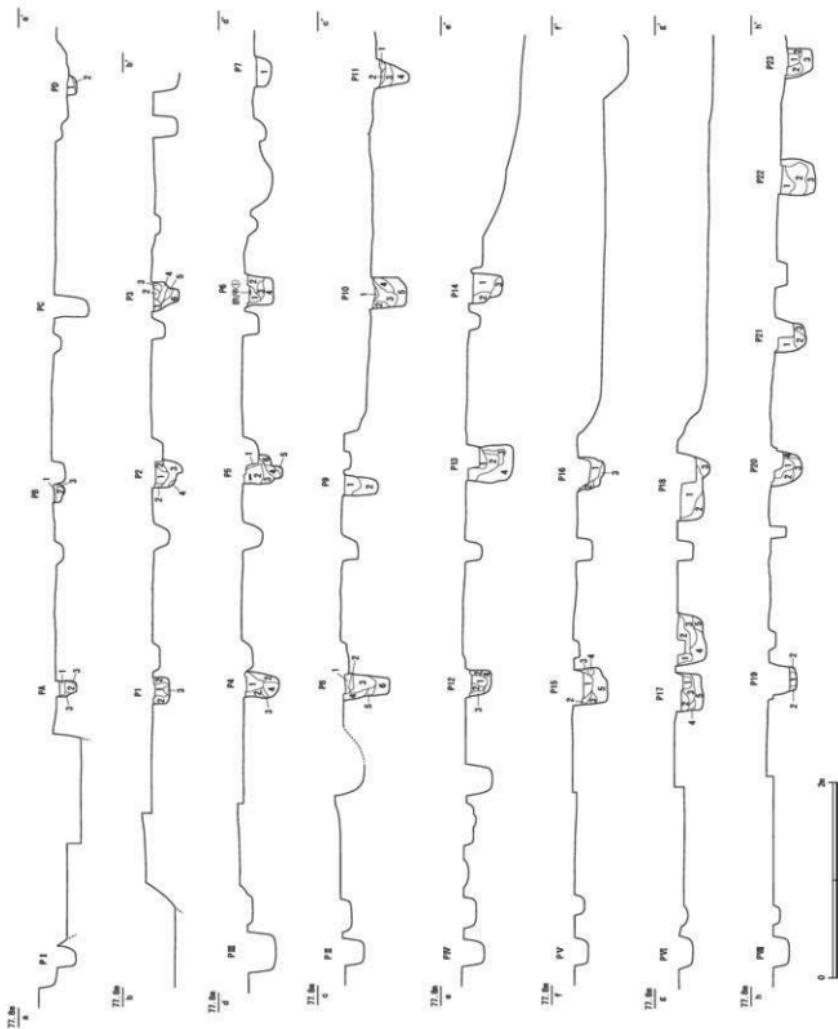
5. 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂。

6. 10YR4/6 喀褐色シルト～細粒砂。

第17図 S B311平面図・土層断面図 (1:80、1:50)



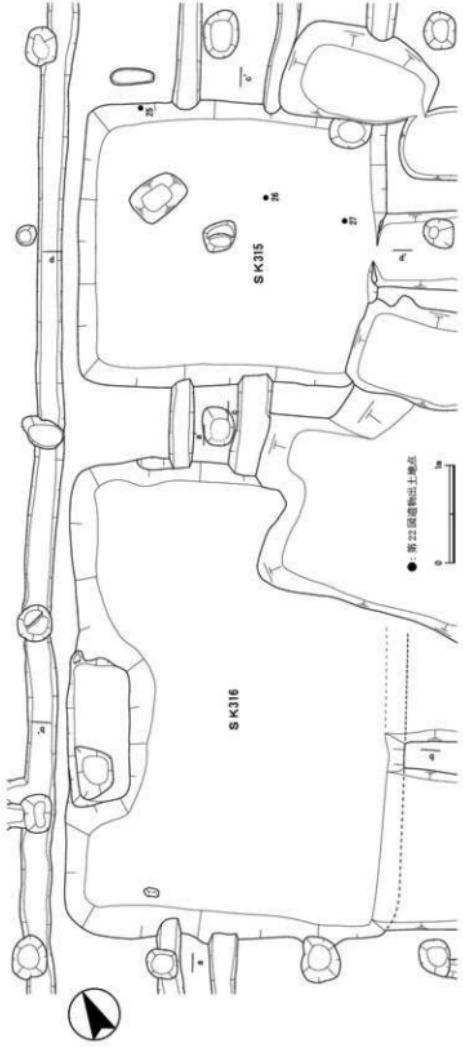
第18図 SB314平面図 (1:80)



第19圖 S-B314土壤斷面圖① (1:50)

- [14] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~cm）を 20%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
3. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
4. 10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂，10YR4/3 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 1~2cm）を 30%含む。  
5. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂。  
[15] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1cm）を 40%，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1~4mm）を 40%含む。  
3. 10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
[16] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1cm）を 5%，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1~4mm）を 3%，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
3. 10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 黄褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
4. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂。  
[17] 1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/4 喷綠色シルト～細粒砂ブロック（径 1cm）を 20%含む。  
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1cm）を 1%，小穢（径 2~5mm）を 1%含む。  
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 1cm）を 10%，小穢（径 2~4mm）を 20%含む。  
6. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
[18] 1. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~1cm）を 1%，小穢（径 2~5mm）を 1%含む。  
2. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 1cm）を 10%，小穢（径 2~4mm）を 20%含む。  
3. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂。  
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~4mm）を 1~3%含む。  
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
6. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
[19] 1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~4mm）を 1%含む。締め無い。浮遊物有り。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 1~2cm）を 5%，小穢（径 2~4mm）を 2~3%含む。  
3. 10YR2/2 黄褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 1%含む。  
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~cm）を 10%含む。  
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。  
6. 10YR4/6 喷綠色シルト～細粒砂，【地山？】  
[20] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 1cm）を 5%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂。  
[21] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 2%含む。  
2. 10YR4/6 黄褐色シルト～細粒砂，10YR6/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~cm）を 5%，小穢（径 2~4mm）を 2~3%含む。  
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~5mm）を 2~3%含む。  
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂ブロック（径 0.5~cm）を 30%含む。  
5. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~4mm）を 10%含む。  
[22] 1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に 40%含む。  
2. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂。  
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，【地山？】  
4. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，【地山？】  
[23] 1. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~4mm）を 2%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 5~10%含む。やや砂質。  
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 喷綠色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。少々砂質。  
[24] 1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~4mm）を 2%含む。  
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，小穢（径 2~3mm）を 5~10%含む。少々砂質。  
3. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 喷綠色シルト～細粒砂ブロック（径 1cm）を 1%含む。締め無い。  
4. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒砂，10YR4/6 棕褐色シルト～細粒砂が斑状に混じりあう。

第20図 SB314土層断面図②



1. 10102/4 布目層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 3 %含む。[耕作層]
  2. 10102/3 黄褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 3 m) を 5 %。10102/3 黄褐色細粒砂層ブロック (厚さ 1 ~ 3 m) を 1 %含む。
  3. 10102/4 布目層 (厚さ 2 ~ 3 m) を 5 %含む。
  4. 10102/3 黄褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 3 m) を 3 %含む。
  5. 10102/2 黒褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 1 %含む。
  6. 10102/2 黒褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 1 %含む。
  7. 10102/2 黒褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 1 %含む。
  8. 10102/2 黒褐色細粒砂層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 1 %含む。
  9. 10102/4 布目層 (厚さ 2 ~ 6 mm) を 1 %含む。
  10. 10102/3 黄褐色細粒砂層 (厚さ 5 m) 含む。
  11. 10102/3 黄褐色細粒砂層 (厚さ 5 m) 含む。
  12. 10102/3 黄褐色細粒砂層 (厚さ 5 m) 含む。
1. 10102/2 黒褐色細粒砂層と 10102/3 黄褐色細粒砂層の間に「耕作層」。  
2. 10102/3 黄褐色細粒砂層と 10102/2 黒褐色細粒砂層の間に「耕作層」。  
3. 10102/2 黒褐色細粒砂層と 10102/3 黄褐色細粒砂層の間に「耕作層」。  
4. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

5. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

6. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

7. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

8. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

9. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

10. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

11. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

12. 小槽 (厚さ 2 ~ 4 mm) を 2 %含む。

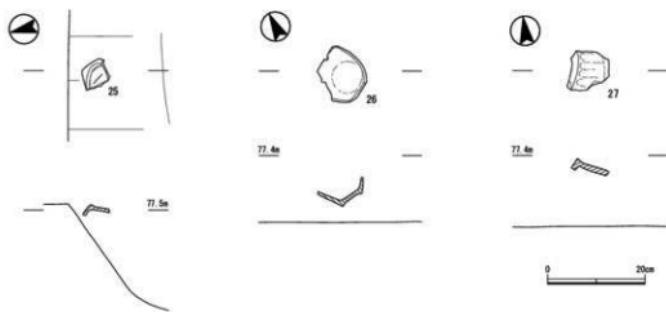
第21図 S K315・S K316平面図・土質断面図 (1:50, 1:40)

て破壊されているが、西壁のごく一部や北東隅部分がかろうじて遺存しており、規模が判明した。床面では柱穴は確認できなかった。西側の壁面付近では、低い段状になった部分が確認された。土坑内からの出入り口になっていた箇所と考えられる。

埋土中からは、土師器甕や山茶碗の破片が出土した。南側の床面上からは礫が検出されており、何らかの用途に用いられていた可能性がある<sup>1)</sup>。また、北西隅部分では検出面から床面直上にかけて、褐色

の土塊が多数検出された。この土塊は北西部に集中して出土した（第23図）。出土状況からは、土坑の北西側から流入してきたように見受けられた。

なお、SK315・316ともに床面は平坦に整えられており、非常に硬く縮まっている。床面を撕ち割つたところ、5cmほどの厚さで硬化層がみられた。（第21図左図第8層・右図第6層）この硬化層には、鉄分が沈着したような茶褐色を呈する部分が観察された。この硬化部分について蛍光X線分析を行ったが、



第22図 SK315遺物出土状況図 (1:10)



第23図 SK316土塊出土状況図 (1:20)

カルシウムや鉄分など、土壤を硬化させるような成分が付近の土壤より多く含まれている様子は確認できなかった。叩き締めによるものか、あるいは有機質の成分によって硬化したものと推定される<sup>2)</sup>。

柱穴や土坑内から出土した遺物から、S B314は鎌倉時代前期の建物と考えられる。

### ②柱列

**S A317 (第24図)** 調査区北部の拡張区で検出された、延長7.1mの北東から南西に向かって続く柱列である。S B301と重複する。

4本の柱からなり、柱間は両端が2.4m、中央が2.1mとやや不統一であるが、柱穴が直線上に並ぶことや、埋土の類似性などから一連の柱列と推定した。掘立柱建物の一部である可能性もあるが、直交方向へ延びる柱穴は確認できなかった。

柱穴P 1から土器壺の口縁部片が出土した。

柱穴から出土した遺物から、平安時代末～鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

### ③溝

**S D303 (第25図)** 調査区の中央や北寄りで検出された、東西方向にやや蛇行しながらのびる溝である。西端は調査区西側の落ち込みに合流する。

幅は30～80cmほどである。東側では浅く、調査区東壁付近では検出面から30cmほどの深さであるが、

西側の落ち込みに向けて急激に深くなり、落ち込みとの合流部では検出面から0.8～1mほどの深さとなる。また、断面形も東側では緩やかなU字形であるが、西側では鋭いV字形になる。こうしたことからみて、西側の落ち込みへ向かって排水する機能を有していたと判断できる。

埋土は均質な黒色土が中心で、人為的に埋め戻された痕跡は認めがたい。西側落ち込みとの合流地点では、落ち込みに向かって漸移的に埋土が変化していく状況が観察され、落ち込みとともに徐々に埋没していくものと思われる。

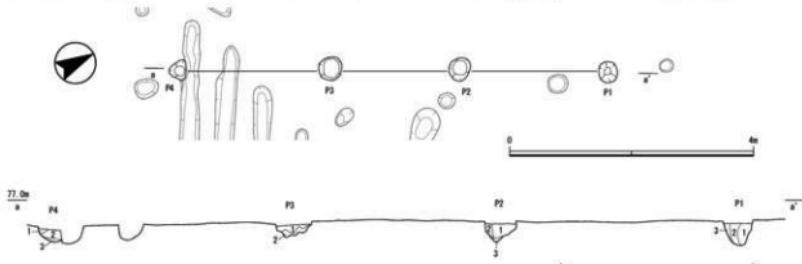
埋土の最上部より、表土掘削時にほぼ完形の山茶碗1点が出土した。また、西側落ち込みとの合流地点からも山茶碗が出土した。これらの他にも、土器壺や山茶碗の細片が少量出土している。

こうした出土遺物からみて、この溝は平安時代末～鎌倉時代前期に機能しており、鎌倉時代前期のうちに埋没していたものと考えられる。

**S D304 (第25図)** S D303の北側で検出された短い溝状の遺構である。不整形で、西側は深くなり土坑状となっている。埋土は暗褐色を呈し、他の古代～中世の遺構とは若干異なる。

出土遺物はなく時期は不明であるが、S D303との重複関係から、S D303埋没後に形成された遺構とみられる。

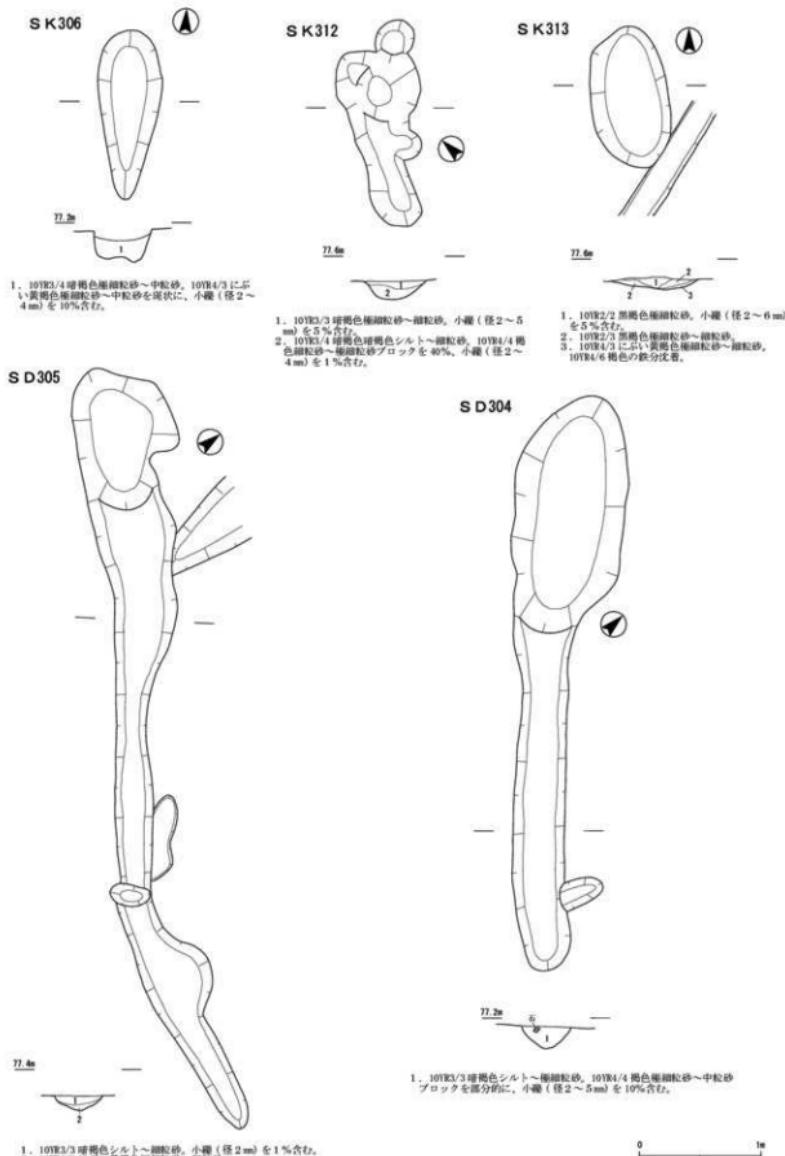
**S D305 (第25図)** S D303の南側で検出された短



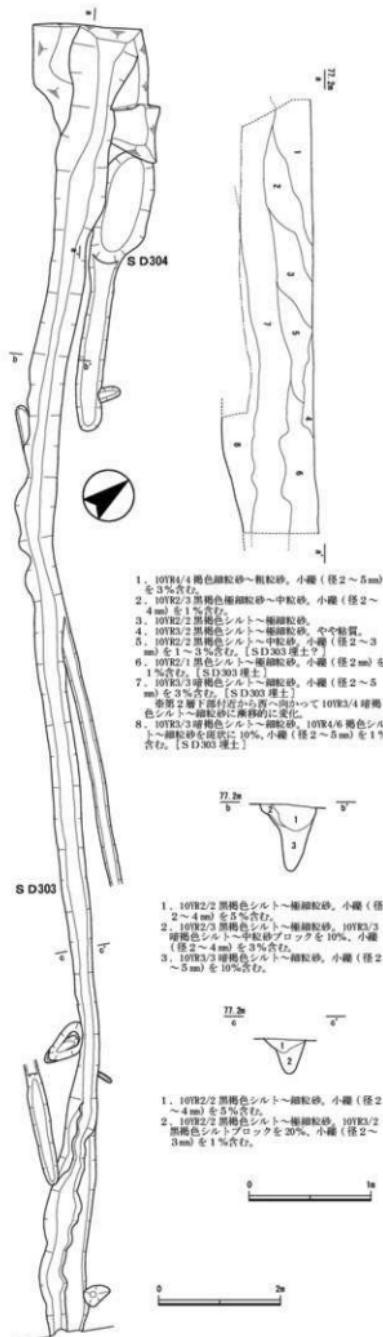
- [P1]  
1. 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒粘砂。  
2. 10Y4/4 黑褐色シルト～細粒粘砂。粘質。  
3. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/6 黑褐色シルト～細粒粘砂ブロック (径3cm) を1%含む。  
[P2]  
1. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂ブロック (径3cm) を1%含む。  
2. 10Y2/1 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/5 黑褐色シルト～細粒砂を層状に50%含む。  
3. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂と10Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂を層状に混じり合う。

- [P3]  
1. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂ブロック (径0.5～1cm) を1%含む。  
2. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂ブロック (径0.5～1cm) を0.5%含む。  
[P4]  
1. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。小窓 (径2～4mm) を1%含む。  
2. 10Y2/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂ブロック (径1cm) を3%含む。  
3. 10Y3/2 黑褐色シルト～細粒粘砂。10Y3/2 黑褐色シルト～細粒砂を層状に5%含む。下面の一部は7.5Y4/6 黑褐色シルト～細粒砂。非常に縦まり悪い。

第24図 S A317平面図・土層断面図 (1:80、1:50)



第25図 溝・土坑平面図・土層断面図 (1:40)



い構造の遺構である。不整形で、西端部は小型の土壙状を呈する。埋土はSD 304と類似している。

山茶碗の細片が出土しており、鎌倉時代前期以降に形成された遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。SD 303及びSK 306との重複関係からは、SD 303が埋没してからSK 306が形成されるまでの間の遺構とみられる。

#### ④ 土坑

**S K 306 (第25図)** 不整形な深い土坑で、風倒木痕の可能性もある。縄文土器と思われる土器片が出土した。少なくとも、鎌倉時代以降に形成された遺構である。

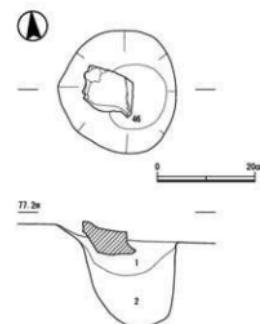
**S K 312 (第25図)** 不整形な深い土坑である。風倒木痕の可能性もある。埋土から山茶碗の破片が1点出土したが、細片のため図化できなかった。鎌倉時代以降に形成された遺構であると思われる。

**S K 313 (第25図)** S B314の東側で検出された土坑である。平面形は不整形な楕円形で、検出面からの深さは10cmほど浅い。

表土掘削時に、埋土最上部より完形の土師器小皿や、完形に近い山茶碗が出土した。これらの出土遺物から、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

#### ⑤ ピット

**A41Pit 1 (第27図)** 調査区中央部付近に位置す



第27図 A41Pit 1 遺物出土状況図 (1:10)

るA41グリッドにおいて、S D303南側で検出されたピットである。掘立柱建物や櫓を構成するような状況は確認できなかった。

上層から砥石が出土した。砥石以外に遺物の出土はなく、時期は不明であるが、埋土は掘立柱建物の柱穴埋土と類似しており、掘立柱建物と同じく平安時代末～鎌倉時代前期のものと推定される。

**G33Pit1（第7図）** G33グリッドで検出されたピットである。S B314内部に位置するが、柱筋に

は並んでおらず、S B314との関係は不明である。

埋土から山茶碗の底部片が出土した。埋土はS B314の柱穴埋土と類似しており、平安時代末～鎌倉時代前期の遺構と推定される。

## 註

1) 繰には加工痕や使用痕がみられなかったため、遺物として取り上げていない。

2) 第VI章第2節参照。

## 第2節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、12世紀～13世紀前半の平安時代末～鎌倉時代前期のものが主体である。土師器、山茶碗、陶器、青磁、石製品などが出土地内以外からも、耕作溝内や包含層などから複数の遺物が出土している。

以下、遺構や出土層位ごとに出土遺物について述べていきたい<sup>1)</sup>。

### ①遺構出土遺物（第28～30図）

#### S B301出土遺物（第28図6）

6は柱穴P 16から出土した陶器片口鉢である。底面から体部にかけての破片で、やや高い高台が付く。底面と体部との境は明瞭に屈曲し、外面下半は回転ヘラケズリによって調整されている。また、内面下半は摩耗しており、使用痕跡と思われる。12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

#### S B302出土遺物（第28図7～9）

7は柱穴P 4から出土した土師器皿である。外面上半にはヨコナデが施され、下半にはユビナデが認められる。口径はもう少し大きくなる可能性がある。

8は柱穴P 8から出土した土師器皿である。口縁端部は丸く收められ、内面には浅い沈線がめぐらされる。外面上半にはヨコナデが施され、下半にはユビオサエの痕跡が残る。

9は柱穴P 7と重複する耕作溝埋土中から出土した黒色土器塊である。口縁部の破片で、口縁端部は丸く收められ、内面には浅い沈線がめぐらされる。内面は丁寧なヨコミガキによって調整され、黒化処理がなされている。外面は黒化処理がなされておらず、口縁部付近はケズリもしくはナデによって調整

され、下半のみヨコミガキによって調整される。

土師器皿は12世紀代、黒色土器は11世紀～12世紀前半のものと考えられる。

#### S B310／S K307・308・309出土遺物（第28図10～21）

S B310の柱穴からは土師器・山茶碗等の細片が出土したが、図化できるものはなかった。しかしながら、建物内に位置する土坑S K307・308・309からは、多数の遺物が出土した。

**S K307（10～14）** 10はロクロ土師器小皿である。底部から口縁部にかけての破片で、底部から口縁部にかけて直線的にのびる。底部外面に糸切り痕が残る。

11は土師器甕である。頭部の屈曲はやや緩やかで、口縁端部は内側に折り返して肥厚させている。体部外面上半はユビオサエやユビナデ、内面上半は工具ナデによって調整される。図化したものの他にも同じ個体と思われる多数の破片が出土しているが、ほとんど接合せず、埋没時にはすでに破片化していたものと考えられる。接合しなかった体部下半の破片には、内外面ともにヘラケズリによる調整が認められる。体部外面には厚くススが付着する。

12は山皿である。口縁端部はやや外反し、底部から体部にかけての屈曲は緩やかである。高台疊付には粗粒圧痕が残る。

13・14は山茶碗である。13は表土掘削時に埋土最上部から出土したものである。底部外面には糸切り痕、高台疊付には粗粒圧痕が残る。14は10・11とともに土坑内から原位置で検出したものである。器壁は薄く、口縁端部はやや外反する。底部外面には糸

切り痕、高台疊付には輪殻圧痕が残る。見込みには重ね焼きの痕跡が認められる。

これらの出土遺物は、いずれも12世紀前半に位置付けることができよう。

**S K308 (15~20)** 15はロクロ土師器小皿である。底部の小片で、底部外面には糸切り痕が残る。

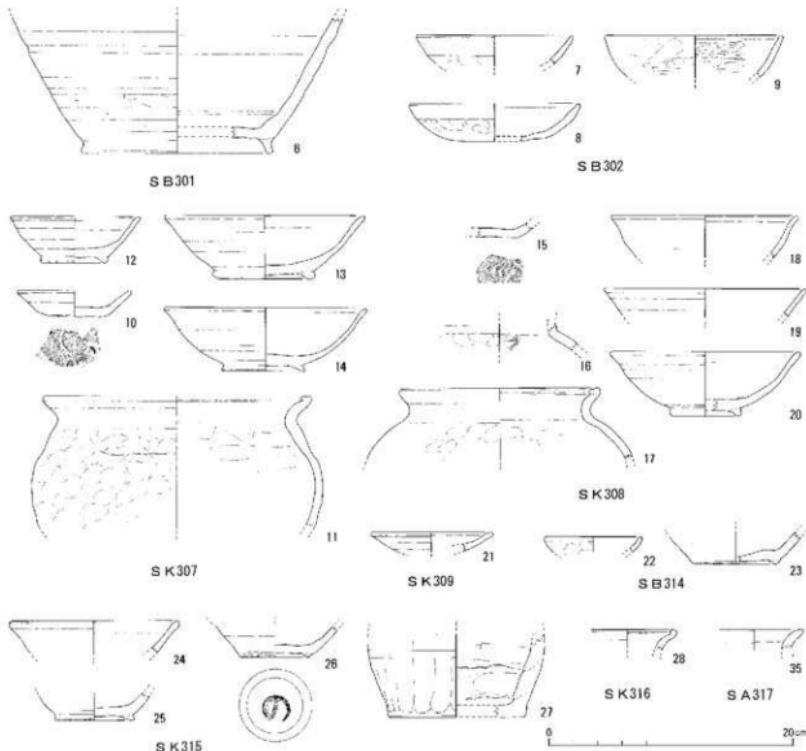
16・17は土師器甕である。16は頭部の破片で、体部外面はユビオサエもしくはユビナデ、体部内面はハケによって調整される。外面にはススが付着する。17は頭部の屈曲は緩やかで、口縁端部は内側に折り返して肥厚させている。体部外面上半はユビオサエやユビナデ、内面上半は工具ナデによって調整される。外面にはススが付着する。

18~20は山茶碗である。18は口縁部から体部にかけての破片で、器壁は薄く、口縁部は外反する。19は口縁部の破片である。器壁は薄く、口縁部はあまり外反しない。20は18・19よりも器壁が厚く、口縁部はやや肥厚して外反する。底部外面には糸切り痕が残る。見込みには重ね焼きの痕跡が認められる。

これらの遺物は12世紀前半のものと考えられる。

**S K309 (21)** 16はロクロ土師器小皿である。口縁部から底部にかけての破片である。底部を欠くが、浅い小皿であり、口縁部はやや外反する。11世紀後半~12世紀代のものと考えられる。

**S B314/S K315・316出土遺物** (第28図22~28、第29図)



第28図 捩立柱建物・柱列出土遺物実測図 (1:4)

22は柱穴P Aから出土した土器小皿である。口縁部の小片で、口縁端部は丸く收める。体部外面にはユビオサエが明瞭に残る。

23は柱穴P 5から出土した山茶碗である。底部の破片で、粗雑な高台が付く。底部と体部との境は比較的明瞭に屈曲する。底部外面には糸切り痕、高台疊付には粗穢圧痕が残る。

このほか、柱穴P 6では柱抜き取り痕内から長径4cmほどの鉄滓（写真図版12鉄滓①）、掘形埋土から長径3.2cmほどの小型の鉄滓（写真図版12鉄滓②）が出土している。小鎌治に伴って生じた鍛錬鍛冶津と考えられる<sup>2)</sup>。

これらの遺物のうち、23の山茶碗は13世紀中頃に位置づけられよう。

**S K315 (24~27)** 24~26は山茶碗である。24は口縁部の破片である。口縁端部外面にナデを施し、不明瞭な面を作る。25は底部片で、肩部の埋土上層から出土したものである。底部と体部との境は比較的明瞭に屈曲し、底部外面には糸切り痕、高台疊付には粗穢圧痕が残る。26は底部から体部にかけての破片である。底部と体部との境は比較的明瞭に屈曲し、底部外面には糸切り痕、高台疊付には粗穢圧痕が残る。

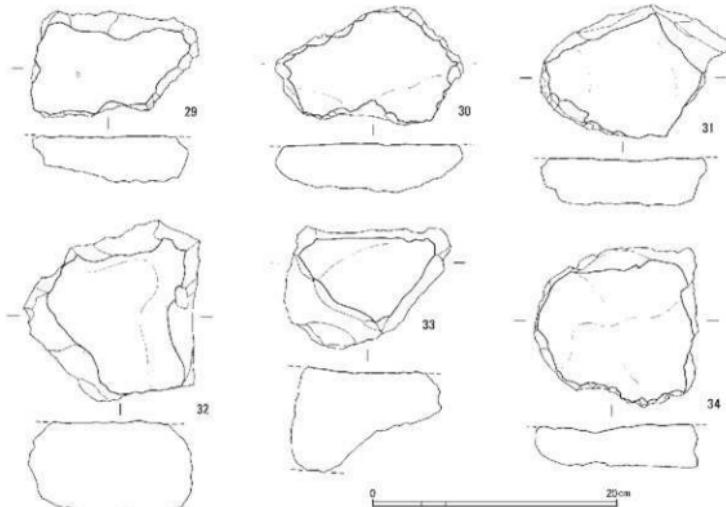
が残る。また、底部外面には「の」字状の墨書が認められる。

27は陶器蓋である。底部から体部下半にかけての破片で、埋土上層から表土掘削時に出土した破片と、埋土中層から出土した破片とが接合した。外面には強いタテナデが施され、その上から浅い回線が2条施されている。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残り、その上から工具によるヨコナデが施されている。外面は赤っぽく発色している。器種は特定できなかつたが、常滑産の小型の蓋であると思われる。なお、内面には茶褐色の物質が付着している<sup>3)</sup>。

このほか、小片のため図化できなかつたが、青磁碗と思われる破片が出土している（写真図版14）。器壁は薄く、釉層も薄い。外面には不明瞭ながら棱をもつ。釉は灰オリーブ色で内外面に施され、全面に嵌入がみられる。同安窯系の青磁碗の可能性があるが、断定できない。

これらの遺物のうち、山茶碗は13世紀中頃に位置づけられ、陶器蓋も13世紀代のものと考えられる。

**S K316 (28~34)** 28は土器器甕である。口縁部の小片で、口縁端部は内側に折り返して肥厚させている。12世紀前半のものと考えられる。



第29図 S K316出土土塊実測図 (1:4)

29~34は軟質の土塊で、平らな面を持つ。同様の土塊は25kg以上出土したが、その中でも遺存状況がよく、平らな面を持つものを選んで図化した<sup>4)</sup>。多くは厚さ4cmほどで、何かから剥がれ落ちたような印象を受ける。ただし、中には厚さ8cm程度あり、両面に平らな面を持つとみられるものも少數認められる。明瞭な被熱痕跡は認められず、胎土には径1~4mmほどの粗い砂粒を含み、水分を含むと崩壊していくため、粘土質の土壤に砂を混ぜ、乾燥により硬化させたものと推測される。建物の土壁の一部とも考えられるが、木舞の痕跡は確認できず、スサの混入も認められなかったため<sup>5)</sup>、土壁以外の構造物の可能性が高い。

なお、埋土の筋いがけによって、数mmほどの大きさの微細な鉄片が少數検出されている。鍛造剥片など鍛治に伴うものではなく、鉄釘など小型鉄製品の断片であると思われるが、詳細は不明である。

#### S A 317出土遺物（第28図35）

35は柱穴P1から出土した土師器甕である。口縁部の小片で、口縁端部は丸く收める。外面にはススが付着している。

#### S D 303出土遺物（第30図36~42）

36は土師器の羽釜の跨部であると考えられる。全体的に風化が著しく、調整などは不明であるが、下面が若干煤けている。羽釜であれば他の出土遺物より時期が下ることや、羽釜の跨部としては突出が弱いことなどから、羽釜ではなく清瀬型甕の口縁部等である可能性も考えられる。

37は底部の小片であるが、灰釉陶器碗と思われる。器壁が薄く、高台も高く整った形態である。外面には不明瞭ながらヘラケズリが施されている。見込みは使用に伴う摩滅により器壁が滑らかになっていく。

38~42は山茶碗である。38・42は埋土最上部から、39~41は西側落ち込みとの合流地点付近で出土した。38~40は底部片である。いずれも器壁は厚く、底部外面には糸切り痕が残る。41は底部から体部下半にかけての破片で、器壁は38~40より薄く、高台もやや高い。底部外面には糸切り痕が残る。42は完全に近い。高台はかなり粗雑化しており、底部と体部との境は明瞭に屈曲する。底部外面には糸切り痕、

高台疊付には粗穀圧痕が残る。底部外面には「小」字状の墨書がある。

灰釉陶器は10世紀代まで遡る可能性がある。山茶碗は多くが12世紀代に位置づけられるが、42は13世紀中頃と考えられる。

#### S K 313出土遺物（第30図43~45）

43・44は土師器小皿である。43は器壁が薄く、外面にユビオサエの痕跡を明瞭に残し、口縁端部外面をヨコナデによって調整する。44は完形で、外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。口縁端部外面をヨコナデによって調整する。

45は山茶碗である。完形に近く、口縁部から底部までが遺存している。口縁部外面に強いヨコナデを施しており、口縁端部がやや内湾する。底部と体部との境は明瞭に屈曲する。底部外面には糸切り痕、高台疊付には粗穀圧痕が残る。また、底部外面には「の」字状の墨書が認められる。

山茶碗は13世紀中頃に位置づけられる。土師器小皿も同様の時期のものと思われる。

#### ピット出土遺物（第30図46・47）

A41Pit1 (46) 46は砥石である。石材は肌理が細かい灰黄褐色のやや軟質の石で、泥岩と思われる。半分程度に折損しているが、元は中位がくびれた方柱状を呈していた可能性が高い。砥面として側面を4面使用しており、どの面も長軸方向に沿って緩やかに湾曲する。また、使用に伴う深い傷が一つの面に集中して認められる。重さは現状で572gあり、置き砥として使用されたと思われる。

G33Pit1 (47) 47は山茶碗である。底部片で、底部と体部との境は明瞭に屈曲する。高台疊付には粗穀圧痕が残る。

#### ②耕作溝・遺構外出土遺物（第30図）

表土や包含層中、耕作溝埋土中からも少量の遺物が出土している。

古代末~中世の遺物（48~61） 48は土師器小皿である。小片で、外面にユビオサエの痕跡が残る。

49は土師器壺である。口縁部の小片で、外面にユビオサエの痕跡が残る。

50はクロ土師器小皿である。底部の小片で、底部外面には糸切り痕が残る。

51・52は土器破片である。いずれも口縁端部を折り返して肥厚させる。

53は山皿である。底部の小片で、底部外面には糸切り痕が残る。

54～60は山茶碗である。54・55は底部のやや側面によりに高台を貼り付けている。56は薄手で、高台を欠く。胎土は精良で白っぽい色を呈しており、灰釉陶器碗とも考えられる。57は粗雑な高台を貼り付けている。58は高台を欠く。59は口縁部から体部にかけての破片である。60は口縁部から底部までの形状がわかる破片で、口縁端部はやや外反する。三角形状の高台を貼り付けている。

61は管状土錘である。半分に折損している。最大

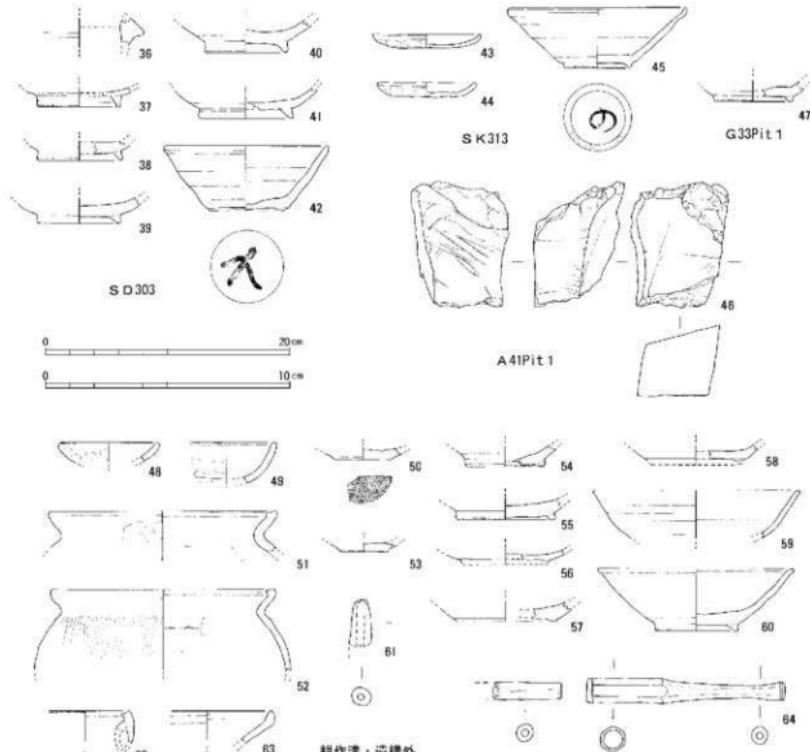
径は0.8cmで、細身のものである。

**近世の遺物（62～64）** このほか、包含層や耕作構内などから近世の遺物も出土しているため、併せて述べておく。

62は土器質土培壟である。口縁部の小片で、内耳が一部遺存している。口縁部は強く屈曲して上方に立ち上がり、口縁端面はやや内傾する。内耳の孔はやや大きい。焼成は良好で堅緻である。おそらく18世紀中葉～19世紀前半のものと思われる。

63は陶器鉢の口縁部であると思われる。擂り鉢の可能性もある。器壁は薄く、外面には灰色の泥漿を施している。

64は煙管の吸口である。銅製で、断面は六角形を



第30図 溝・土坑・ピット・その他出土遺物実測図（61・64は1:2、その他は1:4）

呈する。竹製と思われる羅宇が一部遺存している。  
18～19世紀のものと考えられる。

## 註

- 1) 出土遺物のうち、土器・陶器の編年、产地、断年代観などについては以下の文献を主として参考にした。

愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編叢業2 中世・近世瀬戸系 愛知県 2007、愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編叢業3 中世・近世常滑系 愛知県 2012、伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008、金子健一「尾張出土のホウロクについて」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1996、中野晴久「生産地における

編年について』『常滑焼と中世社会』 小学館 1995、藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994。

- 2) 第VI章第3節参照。
- 3) 漆などの可能性が考えられる。科学的分析は行っていない。
- 4) 固化したものについては、形状を保つためバインダー含浸を行っている。そのため、色調は本来よりも黒っぽくなっている。
- 5) 第VI章第2節参照。なお、胎土中からはヨシ属の植物珪酸体やイネ・ソバの花粉がかなり多く検出されており、第3次調査区の土壤の植物珪酸体や花粉の様相とはやや異なることから、集落周辺の田畠などの土壤が材料として使われた可能性が高い。

第1表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表①

【凡例】

※神社番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測値に付与した整理番号である。

※土器・陶器等の残存度についてでは、復元される可能性ないし底部を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかったものである。

埠頭番号	実測番号	出土遺構	種別・器種	法量 (cm・g)	調整・文様	色調	残存度	備考
1	007-01	耕作溝	繩文土器	残存高 2.5 (外) 燃灰文・凹面 (内) ヨコナデ・ユビオサエ	にぶい黄根	10YR6/4	口縁部 小片	口縁部ないし底部を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかったものである。
2	009-06	H138 包含層	繩文土器 口径	残存長 7.4 (外) ミガキ	にぶい黄根	10YR7/2	口径部のみ	
3	007-07	H139 耕作溝	繩文土器 深鉢	残存高 2.5 (外) 突葉 (内) ナデ	にぶい黄根	10YR6/3	口縁部 小片	財目突葉
4	010-05	C39 包含層	石器 石鑿	長さ 2.9 幅 1.5 厚さ 0.4 重量 0.9	押圧剥離		完存	ナヌカイト
5	007-06	X40 耕作溝	石器 台石	長さ 11.8 幅 7.0 厚さ 9.0 重量 1,060			蔽片	上面磨滅
6	004-01	S B301 P16	陶器 片口鉢	残存高 11.2 高台径 15.6	(外) ロクロナデ・ケズリ (内) ロクロナデ	灰黄	2.5YR7/2 2/12	
7	009-02	S B302 P 4	土師器 盆	口径 12.8 残存高 2.5	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ヨコナデ	橙	5YR6/6 1/12	
8	010-03	S B302 P 8	土師器 盆	口径 13.6 器高 3.1	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ヨコナデ	橙	5YR6/6 4/12	
9	009-01	S B302 P 7周辺 耕作溝	黒色土器 壺	口径 8.0 残存高 1.6	(外) ヨコナデ・ケズリ? (内) ヨコミガキ ヨコミガキ	にぶい鵝	7.5YR5/4	口縁部 1/12 内面黒化処理
10	002-04	S K307	ロクロ土師器 小皿	口径 9.1 器高 2.2 高台径 4.5	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	にぶい鵝	7.5YR6/4 2/12 底部 6/12	
II	001-01	S K307	土師器 壺	口径 21.8 頭部径 19.6 体部径 24.0 残存高 10.8	(外) ヨコナデ・ユビオサエ エ・ケズリ (内) 工具ナデ・ケズリ	にぶい黄根	10YR7/3 3/12	底部片あり
12	002-02	S K307	陶器 小皿(山茶皿)	口径 10.4 器高 3.8 高台径 5.2	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	灰白	2.5YR7/1 3/12 底部 12/12	
13	002-01	S K307	陶器 瓢(山茶碗)	口径 16.2 器高 5.2 高台径 7.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	灰白	10YR7/1 2/12 底部 2/12	
14	002-05	S K307	陶器 瓢(山茶碗)	口径 16.5 器高 5.6 高台径 6.7	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	にぶい黄根	10YR7/2 5/12 底部 12/12	
15	003-01	S K308	ロクロ土師器 小皿	残存高 1.2	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	にぶい黄根	10YR6/3 底部 小片	
16	003-03	S K308	土師器 壺	残存高 2.5	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ヨコナデ・ハケ	にぶい鵝	7.5YR6/4 頬張 小片	
17	003-02	S K308	土師器 壺	口径 16.0 頭部径 14.8 残存高 5.7	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ヨコナデ・工具ナデ	にぶい黄根	10YR7/3 1/12 頬張 1/12	
18	002-08	S K308	陶器 瓢(山茶碗)	口径 15.0 器高 3.5	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰黄鵝	10YR6/2 1/12	
19	002-07	S K308	陶器 瓢(山茶碗)	口径 16.4 器高 5.3 残存高 2.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰黄	2.5YR6/2 1/12	
20	002-06	S K308 B40耕作溝	陶器 瓢(山茶碗)	口径 15.3 器高 5.3 高台径 5.2	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ 系切り	灰白	2.5YR7/1 3/12 底部 4/12	
21	002-03	S K309	ロクロ土師器 盆	口径 9.7	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	にぶい鵝	7.5YR7/4 2/12	
22	009-03	S B314 P A	土師器 小皿	口径 7.8 残存高 1.3	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ナデ	にぶい黄根	10YR7/3 1/12	
23	009-04	S B314 P 5	陶器 瓢(山茶碗)	口径 2.2 器高 6.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ・不整ナデ 系切り・ナデ	灰白	2.5YR7/1 底部 3/12	
写真 図版 12	—	S B314 P 6抜き 取り痕	鉢津	長さ 4.0 幅 3.6 重量 31.7			完存	鉢津① 梅鉢鉢津津

第2表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表(2)

標図番号	実測番号	出土遺構	種別・器種	法量 (cm・g)	調整・文様	色調	残存度	備考
写真図版12	—	S B314 P 6掘形 内	鉢	長さ 幅 重量 13.2 2.2 14.6			完存	既満② 敷石満
24	004-06	S K315	陶器 瓢 (山茶 碗)	口径 残存高 12.4 2.7	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰白	2.5Y8/1	口縁部 1/12
25	005-05	S K315	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 2.2 6.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引・ナデ	灰白	2.5Y7/1	底部 7/12
26	005-02	S K315	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 2.8 5.8	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引	灰白	10Y6/1	底部 12/12
27	004-03	S K315	陶器 薺	残存高 底径 6.8 11.0	(外) ロクロナデ・タテナ デ・沈線 (内) 工具痕	(外) にぶい穂 (内) 灰赤	7.5Y8/4 2.5Y8/2	底部 3/12
写真図版14	—	S K315	磁器 青磁碗?		(外) ロクロナデ?・施釉 (内) ロクロナデ?・施釉	(胎) 灰黄 (釉) 灰オリーブ	2.5Y6/2 5Y5/3	小片 体部小片
28	004-05	S K316	土師器 壺	残存高 1.7	(外) ヨコナデ? (内) ヨコナデ?	にぶい黄緑	10Y8/3/1	口縁部 小片
29	016-001	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 13.8 8.7 3.9	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	破片 面あり
30	015-002	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 15.5 9.7 4.0	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	破片 面あり
31	014-001	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 15.7 11.0 5.4	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	破片 面あり
32	014-002	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 15.0 13.3 8.2	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	破片 面あり
33	016-002	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 13.7 10.0 6.6	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	面あり 表裏両面遺存?
34	015-001	S K316	土塊	長さ 幅 厚さ 13.4 13.2 3.8	ナデ?	黒褐色	10Y8/3/1	破片 面あり
35	004-04	S A317 Pit.1	土師器 壺	残存高 1.7	(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	にぶい穂	7.5Y7/4	口縁部 小片
36	004-07	S D303	土師器 羽釜?	残存高 2.2	(外) ヨコナデ? (内) ナデ	にぶい穂	5Y7/4	小片 滑溜型焼?
37	005-07	S D303	灰釉陶器 瓢	残存高 高台径 1.7 6.8	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰黄	2.5Y7/2	底部 2/12
38	005-03	S D303	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 1.5 7.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引	灰白	2.5Y7/1	底部 2/12
39	005-04	S D303	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 2.5 7.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引	灰黄	2.5Y7/2	底部 1/12
40	004-02	S D303	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 2.7 6.8	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引	灰黄	2.5Y7/2	底部 3/12
41	005-06	S D303	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 2.5 6.8	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 素切引	灰黄	2.5Y7/2	底部 3/12
42	003-06	S D303	陶器 瓢 (山茶 碗)	口径 器高 高台径 13.3 5.4 6.0	(外) ロクロナデ・貼付ヨコナ デ (内) ロクロナデ・ナデ (底) 素切引	灰黄	2.5Y7/2	口縁部 5/12 底部 12/12
43	003-05	S K313	土師器 小皿	口径 器高 1.2	(外) ヨコナデ・ユビオサエ ナデ	浅黄緑	10Y8/4	口縁部 2/12
44	003-04	S K313	土師器 小皿	口径 器高 1.2	(外) ヨコナデ・ユビオサエ ナデ	浅黄緑	7.5Y8/3	完存
45	005-01	S K313	陶器 瓢 (山茶 碗)	口径 器高 高台径 14.7 4.9 5.5	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ・ナデ (底) 素切引	灰白	2.5Y7/1	口縁部 5/12 底部 12/12
46	006-01	A41Pit.1	石製品 砕石	長さ 幅 厚さ 7.9 5.8 572	研磨			半欠 混音 4面使用
47	005-08	G33Pit.1	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 高台径 1.6 6.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	灰白	2.5Y7/1	底部 1/12
48	008-08	表採	土師器 小皿	口径 残存高 1.6	(外) ヨコナデ・ユビオサエ ナデ	にぶい穂	7.5Y8/4	口縁部 3/12

第3表 大久保遺跡第3次調査出土遺物一覧表③

探査番号	実測番号	出土遺構	種別・器種	法量 (cm・g)	調整・文様	色調	残存度	備考
49	008-01	祇園区 表土	土師器 壺	残存高 3.4 (外) ヨコナダ・ユビオサエ (内) ヨコナダ	淡黄桙	10YR8/4	口縁部 小片	
50	008-04	表土	ロクロ土師器 小皿	残存高 1.4 高台径 4.8 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	にぶい黄桙	7.5Y7/4	底部 4/12	
51	008-05	表土	土師器 壺	口径 18.4 頭部径 16.6 残存高 3.5 (外) ヨコナダ・ユビオサエ (内) ヨコナダ・工具ナダ	にぶい黄桙	10YR7/4	口縁部 1/12 頭部 1/12	
52	010-02	表土	土師器 壺	口径 18.4 頭部径 16.6 残存高 6.8 (外) ヨコナダ・ハゲ (内) ヨコナダ・イタナダ	にぶい黄桙	10YR7/3	口縁部 1/12	
53	009-05	Y39 包含層 皿	陶器 小皿 (山茶 高台)	残存高 0.8 高台径 3.8 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2	底部 5/12	
54	008-03	表土	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 1.7 高台径 6.2 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2	底部 3/12	
55	008-06	表土	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 1.7 高台径 7.4 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰白	2.5Y7/1	底部 4/12	
56	007-05	X41 耕作溝	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 1.0 高台径 7.6 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2	底部 2/12	灰釉陶器?
57	007-04	I40 耕作溝	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 1.5 高台径 8.2 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰白	10YR7/1	底部 3/12	
58	008-07	表土	陶器 瓢 (山茶 碗)	残存高 1.5 高台径 7.8 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り	灰白	10YR7/1	底部 2/12	
59	008-02	表土	陶器 瓢 (山茶 碗)	口径 16.8 残存高 4.0 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ	灰白	5Y8/1	口縁部 3/12	
60	010-01	表土	陶器 瓢 (山茶 碗)	口径 16.0 器高 5.1 高台径 6.8 (外) ロクロナダ (内) ロクロナダ (底) 糸切り・ナダ	灰黄	2.5Y7/2	口縁部 2/12 底部 2/12	
61	010-04	Y41 耕作溝	土製品 土舞	長さ 2.0 最大径 0.9 (外) ユビオサエ・ナダ (内) ヨコナダ	淡黄桙	10YR8/4	半欠	
62	007-02	I33 耕作溝	土師質器 炉	残存高 2.5 (外) ユビオサエ・ナダ (内) ヨコナダ	にぶい黄桙	10YR8/4	口縁部 小片	
63	007-03	I33 耕作溝	陶器 脱	残存高 2.8 (外) ロクロナダ・施釉 (内) ロクロナダ・施釉	(胎) 淡黄 (胎) 黄灰	2.5Y8/3 2.5Y4/1	口縁部 小片	
64	014-03	G34 包含層	銅製品 球管吸口	長さ 8.1 最大径 1.0 (外) ロクロナダ・施釉			完存	木製羅字遺存

第4表 大久保遺跡第3次調査造構一覧表

造構名	種別	グリッド	規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	時期	備考
S-B301	獨立柱建物	W45・X451ほか	7.3×5.4	—	土師器。陶器	平安時代末～鎌倉時代前期	絶柱
S-B302	獨立柱建物	A44・A451ほか	6.1×4.1	—	土師器。黒色土器	平安時代末～鎌倉時代前期	側柱
S-D303	溝	A41・B42ほか	20×0.5	0.3～0.8	土師器。山茶碗	平安時代末～鎌倉時代前期	
S-D304	溝	Y40	4.7×0.9	0.18	なし	鎌倉時代前期～	S-D303を切る
S-D305	溝	A40・Y39ほか	6.4×0.6	0.12	山茶碗	鎌倉時代前期～	
S-K306	土坑	Y39	1.4×0.5	0.24	鱗文土器?	鎌倉時代前期～	S-D305を切る
S-K307	土坑	B38・B39	1.8×1	0.16	土師器。山茶碗、山皿	平安時代末～鎌倉時代前期	S-B310層内土坑か
S-K308	土坑	B40	1.1×1.1	0.2	土師器。山茶碗	平安時代末～鎌倉時代前期	S-B310層内土坑か
S-K309	土坑	B38	1×0.9	0.16	土師器。山茶碗	平安時代末～鎌倉時代前期	S-B310層内土坑か
S-B310	獨立柱建物	E39・C40ほか	10.2×9.2	—	土師器	平安時代末～鎌倉時代前期	絶柱
S-B311	獨立柱建物	C35・D35ほか	5.7×4.4	—	なし	平安時代末～鎌倉時代前期	側柱
S-K312	土坑	D37	1.5×0.7	0.16	山茶碗	鎌倉時代前期～	楓倒木痕か
S-K313	土坑	E36・F36ほか	1.2×0.6	0.1	土師器。山茶碗	鎌倉時代前期	
S-B314	獨立柱建物	G33・H32ほか	13×9.1	—	土師器。山茶碗、铁滓	鎌倉時代前期	絶柱
S-K315	土坑	G34・H34ほか	3.1×2.9	0.3	土師器。山茶碗、陶器	鎌倉時代前期	S-B314層内土坑
S-K316	土坑	H33・I33ほか	4.9×3.4	0.35	土師器。山茶碗、土塊	鎌倉時代前期	S-B314層内土坑
S-A317	柱列	貳張区	7.1	—	土師器	平安時代末～鎌倉時代前期	

※規模や深さについては代表的な数値を記入している。

## 第VI章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的と試料の採取

大久保遺跡第3次調査の発掘調査に伴って、出土した土塊と鉄滓及び、土壤の自然科学分析を行った。

これらの自然科学分析を行った目的および対象試料の採取・保管方法などについては、以下の通りである。

なお、試料を採取した土層・遺構の名称について、調査時から報告書作成段階で変更になったものがある。分析段階では調査時の土層・遺構名を使用したが、混乱を避けるため、第2・3節ではそのまま掲載した。名称を変更したものについては、第5表に対照を一括して示している。

#### ①建物構造等にかかる分析

**分析の目的** 据立柱建物SB314では、いわゆる南東隅土坑SK316が検出された。その際、床面が非常に硬化していること、そして内部から軟質の土塊が多い出土したことが注意された。

南東隅土坑については、その用途・機能について議論があり<sup>1)</sup>、床面の硬化状況や壁土とも考えられる土塊の出土は、こうした議論に対して検討材料を提供しうると考えられる。

そこで、床面の硬化層については、一部を採取し、硬化原因の解明を目的として蛍光X線による成分分析を実施することとした。

土塊については、焼成によって固結したものではない可能性が高いため、固結原因の解明を目的として蛍光X線による成分分析を実施することとした。また、植物繊維の圧痕にも見える痕跡がわずかに観

第5表 分析試料土層・遺構名等対照表

調査・分析時における呼称		報告における呼称
土層	東壁サブレンチ第4層	東壁第4層
	東壁サブレンチ第12層	東壁第12層
	東壁サブレンチ第16層	東壁第16層
遺構	SB314 №6	SB314 P6
遺物	00K-1	鉄滓①
	00K-2	鉄滓②

察できたため、植物の葉や茎の混和も想定し、プラント・オパール分析によって植物の混和の有無を確認するとともに、植物が混和されている場合には植物種の特定を試みることとした。

**試料の採取と取り扱い** 硬化層については、土層断面の記録を目的としてSK316の床面の断ち割りを行った後、断面観察によって硬化が認められた土層（第21図第8層）から鉄製のヘラで試料の採取を行った。

出土土塊については、多数出土した資料の中から、挙大程度の大きさで、なおかつ々々の表面と考えられる平坦面が遺存するものを分析試料として選定した。元の形状が不明であるため、部位によって混和された物質の量や種類に差があることも想定されるため、3点を分析することとした。本資料については、土塊の形状を保ったまま分析に供し、分析に際して周囲の土壤が付着していない内部から試料の採取を行うものとした。

なお、SB314にかかる土壤・土塊の分析については、周囲の土壤に含まれる成分やプラント・オパールの量・種類との対比が不可欠であるため、SK316の東側において、SK316の床面と同じ土層（東壁第8層に対応）からサンプル土壤を採取し、対比試料として分析に供することとした。

これらの試料のうち、土壤については、いずれも採取後すぐに新品のビニール袋に入れて口を閉め、分析まで開封していない。土塊については検出後、図面作成及び写真撮影を行うままで数日間現地に置かれていた<sup>2)3)</sup>。取り上げ後は水洗は行わず、土が付いたまま他の土塊とともにビニール袋に入れて保管していた。

#### ②堆積環境にかかる分析

**分析の目的** 今回の調査では、遺構検出面付近で縄文時代の遺物が出土した。量は少ないが、注入土器など注目すべき遺物も認められたため、中世の遺構

面より下層における縄文時代の遺物・遺構の存在の確認を行った。

結果的に縄文時代の遺構・遺物は確認できなかつたが、下層確認を行った東壁沿いのサブトレンチにおいて、地表面に堆積した黒ボク土層より下位にも、黒ボク土と似た黒色の土層が2層見られることが注意された。

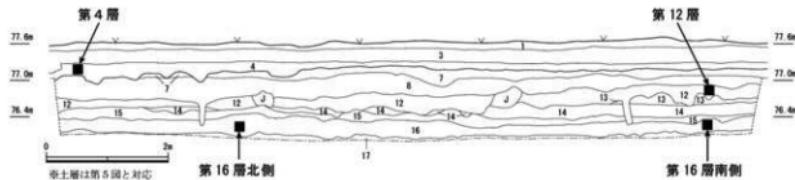
これらが黒ボク土に由来する土層であるとすれば、黒ボク土が形成される縄文時代において、かなりの厚さの堆積層が形成されるような堆積作用があつたと推測される。そして、その堆積作用によって、最終的に現在のような地形環境が形成されたと考えられる。

大久保遺跡周辺において縄文時代後期以降に人間の活動痕跡がみられるようになることは、こうした地形環境の形成過程と密接に関わることが想定される。

また、黒ボク土自体の形成要因として、縄文時代における人間活動が大きく関係している可能性が指摘されているが<sup>4)</sup>、東海地方西部の黒ボク土の形成要因についてはいまだ不明な点が多く、分析成果の蓄積が進められているところである。

こうした観点から、黒ボク土及び類似する黒色土層に含まれるプラント・オパール、花粉、珪藻、テフラについて分析を行い、これらの土層の成因や形成時期、堆積環境についての手がかりを得るとともに、大久保遺跡の立地環境が形成されてきた環境変化の過程について明らかにすることを試みた。

**試料の採取と取り扱い** 試料はサブトレンチ内の土層から採取した。採取した土層は、東壁土層断面図第4・12・16層である(第31図)。第16層については、南北でやや層相に差があるように見受けられたため、2箇所で試料を採取した。



第31図 土壤分析試料採取位置図 (1:80)

試料の採取にあたっては、壁面の表面を削り落として新鮮な面を露出させた後に、鉄製のヘラで試料の採取を行った。

試料は、いずれも採取後すぐに新品のビニール袋に入れて口を閉め、分析まで開封していない。

### ③ 鉄滓の分析

**分析の目的** SB314内部の柱穴P6から鉄滓が2点出土している。これまでの大久保遺跡の発掘調査では、鍛冶遺構など生産関連遺構は確認されておらず、鍛冶などの生産活動の様相は不明である。鉄滓の分析により、こうした活動の一端を明らかにする手がかりを得ることができると考える。

**試料の取り扱い** 鉄滓は2点とも、出土後はビニール袋に入れて保存した。水洗いは行っていない。ただし、鉄滓①(00K-1)については表面がやや脆かったため、表面の泥を刷毛等によって落とした後に、バインダー溶液を塗布している。

### 註

- 1) 浅尾悟「土坑を伴う中世据立柱建物について」『一般国道1号龜山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要VI』 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990.
- 2) 出土状況図の作成を行ったものの、土塊は脆く原形のまま取り上げることが困難であったため、個々に取り上げ番号を付さず一括して取り上げた。そのため、分析試料が土塊群のどの位置から出土したものかは不明である。
- 3) この間、降雨があった。ブルーシートを被せていたが、雨水は土塊群まで浸透していた。
- 4) 森勇一「第1章 更新世・完新世の自然」『三重県史』通史編原始・古代 三重県 2016.

## 第2節 大久保遺跡における花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析・火山灰分析・螢光X線分析

### ①はじめに

大久保遺跡は、標高約76mの三瀧川の扇状地に所  
在する。平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱  
建物跡や、その周辺で土坑が検出された。この扇状  
地内ではあまり遺跡が確認されておらず、当時の環  
境はあまり確認できていない。今回扇状地に縦状に  
堆積した土層の地形環境の形成と人間活動の関係お  
よび時期の特定と、土坑（SK316）内で検出され  
た土塊状の堆積物の性格について検討を行い、掘立  
柱建物の構造に関する復原検討の材料とする。土層  
については花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析、  
火山灰分析を組み合わせ、土塊状堆積物については、  
植物珪酸体分析・螢光X線分析と参考のため花粉分  
析および珪藻分析を実施した。

### ②分析試料

試料は、東壁サブトレントとSK316の堆積物で、  
東壁サブトレントは、試料No.2から試料No.5（第4  
層、第12層、第16層南側、第16層北側）の4点、SK  
316は試料No.1と試料No.6から試料No.9の5点であ  
る。分析項目の詳細は、第6表に示す。SK316  
は、掘立柱建物（SB314）の内部に位置する古代  
末から中世と考えられる大きさ6m×4m、深さ40  
cmの土坑である。土坑内には硬いが水に溶ける土塊  
状の堆積物が複数確認された。これは、堅材ないし

漆喰などの掘立柱建物の構造が反映された可能性を  
含め、その性格について検討する。

### ③原理と方法

#### 1. 花粉分析

##### （1）原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした  
比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、  
遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とし  
た局地的な植生の推定も試みられている。しかし花  
粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良  
好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解され  
て残存していない場合もある。

##### （2）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、  
以下の手順で行った。

##### 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量

2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15  
分間湯煎

3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒  
子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去

4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセト  
リシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏  
液を加え1分間湯煎）を施す

6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理

第6表 分析試料リスト

試料 No.	形状	採取遺構・箇所	分析項目					備考
			花粉 分析	珪藻 分析	植物珪 酸体	火山灰 分析	螢光X線 分析	
1	土壤	地山（SK316東側）					○	比較試料
2	土壤	東壁サブトレ第4層	○	○	○	○		
3	土壤	東壁サブトレ第12層	○	○	○	○		
4	土壤	東壁サブトレ第16層南側	○	○	○	○		
5	土壤	東壁サブトレ第16層北側	○	○	○	○		
6	土壤	SK316床面硬化部分					○	
7	土塊状	SK316 No.①	*	*	○		○	
8	土塊状	SK316 No.②			○		○	
9	土塊状	SK316 No.③			○		○	

\*:参考比較

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

#### 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1,000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

### 2. 珪藻分析

#### (1) 原理

珪藻は、珪酸質の被殻を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

#### (2) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量

2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置

3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)

4) 残渣をマイクロビペットでカバーガラスに滴下して乾燥

5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1,500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

### 3. 植物珪酸体分析

#### (1) 原理

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO<sub>4</sub>)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000, 2009)。

#### (2) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)

2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)

3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理

4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散

5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去

6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作製

7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 4. 火山灰分析および蛍光X線分析

各分析の項に記載する。

#### ④東壁サブトレレンチ

##### 1. 花粉分析

###### (1) 結果

###### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉10、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉11、シダ植物胞子2形態の計25分類群である。これらの学名と和名および粒数を第7表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第32図に示す。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

###### 〔樹木花粉〕

マキ属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、トチノキ、ハイノキ属  
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

###### 〔草本花粉〕

イネ科、ギシギシ属、ソバ属、カラマツウ属、アブラナ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属—フサモ属、セリ亜科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

###### 〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

###### 2) 花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。(第32図)

下位の16層南側、北側、12層では、いずれも密度が極めて低く、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、ヨモギ属などのがわずかに検出される。16層においては、南側、北側とも密度は低く、特に南側の密度は低い。4層では、密度は低いものの草本花粉が約70%を占める。草本花粉のヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ科の出現率が高く、セリ亜科、キク亜科が伴われ、ソバ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属ア

カガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、クリが出現し、樹木・草本花粉のマメ科の出現率がやや高い。また、寄生虫卵や、明らかな消化残渣は認められない。

###### (2) 花粉分析から推定される植生と環境

下位の16層、12層の時期には花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったとみなされる。4層の時期になると堆積地はヨモギ属、イネ科などの乾燥した環境を好む草本が繁茂する比較的陽当たりの良いや乾燥した草地の環境が示唆される。また、栽培植物のソバ属が出現し、ソバの畑も周辺に分布していた。比較的出現率の高いマメ科の形態は、ササゲ属やソラマメ属などの栽培植物と異なり野生植物である。周辺地域の森林は、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹とコナラ属コナラ亜属、クリなどの落葉樹で構成されていた。

##### 2. 珪藻分析

###### (1) 結果

###### 1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)35分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。第8表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第33図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉(1986)により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉(1988)により、淡水生種は安藤(1990)による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下に出現した分類群を記載する。

###### 〔貧塩性種〕

*Caloneis silicula*、*Cymbella silesiaca*、*Cymbella turgidula*、*Fragilaria capucina*、*Frustulia vulgaris*、*Gomphonema clevei*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula acceptata*、*Navicula atomus*、*Navicula contenta*、*Navicula elginensis*、*Navicula gerloffii*、*Navicula kotschyii*、*Navicula mutica*、*Navicula* spp.、

*Neidium alpinum*, *Nitzschia nana*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia* spp., *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia braunii*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia hemiptera*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Pinnularia* spp., *Rhopalodia gibberula*, *Surirella angusta*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

## 2) 珪藻群集の特徴

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

下位の16層南側は、珪藻密度が極めて低く、陸生珪藻の*Neidium alpinum*がわずかに検出される。北側では、陸生珪藻の*Neidium alpinum*, *Hantzschia amphioxys*, *Rhopalodia gibberula*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schoenfelderi*がわずかに出現する。12層では、陸生珪藻の占める割合が高く、65%を占め、*Neidium alpinum*, *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia obscura*, *Navicula mutica*などの出現率が高い。流水不定性種では、*Navicula gerloffii*, 小型の*Navicula* spp., *Pinnularia* spp., *Rhopalodia gibberula*が出現する。また、好流水性種で沼沢湿地付着生種の*Navicula elginensis*や好流水性種の*Gomphonema parvulum*が低率に出現する。4層では、密度が極めて低く、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*などがわずかに出現する。

## (2) 珪藻分析から推定される環境

いずれの試料も密度が低く、珪藻の生育しにくいやや乾燥した堆積環境であったとみなされる。16層北側では、陸生珪藻がわずかに出現し、乾燥した堆積環境のなかにやや湿った土壤の環境が分布していたと考えられる。12層になると陸生珪藻が優占して流水不定性種が伴って出現し、堆積地はやや湿った土壤の環境から不安定に滯水する環境で下位より湿润な環境が示唆される。4層では、密度が極めて低くなり、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境になつたとみなされる。

## 3. 植物珪酸体分析

### (1) 分析結果

#### 1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第9表および第34図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### 【イネ科】

イネ、キビ族型、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

#### 【イネ科—タケ亜科】

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

#### 【イネ科—その他】

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

#### 【樹木】

#### その他

#### 2) 植物珪酸体の検出状況

東壁サブトレントの下位の16層南側、北側では、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。12層および4層でも、おおむね同様の結果であるが、12層では樹木（その他）、4層ではイネ、スキ属型が出現している。イネの密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともネザサ節型が優勢となっている。

#### （2）考察

東壁サブトレントの下位の16層および12層の堆積当時は、竹苞類のメダケ属（おもにネザサ節）をはじめ、キビ族、ウシクサ族なども生育するイネ科植生であったと考えられ、12層では何らかの樹木も見られたと推定される。

4層では、少量ながらイネが検出されることから、周辺で稲作が行われていたと考えられ、スキ属も見られるようになったと推定される。なお、ここで

検出されたイネについては、周辺で利用された稻藁に由来する可能性も考えられる。稻藁の利用としては、敷き藁や堆肥、建物の屋根材や壁材、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）および燃料など多様な用途が想定される。

今回の分析では、花粉分析で検出されたシ属やコナラ属アカシ亜属などの樹木（照葉樹）が認められないが、植物珪酸体は花粉よりも現地性が高いことから、丘陵部などの周辺地域の植生が反映されていないためと考えられる。

#### 4. 火山灰分析

##### (1)はじめに

テフラ（火山灰）層の岩石学的諸特性（重鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井、2003）を参照した。

##### (2) 試料

分析試料は、東壁サブトレーンチより採取された4点である。

4層は礫混じり砂質黒色土壌で、礫の粒径は最大で5mm、平均で2~3mmの角礫で、花崗岩が母材と考えられる石英や黒雲母などが含まれる。12層は礫混じり砂質黒色土壌で、礫の粒径は最大で8mm、平均で3~4mmの角礫で、花崗岩が母材と考えられる石英や黒雲母などが含まれる。16層南側と北側は礫混じり砂質黒褐色土壌で、礫の粒径は最大で4mm、平均で2~3mmの角礫で、花崗岩が母材と考えられる石英や黒雲母などが含まれる。

##### (3) 分析方法

###### 1) 前処理

湿式用の筒（2~4φ）を用いて、水洗しながら各粒径ごとに筒分けを行う。2~3φ（0.250~0.125mm）と3~4φ（0.125~0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行い、そのテフラ粒子を分析対象とする。

###### 2) 重鉱物組成

テトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と軽鉱物（火山ガラスを含む）

のフラクションに区分する。重鉱物に含まれる磁性鉱物を磁石で取り除き、磁性鉱物と残った重鉱物をそれぞれ秤量する。残った重鉱物粒子についてレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で重鉱物の鑑定を行う。

###### 3) 火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さ、気泡の形状などを指標にして定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってきた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く纖維を束ねた形状を示す火山ガラス

F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

###### 4) 火山ガラスと斑晶鉱物の屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行う。火山ガラスについては3~4φ（0.125~0.063mm）の粒子を測定に用いる。

###### (4) 分析結果

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスの屈折率）を第10表および第35図に示す。第35図の左端上部には、対比される可能性のある指標テフラについて、火山ガラスの屈折率（n1）の範囲を示した。以下に、各試料ごとにテフラの特徴を記載する。

###### 1) 4層

鉱物組成は、軽鉱物98.5%、重鉱物1.5%である。

重鉱物の組成は、斜方輝石（oxp）8.3%、単斜輝石（cpx）1.0%、普通角閃石（gr. ho）10.2%、褐色角閃石（bw. ho）0.5%、黒雲母（bi）1.9%、カンラン石（ol）0.5%などである。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は0.1%である。火山ガラスの形態は、A'型のバブルウォールタイプである。火山ガラス（1個）の屈折率（n1）は1.5018である。

#### 2) 12層

鉱物組成は、軽鉱物97.6%、重鉱物2.4%である。重鉱物の組成は、斜方輝石（oxp）3.8%、単斜輝石（cpx）3.3%、普通角閃石（gr. ho）7.6%、カンラン石（ol）2.4%などである。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は0.3%である。火山ガラスの形態は、A型およびA'型のバブルウォールタイプである。火山ガラスの屈折率（n1）は、1.4992および1.5071-1.5086である。

#### 3) 16層南側

鉱物組成は、軽鉱物98.7%、重鉱物1.3%である。重鉱物の組成は、斜方輝石（oxp）が8.4%、単斜輝石（cpx）が1.4%、普通角閃石（gr. ho）が12.6%、褐色角閃石が1.4%、黒雲母が2.3%、カンラン石（ol）が2.3%などである。軽鉱物中には火山ガラスは含まれていなかった。

#### 4) 16層北側

鉱物組成は、軽鉱物98.4%、重鉱物1.6%である。重鉱物の組成は、斜方輝石（oxp）が4.4%、普通輝石が0.5%、普通角閃石（gr. ho）が4.8%、黒雲母（bi）が1.0%、カンラン石（ol）が4.4%などである。軽鉱物中には火山ガラスは含まれていなかった。

#### (5) 考察

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスの屈折率）、顕微鏡観察の所見、および土層の堆積状況などから、12層には、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）に由来するテフラ粒子がわずかに含まれていると考えられる。

### ⑤ SK316

#### 1. 植物珪酸体分析

##### (1) 試料

試料は、No.7からNo.9（SK316 No.①からNo.③、

土塊状）の3点である。

##### (2) 分析結果

###### 1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第9表および第34図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

###### [イネ科]

イネ、ヨシ属、キビ族型、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

###### [イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

###### [イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

###### [樹木]

その他

##### 2) 植物珪酸体の検出状況

土塊状試料のNo.7（SK316 No.①）～No.9（SK316 No.③）では、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）なども認められた。また、No.①とNo.②ではイネ、No.②ではヨシ属も検出された。イネの密度は600個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともネザサ節型が優勢となっている。

##### (3) 考察

掘立柱建物跡の内部に位置するSK316の土塊状試料では、イネやスキ属型が検出されるなど植物珪酸体の組成や密度が東壁サブトレの4層と類似しており、とくに明瞭な特徴は認められなかった。ここで検出されたイネについては、前述のように周辺で利用された稻藁に由来する可能性も考えられるが、密度が低いことから土壁の素材などとして人為的に混入された可能性は低いと考えられる。

## 2. 蛍光X線分析

### (1) 原理

蛍光X線とは元素に特有の一定以上のエネルギーをもつ固有X線を照射することによって、その物質を構成する原子の内殻の電子が励起されて生じた空孔に外殻の電子が遷移する際に放出される特性X線のことであり、その波長は内殻と外殻のエネルギー差に対応する。この差は元素ごとに固有があるので、蛍光X線のエネルギーも元素に固有である。ここでは、検出器自体がX線のエネルギー分析機能を持つ半導体検出器を利用するエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて、エネルギー分析を行う。この方法は、試料を非破壊で迅速に分析できる。

### (2) 試料

試料は、No.1 地山（S K316東側）：比較試料と、No.6 床面硬化部分、No.7 から No.9（S K316 No.①からNo.③、土塊状）の計5点である。

### (3) 方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premiumを使用した。測定条件は励起用X線ターゲットが Rh、管電圧および管電流はMiningモードのビーム1が40kVおよび100μA、ビーム2が10kVおよび200μA、Soilモードでビーム1が40kVおよび60μA、ビーム2が40kVおよび30μA、ビーム3が15kVおよび20μAである。装置の測定部径は9mm、計測時間はMiningモードが60秒、Soilモードが90秒で、大気雰囲気下で測定した。なお、検出元素に含まれるTiには作業台の元素が低量であるが反映されている。

### (4) 結果

#### 1) No.1 地山（S K316東側）（第36図）

土壤中に含有される元素に偏りが見られる可能性を想定し、3箇所でMiningモードとSoilモードで分析を行った。それぞれの計測でピークに変化は見られず、主要検出元素10種はアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）であった。特にピークが高く計測されたのは鉄（Fe）、ケイ素（Si）で、カリウム（K）、マンガン（Mn）の

ピークが見られる。

#### 2) No.6 S K316 床面硬化部分（第37図）

土壤中に含有される元素に偏りが見られる可能性を想定し、3箇所でMiningモードとSoilモードで分析を行った。それぞれの計測でピークに変化は見られず、主要検出元素10種はアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）であった。特にピークが高く計測されたのは鉄（Fe）、ケイ素（Si）で、カリウム（K）、マンガン（Mn）のピークが見られる。

#### 3) No.7 S K316 No.①（土塊状）（第38図）

土壤中に含有される元素に偏りが見られる可能性を想定し、4箇所でMiningモードとSoilモードで分析を行った。それぞれの計測でピークに変化は見られず、主要検出元素10種はアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）であった。特にピークが高く計測されたのは鉄（Fe）、ケイ素（Si）で、カリウム（K）、マンガン（Mn）のピークが見られる。色調の異なる箇所が見られたため多く分析を行ったが、同一のピークが得られた。

#### 4) No.8 S K316 No.②（土塊状）（第39図）

土壤中に含有される元素に偏りが見られる可能性を想定し、3箇所でMiningモードとSoilモードで分析を行った。それぞれの計測でピークに変化は見られず、主要検出元素10種はアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）であった。特にピークが高く計測されたのは鉄（Fe）、ケイ素（Si）で、カリウム（K）、マンガン（Mn）のピークが見られる。

#### 5) No.9 S K316 No.③（土塊状）（第40図）

土壤中に含有される元素に偏りが見られる可能性を想定し、3箇所でMiningモードとSoilモードで分析を行った。それぞれの計測でピークに変化は見られず、主要検出元素10種はアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チ

タン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、ジルコニウム (Zr) であった。特にピークが高く計測されたのは鉄 (Fe)、ケイ素 (Si) で、カリウム (K)、マンガン (Mn) のピークが見られる。

#### (5) 考察

分析の結果から、No.1 (地山)、No.6 (床面硬化部分)、No.7 (S K316 No.①)、No.8 (S K316 No.②)、No.9 (S K316 No.③) は全て同一の結果であった。ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) は長石起源の元素と考えられ、カリウム (K)、カルシウム (Ca) はアルカリ長石であるカリ長石や灰長石に含まれ、これらは花崗岩に含まれる。以上のことからこれらの試料は花崗岩の風化土であると考えられる。最も高いピークを示す鉄 (Fe) は一般的に堆積物中に多く含まれる酸化鉄や水酸化鉄などを反映したと考えられる。また、No.1 (地山) と他の試料を比較すると、他の試料に漆喰や石灰の主成分である水酸化カルシウム・炭酸カルシウムから由来するカルシウム (Ca) のピークが特に高いなどの特徴は見られず、床面や土塊の硬化に起因するものも認められなかった。

### 3. 花粉分析 (参考比較)

#### (1) 試料

試料は、No.7 (S K316 No.①、土塊状) 1点である。

#### (2) 結果

##### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計22分類群である。これらの学名と和名および粒数を第7表に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを第32図に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

##### [樹木花粉]

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属  
[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科イイラクサ科、マメ科

##### [草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ゾバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

##### [シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

#### 2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。(第32図)

分析の結果、草本花粉の占める割合が高く、78%を占め、密度は低い。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現し、ヨモギ属、タンボボ亜科、ゾバ属、アブラナ科が伴われる。樹木花粉では、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属が低率に出現する。また、寄生虫卵や、明らかな消化残渣は認められない。

#### (3) 花粉分析から推定される植生と環境

イネ属型を含むイネ科が高率に出現し、ゾバ属、栽培植物を多く含むアブラナ科も比較的多く、裏作や田畠輪換の行われる耕作土の堆積物と見なされる。建物内の土塊状堆積物であることから、水田作土がもたらされ、利用されたと見られる。周辺植生としては、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹とコナラ属コナラ亜属、クリなどの落葉樹で構成され、東壁サブトレント4層の森林植生と類似する。

### 4. 珪藻分析 (参考比較)

#### (1) 試料

試料は、No.7 (S K316 No.①、土塊状) 1点である。

#### (2) 結果

##### 1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 2分類群である。

##### [貧塩性種]

*Cymbella silesiaca*、*Hantzschia amphioxys*

#### 2) 珪藻群集の特徴

珪藻密度は極めて低く、流水不定性種の*Cymbella silesiaca*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*が極わずかに出現する。

ずかに検出された。

### (3) 珪藻分析から推定される環境

密度が極めて低く、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した環境で生成された堆積物である。

## ⑥まとめ

### 1. 東壁サブトレンチ

分析の結果、下位の16層（No.4・5）は北側および南側とも、花粉も珪藻もほとんど検出されず、比較的乾燥した環境であった。12層（No.3）では、花粉はほとんど検出されないが、陸生珪藻を主に流水不定性種が伴われ、有機質の分解される乾燥を繰り返す環境が示唆され、竹笹類などのイネ科とヨモギ属などの乾燥を好む草本を主とする草地が分布していた。火山灰分析の結果では、12層（No.3）から鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）に由来するテフラ粒子がわずかに検出された。4層（No.2）の時期になると、堆積地はイネ科、ヨモギ属などの草本が繁茂する比較的乾燥した草地の環境で、周囲ではソバの畑作や稲作が行われる。周辺地域の森林植生としては、カシ類、シイ類を主とする照葉樹林が分布し、クリ、ナラ類の落葉広葉樹もその構成要素であった。

### 2. SK316

SK316から検出された土塊状試料（No.7）は、イネ、スキ属などの植物珪酸体、イネ属型を含むイネ科やソバやアブラナなどの畑作植物の花粉が検出され、水田や畑作の他に周囲の雑草の微遺体が見られた。また、これらは東壁サブトレの4層と類似した遺体群であるが、より耕作土に近く、SK316の土塊状試料は東壁サブトレの4層と同時期の周辺の耕作土由来の堆積物と見られる。検出されたイネのプラント・オバールは密度が低いことから土壁の素材などとして稻藁などが人為的に混入された可能性は低い。蛍光X線による主要検出元素を見ると、SK316の土塊状試料（No.7・8・9）および床面硬化部分（No.6）は地山（No.1）と同じであり、同じ母材から生成された堆積物と考えられる。また土塊状試料に塗喰などに見られるような土を固める石灰に含まれるカルシウム（Ca）のピークは高くな

く地山（No.1）と同様であった。以上から、土塊状試料は、稻藁を用いた苗や塗喰などを混ぜるのとは異なった方法、たとえば叩き締めや有機質の接着性物質を混ぜ込む等によって固結したと考えられる。

（一般社団法人文化財科学研究センター）

## 参考文献

- 中村純（1967）花粉分析、古今書院、p.82-102。  
島倉三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集、60p。  
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究13、p.187-193。  
中村純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。  
中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。  
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。  
地学固体研究会編（1996）新版地学事典、平凡社、1443p。  
土質工学会編（1979）土質試験法、p.2-5-1~2-5-23、4-2-1~4-3-1。  
金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壤層分析の実証的研究、日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集、p.112-113。  
Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-506.  
Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms, 333p., National Environmental Research Center.  
K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae • 1-4.  
Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophytic and saprotrophic taxa. Diatom 10, p.35-47.  
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用、東北地理、42、p.73-88。  
伊藤良久・福内誠司（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古

第7表 大久保遺跡における花粉分析結果

分類群		東慶サブトレンド				SK316
学名	和名	No.2	No.3	No.4	No.5	No.7 No.①
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Podocarpus</i>	マキ属		1			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属					1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				1	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1				
<i>Castanea crenata</i>	クリ	6		1	1	3
<i>Castanopsis</i>	シイ属	9	1		2	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	10	9			2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	16	19		3	3
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1			1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	2	2	
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属				1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	1			3
Leguminosae	マメ科	12			1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	44	4	1	1	47
<i>Oryza</i> type	イネ属型					9
Cyperaceae	カヤツリグサ科					2
<i>Rumex</i>	ギンギギ属				1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1				5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザ科-ヒユ科					1
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属					1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	1				
Cruciferae	アブラナ科	1	1		1	3
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	1				
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウガサ属-フサモ属				1	
Aipoideae	セリ亞科	9				2
Lactuceoideae	タンボポ科	1				7
Asteroidae	キク亜科	4	1			3
Artemisia	ヨモギ属	87	2	1	1	17
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	9				6
Trilate type spore	三条溝胞子	1				6
Arboreal pollen	樹木花粉	43	31	3	11	12
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	13	1	0	1	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	149	8	2	5	98
Total pollen	花粉総数	205	40	5	17	114
Pollen frequencies of 1cm	試料1cm中の花粉密度	1.5 ×10 <sup>-3</sup>	3.5 ×10 <sup>-2</sup>	4.8 ×10 <sup>-1</sup>	1.5 ×10 <sup>-2</sup>	8.1 ×10 <sup>-2</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	7	4	1	2	2
Fern spore	シダ植物胞子	10	0	0	0	12
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(+)	(+)	(++)	(+)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10 <sup>3</sup> )					
未分解遺体片		0	0.8			
分解質遺体片		50.4	29.2	34.6	45.5	23.4
炭化遺体片(微粒炭)		2.2	0.4	0.8		0.7

第8表 大久保遺跡における珪藻分析結果

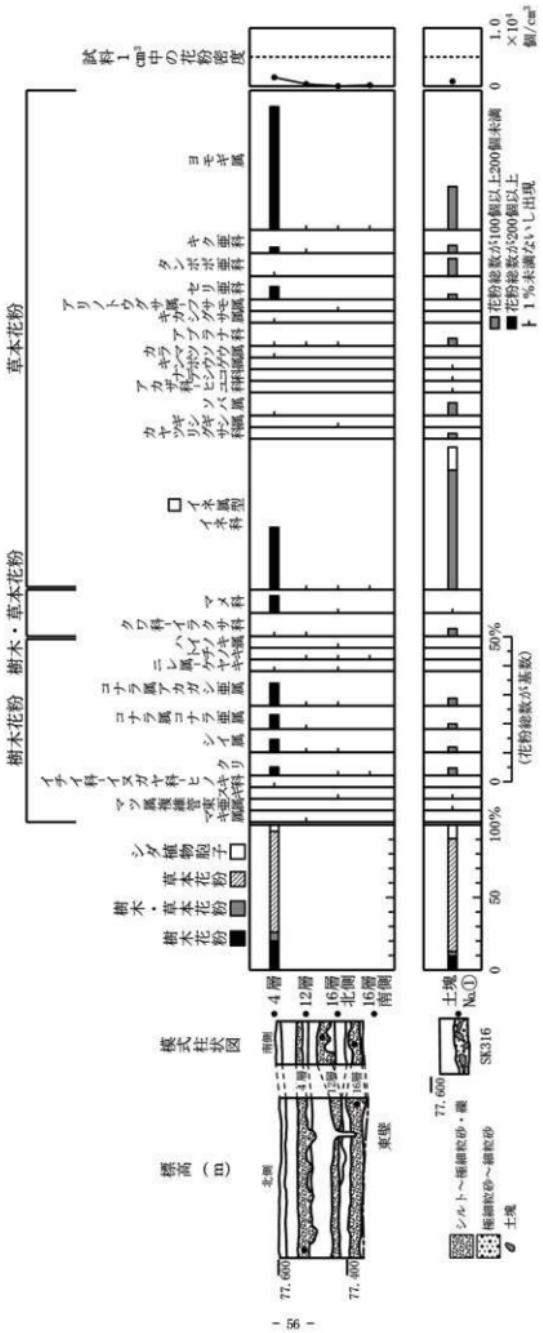
分類群	東壁サブトレンド				SK316 No.7 No.①
	No.2 4層	No.3 12層	No.4 16層南側	No.5 16層北側	
貧塩性種（淡水生種）					
<i>Caloneis silicula</i>		1			
<i>Cymbella silesiaca</i>		2			1
<i>Cymbella turgidula</i>		1			
<i>Fragilaria capucina</i>		2		1	
<i>Frustulia vulgaris</i>		1			
<i>Gomphonema clevei</i>		1			
<i>Gomphonema parvulum</i>		2		1	
<i>Gomphonema</i> spp.		1			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	3	17		3	1
<i>Navicula acceptata</i>		1			
<i>Navicula atomus</i>		3			
<i>Navicula contenta</i>		1			
<i>Navicula elginensis</i>		3			
<i>Navicula gerloffii</i>		6			
<i>Navicula kotschyi</i>		3			
<i>Navicula mutica</i>	2	9		3	
<i>Navicula</i> spp.		7			
<i>Neidium alpinum</i>		26	1	4	
<i>Nitzschia nana</i>		1			
<i>Nitzschia palea</i>		3			
<i>Nitzschia</i> spp.		1		1	
<i>Pinnularia appendiculata</i>		1			
<i>Pinnularia borealis</i>		4			
<i>Pinnularia brunii</i>		1		1	
<i>Pinnularia gibba</i>	1	1		1	
<i>Pinnularia hemiptera</i>		1			
<i>Pinnularia microstauron</i>				1	
<i>Pinnularia obscura</i>	1	12		2	
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>		18		3	
<i>Pinnularia subcapitata</i>		2		1	
<i>Pinnularia viridis</i>		1			
<i>Pinnularia</i> spp.		4			
<i>Rhopalodia gibberula</i>		6		4	
<i>Suriella angusta</i>		1			
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		1			
合計	7	145	1	26	2
未同定	2	10	0	3	0
破片	12	71	1	12	2
試料 1 cm <sup>2</sup> 中の殻数密度	1.8 ×10 <sup>3</sup>	3.1 ×10 <sup>4</sup>	2.0 ×10 <sup>2</sup>	5.8 ×10 <sup>3</sup>	4.0 ×10 <sup>2</sup>
完形殻保存率 (%)	42.9	68.6	50.0	70.7	50.0

第9表 大久保遺跡における植物珪酸体分析結果

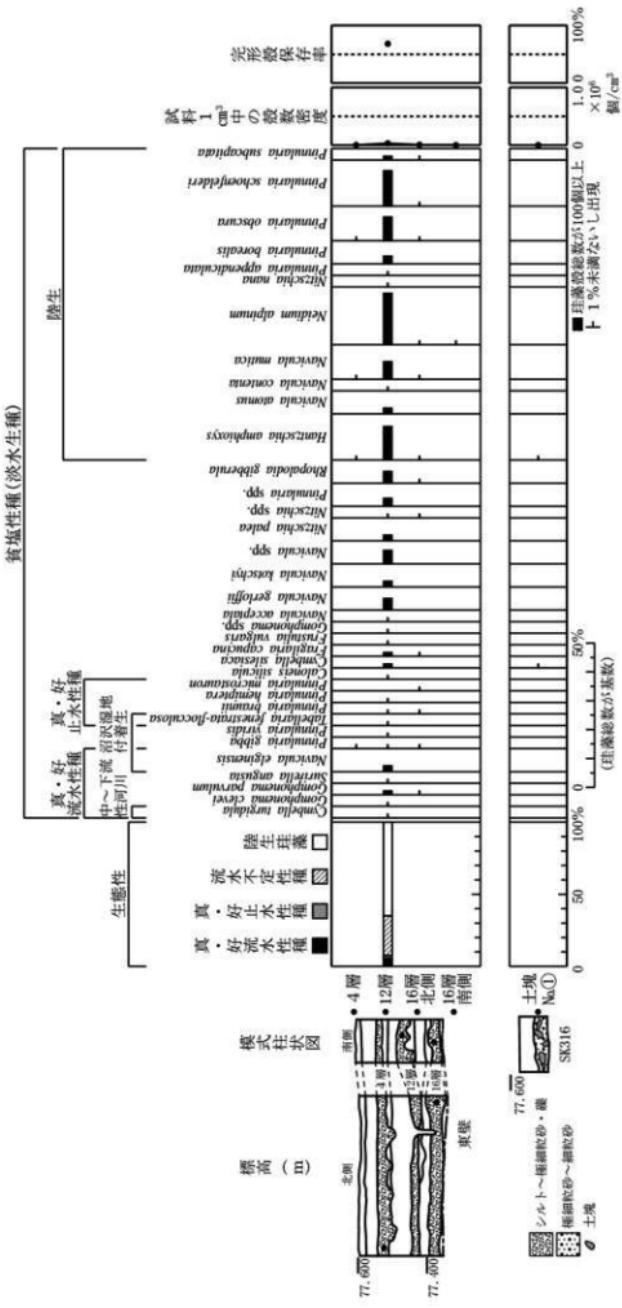
検出密度(単位: ×100個/g)		地点-試料								東雲サブトレンド				SK316			
分類群	学名	No. 2 4層	No. 3 12層	No. 4 16層南側	No. 5 16層北側	No. 7 No. ①	No. 8 No. ②	No. 9 No. ③	No. 10 No. ④	No. 11 No. ⑤	No. 12 No. ⑥	No. 13 No. ⑦	No. 14 No. ⑧	No. 15 No. ⑨			
イネ科	Gramineae																
イネ	<i>Oryza sativa</i>	7															
ヨシ属	<i>Phragmites</i>																
ヘビノホコ型	<i>Panicum</i> type	7	7	7													
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	7														
ウンクサ属 A	<i>Andropogoneae</i> A type	27	13	27	7	7	13	39	38								
タケモ科	Bambusoideae																
タケモ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	20	20	48	27	32	26										
ネササ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	228	141	233	258	165	162	173									
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	13	13	7	7	6	6	6									
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	7	7	7	14	6	6	6									
未分類等	Others	107	100	62	95	57	71	32									
その他のイネ科	Others																
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	7	7	13	6	13									
株状起源	Rootshaped	47	13	41	7	70	84	45									
未分類等	Others	114	47	165	129	114	110	166									
樹木起源	Arboreal																
その他の	Others																
植物珪酸体总数	Total	596	382	664	549	592	544	544									
おもな分類群の算定生産量(単位: kg/m <sup>2</sup> ·cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出																	
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.20															
ヨシ属	<i>Phragmites</i>																
スキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.08															
タケモ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.23	0.23	0.56	0.31	0.08	0.08	0.08									
ネササ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.09	0.67	1.12	1.24	0.37	0.37	0.30									
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.10	0.10	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05									
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	0.02	0.02	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02									
タケモ科の比率(%)		0.19	0.19	0.19	0.19	0.19	0.19	0.19									
メダガ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	16	23	32	19	20	20	25									
ネササ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	76	66	64	75	65	68	69									
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	10	3	3	4	4	4									
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crasinodii</i>	1	2	1	2	2	2	2									
メダガ節	<i>Medeola</i> rati	92	88	96	94	95	94	94									

第10表 大久保遺跡におけるテフラ分析結果

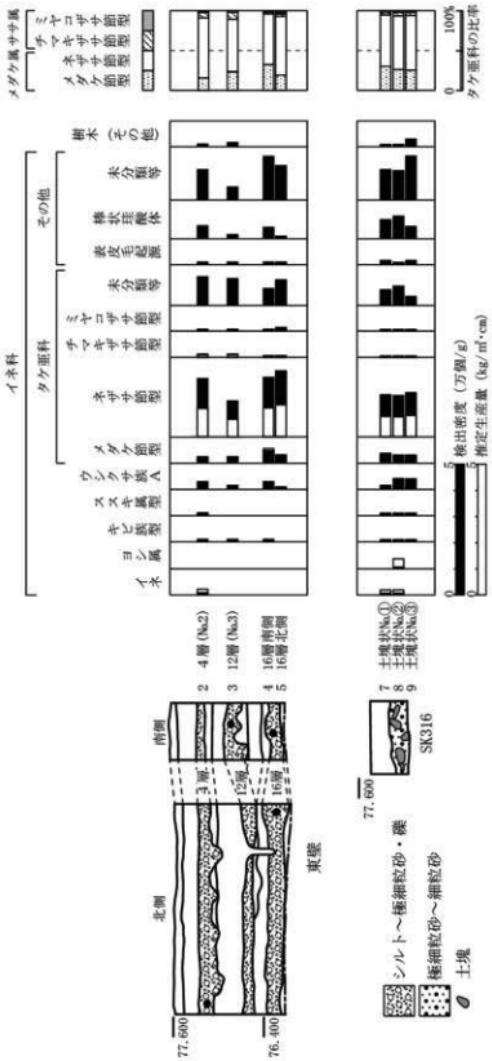
	東壁サブトレンド			
	No.2	No.3	No.4	No.5
サンプル名	4層	12層	16層南側	16層北側
試料重量(g)	0.2780	0.2650	0.2529	0.2723
軽鉱物	0.2702	0.2570	0.2437	0.2655
重鉱物(g)	0.0041	0.0064	0.0031	0.0043
回収重量合計(g)	0.2743	0.2634	0.2468	0.2698
重鉱物組成(個)	斜方輝石(oxp)	17	8	18
	單斜輝石(cpx)	2	7	3
	普通角閃石(gr. ho)	21	16	27
	褐色角閃石(bw, ho)	1	0	3
	黒雲母(bi)	4	0	5
	カンラン石(o1)	1	5	5
	不明およびその他	160	174	153
	合 計	206	210	214
	火山ガラス(個)	1	3	0
非火山ガラス(個)	923	877	800	812
火山ガラス形態分類(個)	斜方輝石(oxp)	0	1	0
	單斜輝石(cpx)	1	2	0
	普通角閃石(gr. ho)	0	0	0
	褐色角閃石(bw, ho)	0	0	0
	黒雲母(bi)	0	0	0
	不明およびその他	0	0	0
サンプル名	No.2	No.3	No.4	No.5
重液分離後の回収率(重量%)	98.67	99.40	97.59	99.08
軽鉱物の含有率(重量%)	98.51	97.57	98.74	98.41
重鉱物の含有率(重量%)	1.49	2.43	1.26	1.59
合 計	100.00	100.00	100.00	100.00
重鉱物組成(個数%)	斜方輝石(oxp)	8.25	3.81	8.41
	單斜輝石(cpx)	0.97	3.33	1.40
	普通角閃石(gr. ho)	10.19	7.62	12.62
	褐色角閃石(bw, ho)	0.49	0.00	1.40
	黒雲母(bi)	1.94	0.00	2.34
	カンラン石(o1)	0.49	2.38	2.34
	不明およびその他	77.67	82.86	71.50
合 計	100.00	100.00	100.00	100.00
火山ガラスの形態分類(個数%)	A型	0.00	0.11	0.00
	A'型	0.11	0.23	0.00
	B型	0.00	0.00	0.00
	C型	0.00	0.00	0.00
	D型	0.00	0.00	0.00
	E型	0.00	0.00	0.00
	F型	0.00	0.00	0.00
火山ガラス含有率(個数%)	0.11	0.34	0.00	0.00
火山ガラスの屈折率(n1)	1.502	1.4992, 1.5071-1.5086	—	—
火山ガラスの屈折率の測定数	1	5	0	0



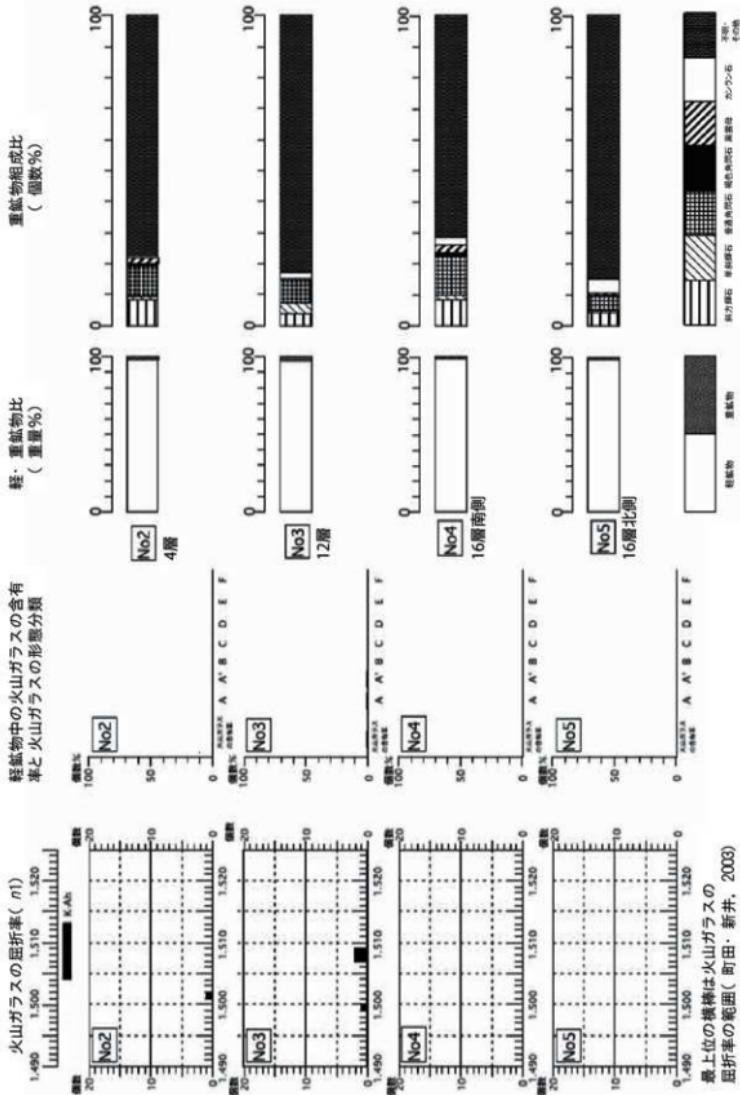
第32図 大久保道跡における花粉ダイアグラム



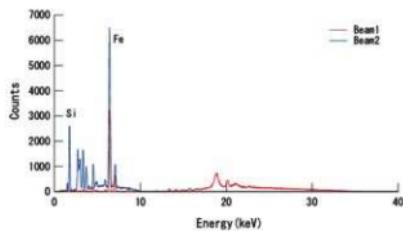
第33図 大久保遺跡における主要珪藻ダイアグラム



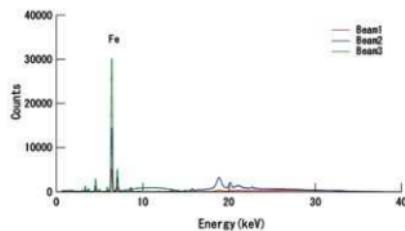
第34図 大久保遺跡における植物珪酸体分析結果



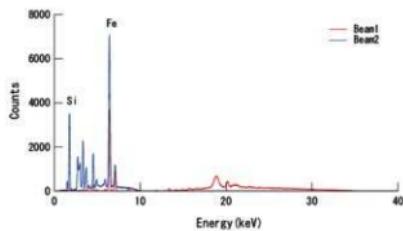
第35図 大久保遺跡におけるテフラ分析結果



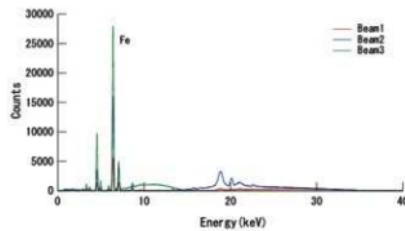
1 Na1- 地山 Mining1



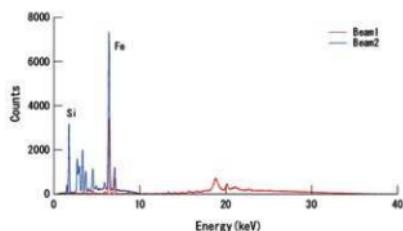
2 Na1- 地山 Soil1



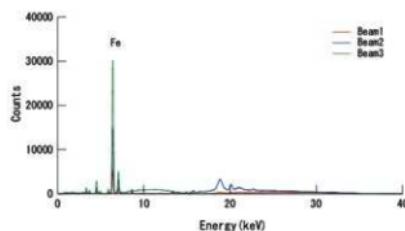
3 Na1- 地山 Mining2



4 Na1- 地山 Soil2



5 Na1- 地山 Mining3

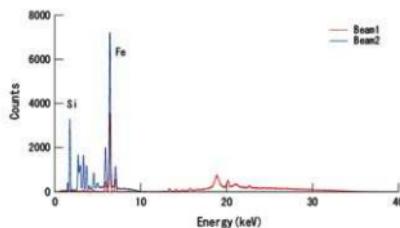


6 Na1- 地山 Soil3

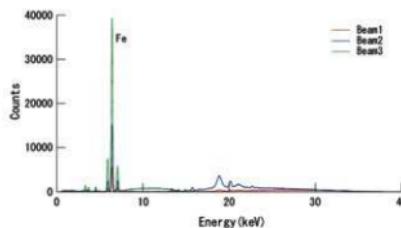
地山における主要検出元素（10種）

Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr

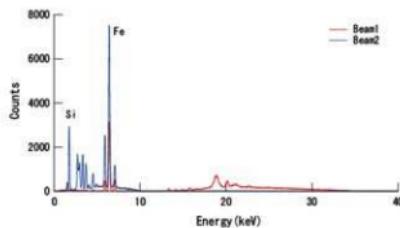
第36図 大久保道路におけるX線分析結果 I



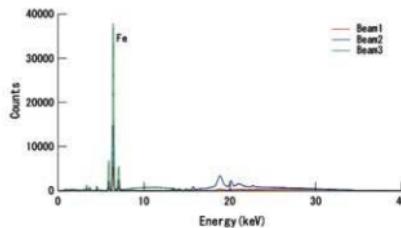
7 No. 6 - 床面硬化部分 Mining1



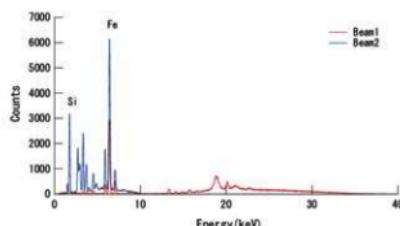
8 No. 6 - 床面硬化部分 Soil1



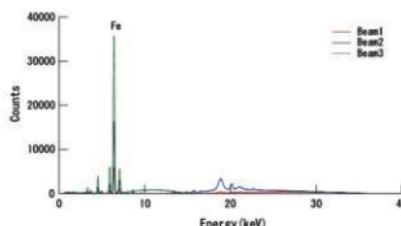
9 No. 6 - 床面硬化部分 Mining2



10 No. 6 - 床面硬化部分 Soil2



11 No. 6 - 床面硬化部分 Mining3

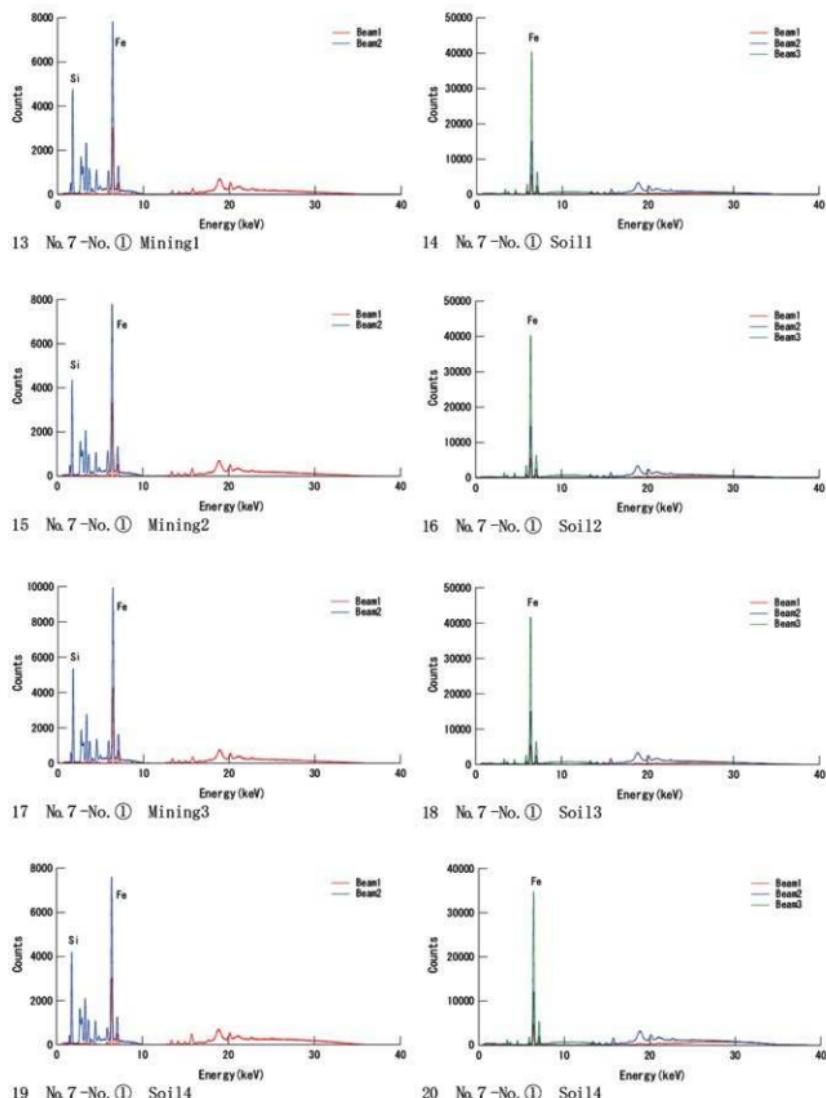


12 No. 6 - 床面硬化部分 Soil3

床面硬化部分における主要検出元素（10種）

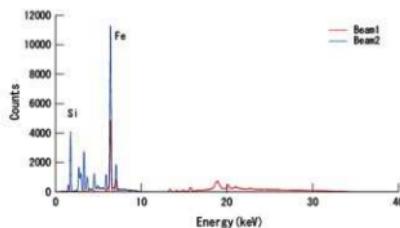
Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr

第37図 大久保遺跡におけるX線分析結果Ⅱ

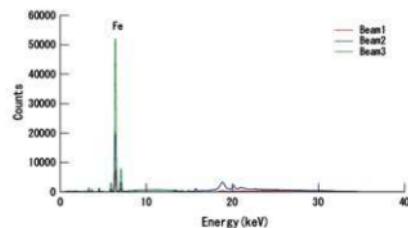


No. 7-SK316 No. ①における主要検出元素（10種）

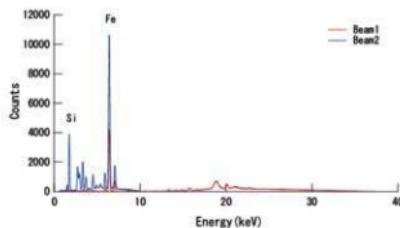
Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr



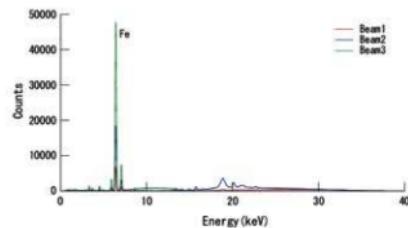
21 No. 8 -Na② Mining1



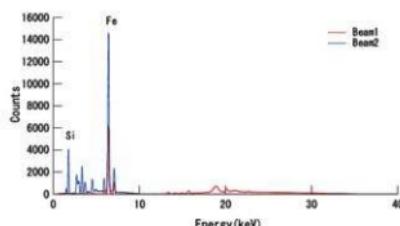
22 No. 8 -Na② Soil1



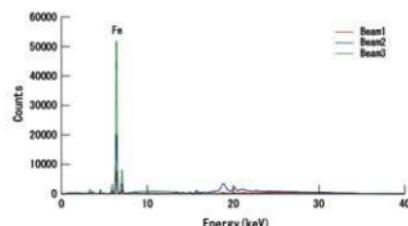
23 No. 8 -Na② Mining2



24 No. 8 -Na② Soil12



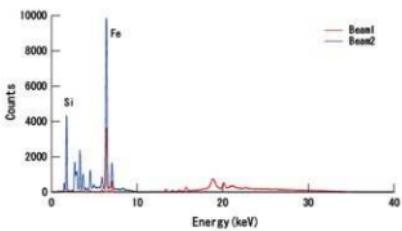
25 No. 8 -Na② Mining3



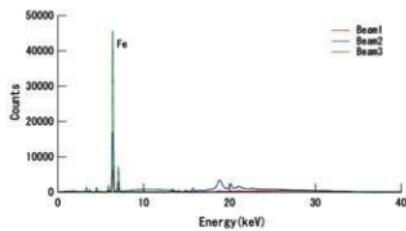
25 No. 8 -Na② Soil13

No. 8 -SK316 Na②における主要検出元素（10種）

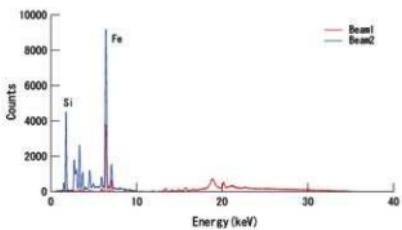
Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr



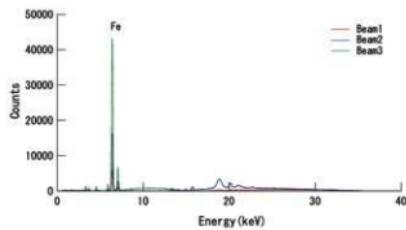
27 No.9-No.③ Mining1



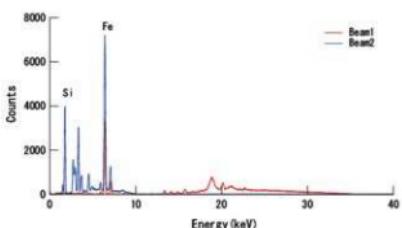
28 No.9-No.③ Soil1



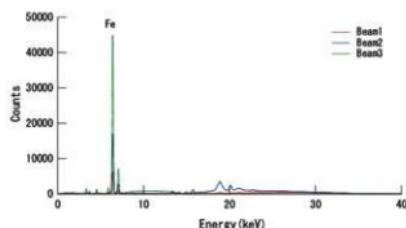
29 No.9-No.③ Mining2



30 No.9-No.③ Soil12



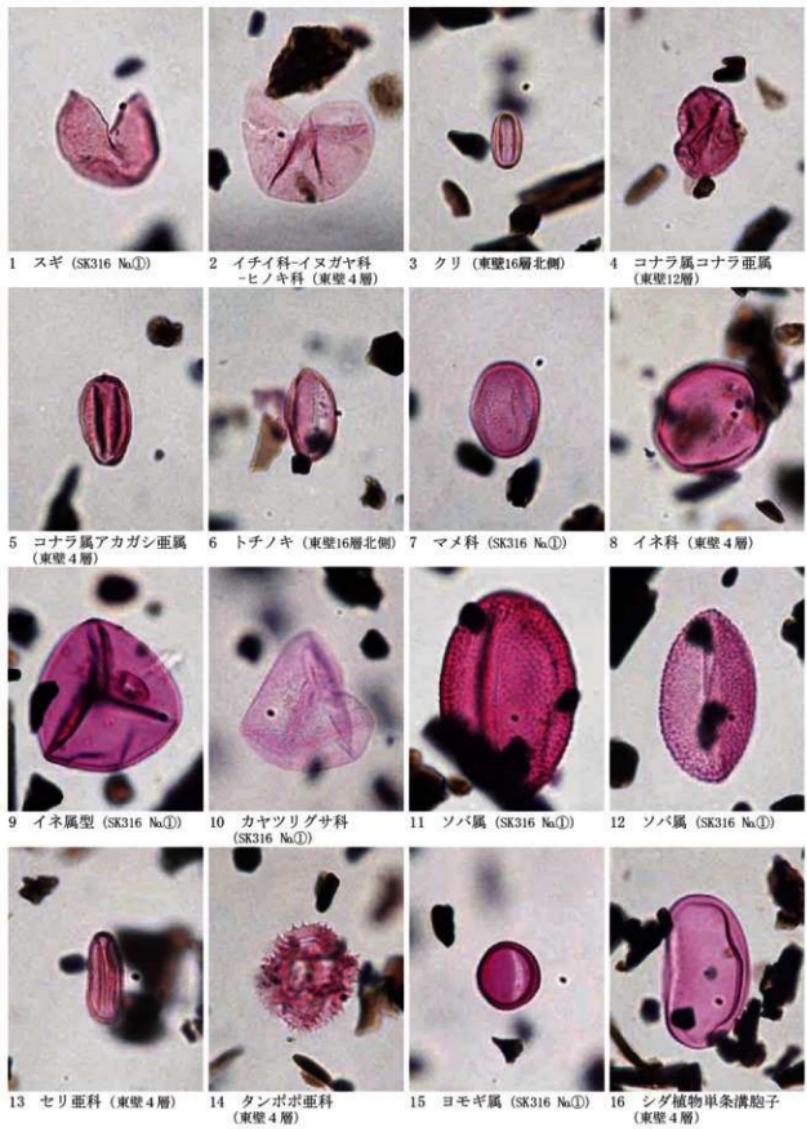
31 No.9-No.③ Mining3



32 No.9-No.③ Soil13

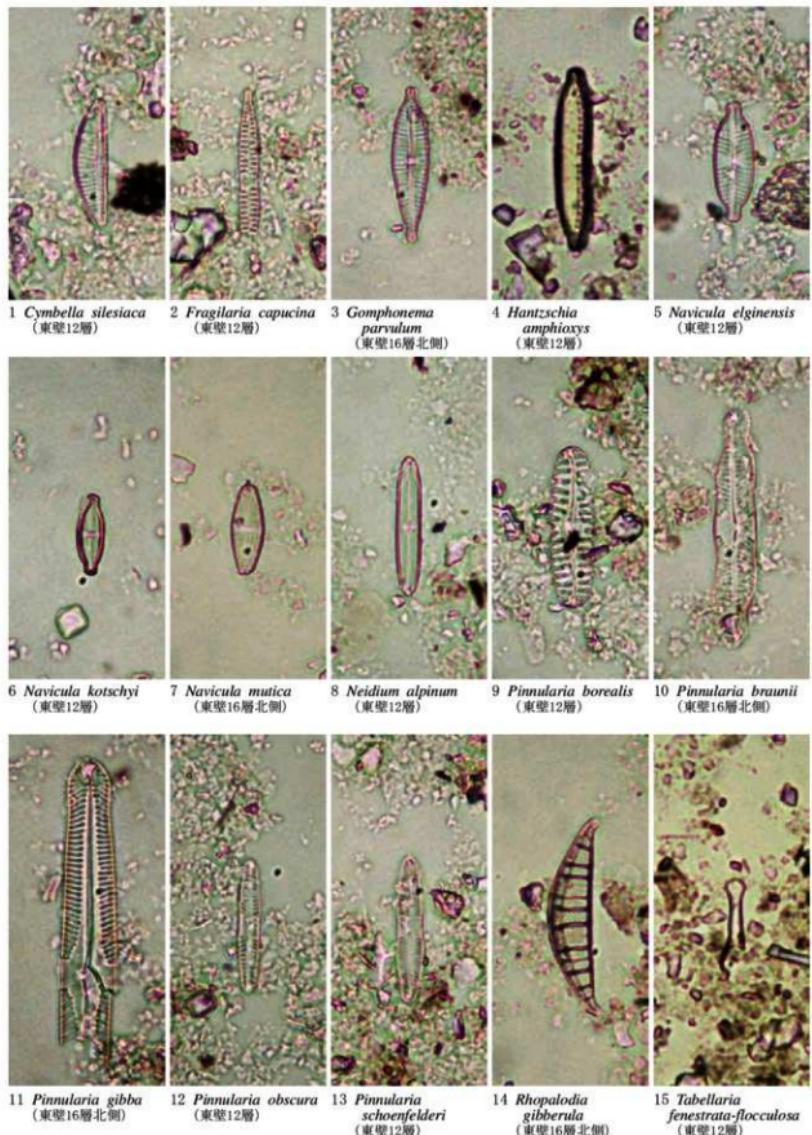
No.9-SK316 No.③における主要検出元素（10種）

Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr



— 10  $\mu$ m

第41図 大久保遺跡の花粉・孢子



— 10  $\mu$ m

第42図 大久保遺跡の珪藻



— 50  $\mu$  m

第43図 大久保遺跡の植物珪酸体（プランツ・オパール）



1 A型火山ガラス (No. 3)



2 A'型火山ガラス (No. 3)



3 A'型火山ガラス (No. 3)



4 斜方輝石opxとカンラン石ol (No. 3)



5 单斜辉石epx (No. 3)



6 普通角闪石ho (No. 3)  
※粒子の大きさは0.125~0.063mm

第44図 大久保遺跡のテフラ写真

- 環境解析への応用。珪藻学会誌, 6, p.23-45。
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—、植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44。
- 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究, 27, p.1-20。
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指數DWp, pH耐性能、内田老舗園, 666p。
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会, p.276-283。
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケノコ植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学, 19, p.69-84。
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オバール)、考古学と植物学、同成社, p.189-213。
- 杉山真二 (2009) 植物珪酸体と古生態、人と植物の関わりあい④、大地と森の中で—縄文時代の古生態系—、縄文の考古学Ⅲ、小杉康ほか編、同成社, p.105-114。
- 藤原宏志 (1976) プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学, 9, p.15-29。
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オバール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学, 17, p.73-85。
- 遠藤邦彦・鈴木正章 (1980) 立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層、考古学と自然科学, No.13, p.19-30。
- 町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Ta火山灰の発見とその意義、科学, 46, p.339-347。
- 町田洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰、第四紀研究, 17, p.143-163。
- 町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—、東京大学出版会, 336p。
- 吉川周作 (1976) 大阪層群火山灰層について、地質学雑誌, 82, p.497-515。

#### 【作業従事者】

- 花粉分析、珪藻分析：金原正子（一般社団法人文化財科学研究センター 代表理事）
- 植物珪酸体分析、火山灰分析：杉山真二（一般社団法人文化財科学研究センター 研究員）
- 蛍光X線分析：金原裕美子（一般社団法人文化財科学研究センター 主任研究員）

## 第3節 大久保遺跡（第3次調査）出土鉄滓の分析調査

### ①いきさつ

大久保遺跡は三重県三重郡菰野町潤田に所在する。第3次調査地区では平安時代末から鎌倉時代と推定される掘立柱建物跡が5棟検出されている。このうち1棟の柱穴（S B314 No.6）より鉄滓が出土した。そこで地域周辺での鉄器生産の様相を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

### ②調査方法

#### 2-1. 供試材

第11表に示す。出土鉄滓2点の調査を行った。

#### 2-2. 調査項目

##### (1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

##### (2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

##### (3) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

##### (4) ピッカース断面硬度

ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉄滓中の結晶の判定を行った。試験は鏡

面研磨した試料に $136^{\circ}$ の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた溝の面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は $50\text{gf}$ で測定した。

#### (5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子㈱製JXA-8800RL（波長分散型5チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 $2.0 \times 10^{-6}$ アンペア、ビーム径3 $\mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これをを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

#### (6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO<sub>2</sub>）、酸化アルミニウム（Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K<sub>2</sub>O）、酸化ナトリウム（Na<sub>2</sub>O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）、酸化クロム（Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）、五酸化磷（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO<sub>2</sub>）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

### ③調査結果

#### OK-1：楕形鍛治済（含鉄）

##### (1) 肉眼観察：表面が茶褐色の土砂に覆われた小

形の楕形鍛治済（31.7g）である。上面にはごく小形の木炭痕が散在する。下面是木炭痕による細かい凹凸が目立つ。また金属探知器での反応はないが、やや強い着磁性がある。内部に鈍化した鉄部が存在する可能性が考えられる。

(2) マクロ組織：第45図①に示す。写真左側の明灰色部は鍛治済、写真右側の青灰色～黒灰色部は鈍化鉄である。観察面で直径15mm前後のまとまりのよい鉄部が確認された。

(3) 顕微鏡組織：第45図②③に示す。②は鍛治済部分の拡大である。澤中には白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite : FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>）が晶出する。鍛鍊鍛治済の晶癖といえる。③は鈍化鉄部の拡大で、黒色層状のペーライト（Pearlite）組織の痕跡が微かに残存する。ペーライト組織痕跡の割合から、この箇所の炭素含有率は0.2%前後の軟鉄と推測される。

(4) ピッカース断面硬度：第45図②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は429 Hv、436 Hv、446 Hvであった。風化等の影響か、ウスタイトの文献硬度値450～500 Hvよりも若干軟質であるが、結晶の形状と色調、後述するEPMAを用いた定性・定量分析の結果から、ウスタイト（Wustite : FeO）と推定される<sup>1)</sup>。さらに淡灰色柱状結晶の硬度値は543 Hvであった。ファヤライトの文献硬度値600～700 Hvよりもやや軟質であるが、これも結晶の形状と色調、後述するEPMAを用いた定性・定量分析の結果から、ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>）と推定される。

(5) EPMA調査：第45図④に澤部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は97.7%FeO（分析点1）で、ウスタイト（Wustite : FeO）と推定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は68.9%FeO-31.0%SiO<sub>2</sub>（分析点2）であった。ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>）に同定される。素地部分の定量分析値は46.6%SiO<sub>2</sub>-14.0%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-6.0%CaO-5.1%K<sub>2</sub>O-3.1%Na<sub>2</sub>O-25.1%FeO（分析点3）であった。また澤中の微小明白粒は、特性X線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析

値は94.9%Fe(分析点4)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。

(6) 化学組成分析: 第12表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は58.77%と高め傾向を示す。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.10%、酸化第一鉄(FeO)が51.87%、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)26.25%であった。造渣成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)の割合は15.60%と低く、塩基性成分(CaO+MgO)も0.56%と低値である。主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.06%、バナジウム(V)が0.01%で低値であった。また酸化マンガン(MnO)も<0.01%、銅(Cu)も<0.01%と低値であった。

当鉄滓は製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO<sub>2</sub>、V、MnO)の低減傾向が顕著であり、鍛錬鍛治滓と推定される。

#### 00K-2: 鍛治滓

(1) 肉眼観察: 非常に小形の鍛治滓破片(14.6g)である。表面は茶褐色の土砂や鉄錆化物に覆われる。また着磁性はあるが、金属探知器での反応はなく、内部にまとまった鉄部が存在する可能性は低いと考えられる。

(2) マクロ組織: 第46図①に示す。遺物表面に薄く青灰色の錆化鉄が観察される。これに対して内側の明灰色部は鍛治滓である。滓中にも微細な錆化鉄部が多数点在するが、まとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織: 第46図②③に示す。②は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛治滓の晶癖である。また③中央の不定形青灰色へ灰色部は鍛治滓中の錆化鉄である。金属組織の痕跡は不明瞭で、鉄中の炭素含有率の推定は困難な状態であった。

(4) ピッカース断面硬度: 第46図②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は418Hv、431Hv、452Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450~500Hvと比較すると軟質傾向を示すが、結晶の形状と色調、後述するEPMAを用いた定性・定量分析の結果から、ウスタイト(Wustite: FeO)と推定される。

(5) EPMA調査: 第46図④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)に強い反応がある。定量分析値は97.3%FeO

(分析点5)で、ウスタイト(Wustite: FeO)と推定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は62.8%FeO~31.5%SiO<sub>2</sub>(分析点6)であった。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)に同定される。素地部分の定量分析値は46.5%SiO<sub>2</sub>~16.7%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>~4.7%CaO~6.4%K<sub>2</sub>O~3.5%Na<sub>2</sub>O~20.0%FeO(分析点7)であった。また滓中の微小明白色粒は、特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は101.3%Fe(分析点8)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。

(6) 化学組成分析: 第12表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は58.02%と高値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.19%、酸化第一鉄(FeO)が40.06%、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)38.17%の割合であった。造渣成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)の割合は12.96%と低く、塩基性成分(CaO+MgO)も1.17%と低値である。主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.07%、バナジウム(V)が0.02%であった。また酸化マンガン(MnO)も0.01%、銅(Cu)は<0.01%と低値である。

当鉄滓も楕形鍛治滓(00K-1)と同様、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO<sub>2</sub>、V、MnO)の低減傾向が顕著であった。鍛錬鍛治滓に推定される。

#### ④まとめ

大久保遺跡(第3次調査地区)から出土した、平安時代末~鎌倉時代の遺物と推定される鉄滓2点は、ともに錆化鉄部を含む鍛錬鍛治滓であった。遺跡周辺で鉄素材を熱間で鍛打加工して、鍛造器具を作製していたと考えられる。砂鉄起源の脈石成分(TiO<sub>2</sub>、V、MnO)の低減傾向が著しく、製錬工程の不純物(砂鉄製錬滓)が十分除去された鉄素材(新鉄)、または廃鉄器が鍛冶原料であったと考えられる。

また楕形鍛治滓(00K-1)中には、まとまった錆化鉄部が確認された。金属組織(パラライト)痕跡の残存する部分は、炭素含有率0.2%前後の軟鉄と推測される。これが鉄素材の炭素量を反映しているか判断することは難しいが、全体がこうした材質の鉄材は比較的柔らかく加工性が良い。建築金物や刃器

の地金部分に向いた原料といえる。

(日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂)

#### 註

1) 日刊工業新聞社『純結晶組織写真および識別法』1968,

ウスタイトは450~500Kv、マグネタイトは500~600Kv、フニア  
イヤライトは600~700Kvの範囲が提示されている。

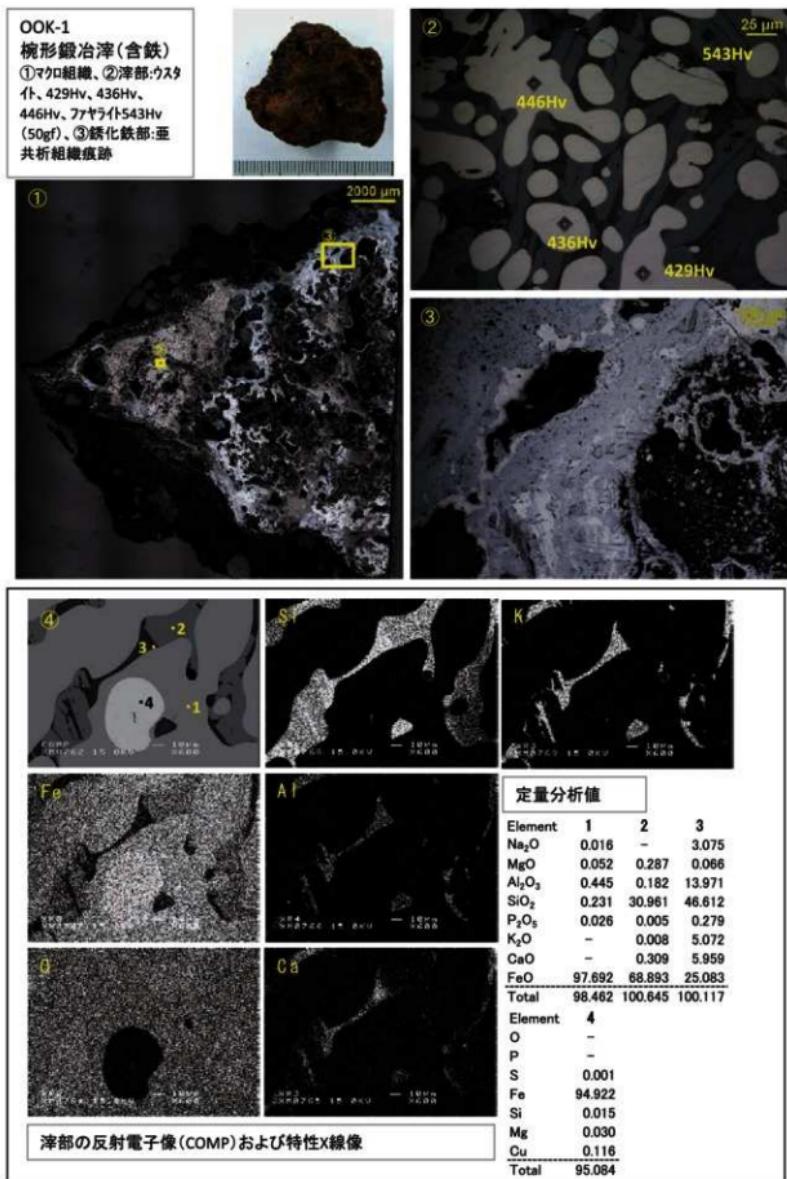
第11表 供試材の履歴と調査項目

通称名	出土位置	試料No.	遺物名稱	測定年代	大矢径(cm)	重裏心	測定項目			備考
							アフロ 留め頭 組合	メラル青 組合	ヒガニ-ク 新面鏡 火薬回折	
DOOK-1	大久保	SB314 No.6	5. 條形留め頭(含鉄)	平安時代後期～鎌倉時代前期	40.2×35.5×26.2	31.7	銀七(△)	○ ○	○ ○	○ ○
DOOK-2		6. 銀斧			31.5×22.1×19.8	14.6	丸L	○ ○	○ ○	○ ○

第12表 供試材の化学組成

表13 出土遺物の調査結果のまとめ

样品号	地名	出土地点	推定年代	断续地层	断续地层		生铁生锈率(%)	V	MnO	渣分	Cu	所见
					Total Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	纯生铁成分						
000K-1	大久保遺跡	SE314 (1層)	平安時代後期～ 鎌倉時代初期	漫態WF-I 鐵化狀態，無共析鐵晶體	56.77	26.25	0.56	0.06	0.01	0.01	15.60	回轉鑄造渣(鐵質軟熟)
000K-2	W.Wheatle (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	F.Feuillet (2FeO·SiO <sub>2</sub> )	鐵化狀態，全鐵共析鐵不明顯	58.02	38.17	1.17	0.07	0.02	0.01	12.96	<0.01	回轉鑄造渣

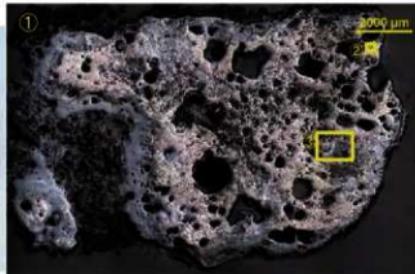


第45図 楩形鋳冶滓(含鉄)の顕微鏡組織・EPMA調査結果

OOK-2 鋼治澤

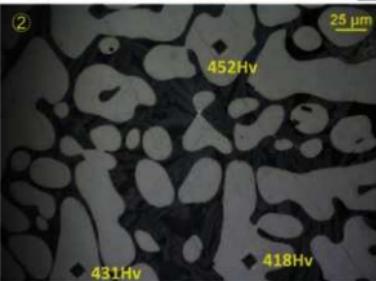
①マクロ組織

②津部・ウスター、418Hv、  
431Hv、452Hv(50gf)、  
ファライト、③鉄化鉄部：  
金属組織痕跡不明瞭



②

452Hv

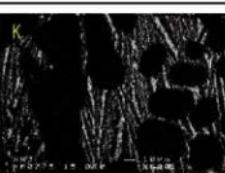
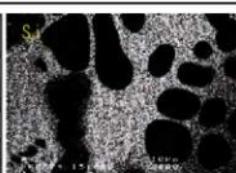
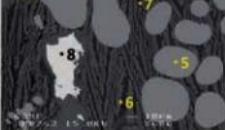


③

100 μm



④



定量分析値

Element	5	6	7
Na <sub>2</sub> O	0.008	0.007	3.529
MgO	0.177	0.627	0.027
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.481	0.175	16.651
SiO <sub>2</sub>	0.221	31.515	46.450
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.005	0.054	0.410
K <sub>2</sub> O	0.013	0.083	6.390
CaO	—	4.216	4.666
FeO	97.347	62.816	19.953
Total	98.252	99.493	98.076

Element

8

P 0.003

S —

Fe 101.334

Si 0.024

V 0.018

Mn 0.021

Mg 0.086

Al 0.010

Cu 0.086

Total 101.582

津部の反射電子像(COMP)および特性X線像

第46図 鋼治澤の顕微鏡組織・EPMA調査結果

## 第VII章 調査のまとめと考察

### 第1節 地形環境の形成

大久保遺跡の近隣では、鈴山遺跡のように縄文時代中期に高位段丘上に集落が形成されているが、縄文時代後期～晩期の集落形成の状況については不明である。

一方、大久保遺跡においては明確な縄文時代の生活痕跡は検出できていないが<sup>1)</sup>、縄文時代後期～晩期の遺物が散在的に出土しており、この時期には付近の扇状地上で人間の活動が行われていたことが窺われる。

そこで、大久保遺跡第3次調査において確認された、縄文時代後期以前に堆積したと推定される土層を対象として自然科学分析を行い、この付近においてどのように地形環境の形成が進んでいたのかを検討した。

#### ① 黒色土層の堆積時期と堆積環境

第3次調査では、中世の遺構面以下に黒色土層が2層存在していることが判明したため（東壁第12・16層）、現地表面付近に堆積した黒ボク土（東壁第4層）と合わせて土壌の自然科学分析を行い、地形環境の形成過程を明らかにすることを試みた。分析の詳細は第VI章に記載した通りであり、第14表にも簡単にまとめた。

**堆積時期** 第4・12・16層すべてにおいて、イネ科の植物珪酸体が多く検出され、比較的乾燥した草地環境のもとで生成した土壌であると考えられた。また、テフラ粒子はほとんど検出されていない。

こうした点は、これまでの東海地方の黒ボク土の分析結果とも一致するものである。したがって、外

見から明らかに黒ボク土とみられる第4層以外の第12・16層についても、黒ボク土と似た環境下において生成した土壌と推測できる。

注目されるのは、少量ながら第12層から鬼界アカホヤ火山灰（6,300BP）に由来するテフラ粒子が検出されていることである。この点から、第12層及び第4層の堆積時期は、鬼界アカホヤ火山灰の降下以降に絞り込むことができる。

三重県内では、大紀町野添大辻遺跡<sup>2)</sup>や大台町出張遺跡<sup>3)</sup>など複数の遺跡で、黒ボク土中から鬼界アカホヤ火山灰が検出されている。中でも野添大辻遺跡では、黒ボク土層中における鬼界アカホヤ火山灰の検出層位から、黒ボク土の堆積は鬼界アカホヤ火山灰の降灰以前にある程度進んでいたと想定されている<sup>4)</sup>。

こうした点からみれば、第4層よりも下位に堆積した第12層は、鬼界アカホヤ火山灰の降灰までに堆積が進んでいた黒ボク土に由来するものと考えられる。

それよりも下位に堆積している第16層については、テフラ粒子が検出されず、形成された時期については不明であるが<sup>5)</sup>、土壌の質感等は第12層に類似しており、やはり黒ボク土に由来すると考えておきたい。

**堆積環境** これらの黒ボク土あるいはそれに由来する土層は連続的に堆積しておらず、間に砂礫層ないし砂質土層を挟んでいる。このことから、黒ボク土が堆積する過程で、こうした砂礫を主体とする土壤が堆積するような状況があったことが窺われる。

第14表 土壌分析結果一覧表

層位	花粉	植物珪酸体	珪藻	テフラ
第4層	イネ科・ヨモギ属主体、ゾバ属あり	メダケ属主体、イネ・ススキ属あり	ほとんどなし	ごくわずか
第12層	ほとんどなし	メダケ属主体	陸生珪藻主体、流水不定性種少量	鬼界アカホヤ火山灰少量
第16層	ほとんどなし	メダケ属主体	ほとんどなし	検出されず

第16層において花粉・珪藻とともにほとんど検出されなかつた要因としては、花粉が分解されるような乾燥した環境下にさらされていたためと考えられるが、その他にも、短期間のうちに堆積し、堆積後すぐに上面が別の土層によって覆われた可能性や、堆積後に何らかの搅拌を受けている可能性なども考えられる<sup>6)</sup>。

また、第12層において、陸生種とともに流水不定性種の珪藻が一定程度検出されていることからは、この層が形成された時期に、乾湿を繰り返すような環境であったことが示唆されている。花粉の検出量が少ないことや、検出された珪藻が破片化している率が高いことを鑑みれば、第12層は流水などを伴う黒ボク土の二次堆積ではないかと推定される。

このように考えれば、第16層についても、やはり黒ボク土の二次堆積とみることができる。第12・16層には第4層にはみられない砂礫が含まれていることも、これを傍証するだろう。

## ②地形環境の形成

以上のように、自然科学分析の結果からは、大久保遺跡付近では、縄文時代前期頃の黒ボク土の堆積過程において、堆積し始めた黒ボク土が流れ込み、その上面を砂質土が覆う状況が繰り返されたことが推定できる。

これには、付近を流れる竹谷川及びその支流の氾濫などが関係していると考えられる。土石流に通常含まれているような大きな礫は第12・16層付近の土層に含まれていないが<sup>7)</sup>、鈴鹿山脈のように花崗岩帯を発生源とする土石流は砂を主体とする場合があることが知られているため<sup>8)</sup>、付近で発生した土石流が関係している可能性も考えられるだろう。第14層から上方の第13層に向かって、やや砂礫が粗くなる傾向が認められる箇所があることや、第12層・16層では南北方向に側方変化が認められることなどからは、これらの土層を土石流様の堆積物であると捉えられるかもしれない<sup>9)</sup>。

その後、縄文時代中期以降に土地が安定し、第3次調査で地山とした褐色粘質土（第8層等）が堆積し、さらにその上部に改めて黒ボク土が堆積したという状況が復元できるだろう。

扇状地は、縄文時代以前からの土石流などの自然作用により徐々に形成されてきたものであるが、黒ボク土の堆積が進んでいく鬼界アカホヤ火山灰の降下に前後する時期に、河川の氾濫や土石流が数度にわたって発生し、それが大久保遺跡付近の地形環境が現在に近いものとなる要因の一つとなったと推定される<sup>10)11)</sup>。

## 註

- 1) 第2次調査で堅穴住居の可能性がある不整形な土坑が検出されているが、構造として確実なものではない。
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』 2015。
- 3) 大台町出張遺跡調査会『出張遺跡調査報告書』 1979。
- 4) 横井拓馬「VI總括 1. 縄文早期の年代と古環境」『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター 2015。
- 5) 第16層は鬼界アカホヤ火山灰降灰以前に堆積したと考えるなら、黒ボク土層中位を鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準とした野添大辻遺跡の状況とも整合的といえよう。
- 6) こうした堆積環境の場合、土層中に含まれる花粉・珪藻の量が僅少となったり、珪藻が破片化し検出数が減少する可能性がある。本報告において自然科学分析を行った、一般社団法人文化財科学研究センターの金原正子氏及び金原裕美子氏からのご教示による。
- 7) 第12・16層付近の砂礫層に含まれる礫は、大きくても直径1~1.5cmほどの礫である。
- 8) 増田富士雄・田村亨・富井眞「砂質土石流堆積物の粒度特性—京都大学理学部構内の弥生時代の砂層（黄色砂）ー」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター 2005。
- 9) 増田富士雄「神戸市兵庫区祇園遺跡で観察された土石流と土砂堆積物」『祇園遺跡第17・18次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2016。
- 10) 兵庫県神戸市祇園遺跡でも、6,200~6,140BP前後に土石流が発生したことが指摘されている。
- 11) 縄文時代頃の地形環境の形成に関わる視点として、今後、扇状地における砂礫土層の粒度分析等も必要かもしれない。

## 第2節 大久保遺跡の中世集落の様相

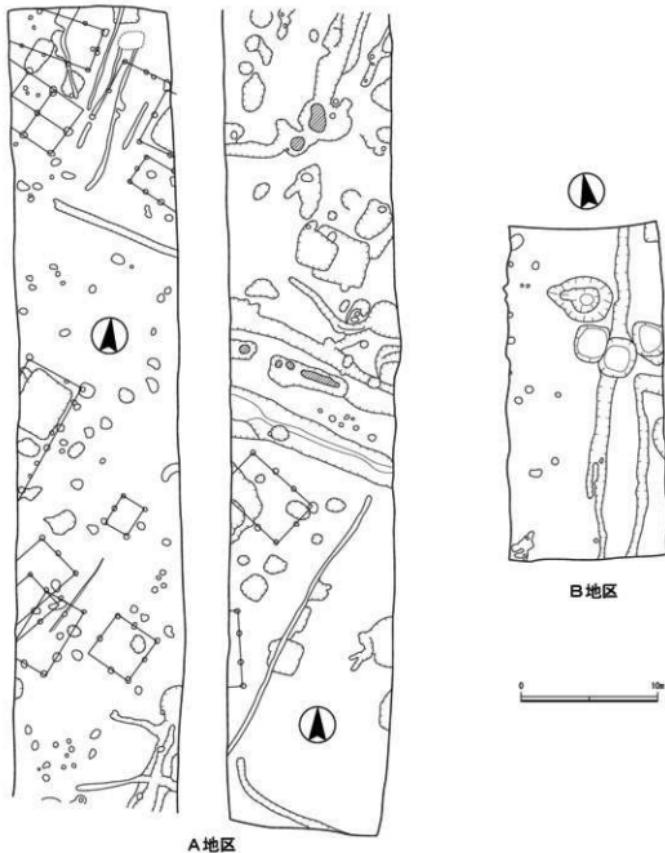
### ①存続時期

**第1次調査の遺構と遺物** 昭和57年度に行われた第1次調査では、掘立柱建物7棟以上、堅穴建物と思われる方形土坑3基、井戸1基、石組遺構1基のほか、多数の溝や土坑が検出されている（第47図）。これらの遺構は鎌倉時代後半期～室町時代のものと

されているが<sup>1)</sup>、第1次調査で出土した遺物はこれまで未報告であったため、詳細な時期については不明であった。

そこで、今回の報告に際して第1次調査において出土した遺物の一部を図化し、第48図に掲載した<sup>2)</sup>。

1・2は土師器小皿である。1は口縁部外面をヨコナデし、口縁端部はやや肥厚する。2は非常に浅



第47図 大久保遺跡第1次調査区全体図 (1:360)

※『大久保遺跡発掘ニュース』No.2より一部改変の上転載

い。口縁外面をヨコナデしている。1は13~14世紀代、2は12世紀代のものと考えられる。

3はロクロ土器小皿である。口縁部は直線的に外方へひらく。底部外面には糸切り痕が残る。12世紀代のものと考えられる。

4は土器内耳鍋である。口縁部付近は受け口状になっており、外面には1条の沈線が施される。底部は平底に近く、底部と体部との境は強く屈曲する。口縁部内面の向かい合う2カ所には、半環状の内耳を貼り付けている。内耳を貼り付けた後に、孔に横方向に棒を通し、孔を円形に整形している。内面には丁寧なヨミガキが施されており、外面にはスヌが付着する。器形は鉄鍋を忠実に模倣しており、15世紀代のものと考えられる<sup>3)</sup>。

5は山皿である。高台を持たない。底部と体部の境目は明瞭に屈曲する。

6~14は山茶碗である。ほとんどが高台を持たないか、退化した粗雑な高台を持つもので、7のみがしっかりした高台を貼り付けている。いずれも法量は小さく、13世紀後半~14世紀前半のものである。なお、9の底部外面には墨書きと思われる痕跡がみら

れるが、判然としない。

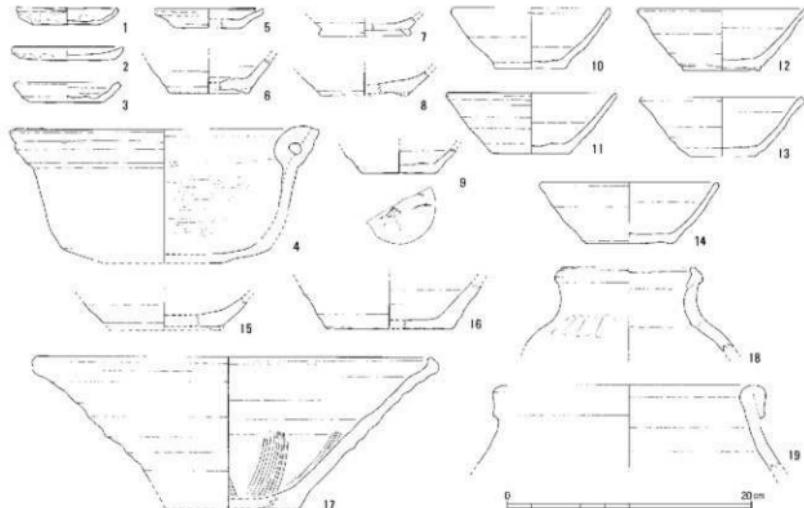
15・16は陶器鉢と思われる。15は粗雑な高台が剥がれた痕跡を残しており、山茶碗の可能性もある。

17は陶器擂り鉢である。瀬戸産とみられ、赤灰色の泥漿がかけられている。口縁部は内側へ屈曲する。擂り目は8~13本を一組として7箇所に施されている。15世紀後半のものである。

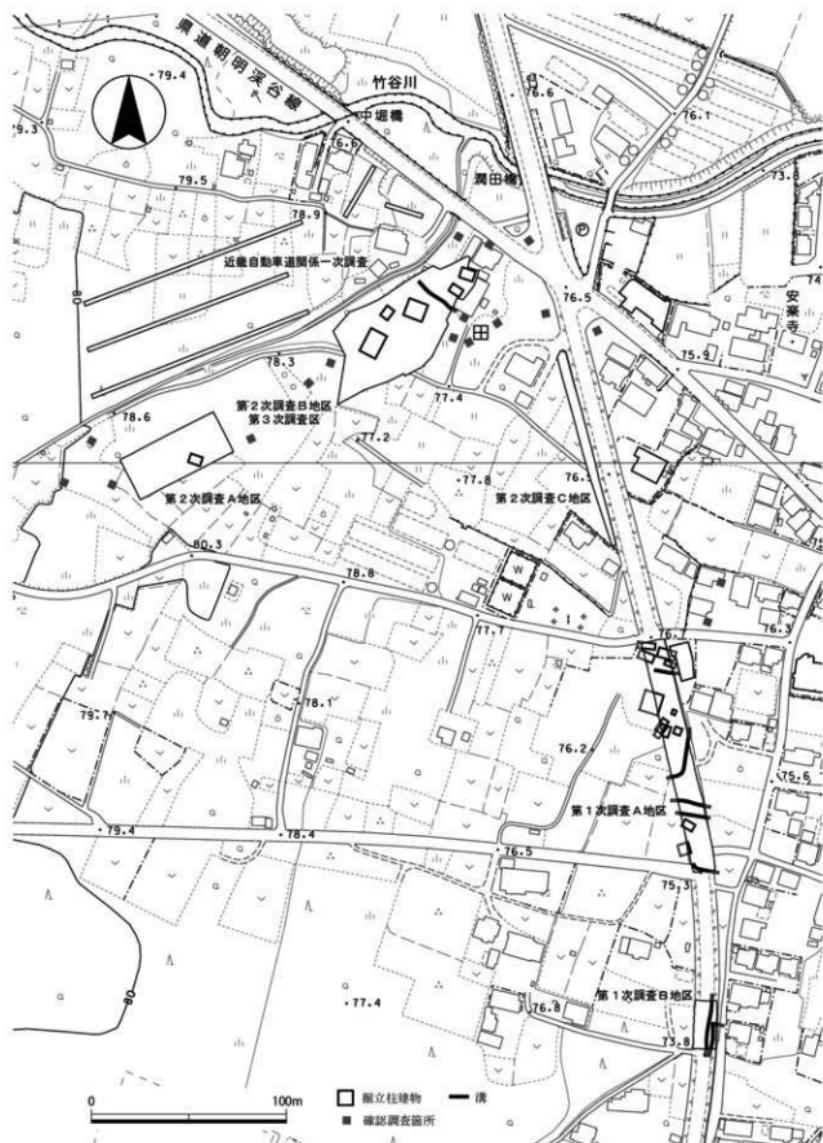
18・19は陶器壺である。18は小型の壺で、口縁部は直立し、口縁端部はやや肥厚する。肩部にはヘラ状工具による連続押圧痕がみられる。19は常滑産の広口壺で、口縁部を外面に折り返す。15世紀後半~16世紀前半のものである。

以上のように、第1次調査で出土した遺物の大半は13世紀後半以降のものであり<sup>4)</sup>、このことから、検出された遺構のほとんどは鎌倉時代後期~室町時代のものと考えられる。

**地点による時期差** これに対して、第3次調査において検出された遺構は、いずれも平安時代末~鎌倉時代前期に収まり、出土遺物にも第1次調査で出土した遺物と同じ時期のものはほとんどみられないことから、第1次調査で検出された遺構群と、第3次



第48図 大久保遺跡第1次調査出土遺物実測図 (1:4)



第49圖 太久保遺跡遺構分布圖 (1:2,500)

調査で検出された遺構群の間には、ある程度の時期差が想定される。

こうした時期差の存在からみて、第1次調査地点と第3次調査地点の掘立柱建物群は、別の集落と考えることができる。第2次調査及び第2・3次調査に先立つ範囲確認調査の結果から、第1次調査地点と第3次調査地点との間に遺構が希薄な地区があると想定されることも、これを裏付ける(第49図)<sup>5)</sup>。

したがって、まず第3次調査地点付近に集落が形成され、それが廃絶する前後の時期に、第1次調査地点付近に集落が形成されていった可能性が想定できる。

## ②集落の景観とその変遷

現在のところ、大久保遺跡では奈良時代や平安時代前～中期に遡る遺構や遺物は、ほとんど確認できない。したがって、大久保遺跡における集落の形成は、第3次調査地点の掘立柱建物群に始まると考えられる。

第3次調査で検出された掘立柱建物については、側柱建物のS-B302から出土した遺物がやや古いくことや、純柱建物と側柱建物とで主軸方向がやや異なることから、側柱建物の方が古い可能性もある。ただし、重複する建物はなく、時期的な前後関係は遺構の検出状況からは判断できない。逆に、重複も近接もせざ間隔をあけて存在することから、ある時期には併存していたと考えることもできよう。

また、第3次調査区の北東側にも掘立柱建物が建っていた可能性があるが、範囲確認調査の結果や、調査区から50mほど北東には竹谷川が流れていることからみて、多くの建物が存在したとは考えがたい。竹谷川支流より北側についても、近畿自動車道名古屋神戸線建設事業にかかる調査によって、遺構がほとんどないことが確認されている。

こうしたことから、第3次調査で検出された掘立柱建物群は、大型の純柱建物を中心とした少數の建物からなる、一つのまとまりを形成していると考えておきたい。大久保遺跡に当初形成された集落は、少數の掘立柱建物によって構成される小さなまとまりで、いわゆる小村に近い様相を呈していくと推定される<sup>6)</sup>。

この集落は、掘立柱建物に明確な建て替え痕跡がなく、出土遺物の時期も限られていることから、平安時代末～鎌倉時代前期の短期間のうちに消長したものと考えられる。

その後、鎌倉時代後期～室町時代にかけて、第1次調査地点付近を中心に、やや多くの掘立柱建物が集まるような様相を見せる。この集落は、北東の現在の潤田集落方面ではなく、西側へ広がるとみられる<sup>7)</sup>。建物群を画するような溝が複数掘られ、井戸や石組構造も存在する点は、第3次調査地点の様相と異なっており、集落としての形態が変化しているように見受けられる。

16世紀代に入ると、第1次調査地点の集落も解体していく。第3次調査地点では、集落廃絶後の生活痕跡が非常に希薄であり、第2次調査地点においても同様の状況が確認できる。大久保遺跡の大部分は、畠地化もしくは荒れ地化したようである。

一方で、この頃には千種越など近江方面への交通路が発達し、大久保遺跡の西方にも千種城など街道を意識して造られたとみられる中世城館がいくつか存在している。遺跡の状況から明確に示すことはできないが、現在の潤田の集落あたりに街道を中心とした集村が形成され、江戸時代そして現代へと続いているものと推測される。

## 註

- 1) 萩原町教育委員会『大久保遺跡現地説明会資料』 1983.
- 2) 萩原町教育委員会のご厚意により、実測を行い、本書に掲載した。
- 3) 関東地方の上野・武藏地域で多くみられる内耳鍋とも似るが、土師質である点などが異なるため、東海地方でも時折みられる忠実な鉄鋳模倣のものとした。
- 4) 浅野晴樹『東国における中世在地系土器について一主に関東を中心にして』『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館 1991. 金子健一「羽釜の軌跡－中世東海の土製煮炊具をみる新視角－」『中世の伊豆・駿河・遠江－出土遺物が語る社会』 高志書院 2005.
- 5) 第48図に掲載した以外にも10～20点程度の山茶碗や土師器等の遺物が萩原町教育委員会に保管されているが、主なものは本書に掲載した。掲載していない遺物も、概ねここで報告した遺物と同様の時期のものである。なお、現地説明会資料

- によれば瀬戸産陶器皿や青磁、裁貨等も出土しているとされるが、それらの遺物の所在は今回確認できなかった。
- 5) 範囲確認調査の調査坑については座標に基づく記録をとつていないため、第40回に示した位置には多少のずれがある。
- 6) 広瀬和雄「中世村落の形成と展開—畿内を中心とした考古学的研究—」『物質文化』50 物質文化研究会 1988、金田章

裕『畿地形と中世村落』 吉川弘文館 1992。

- 7) 第1次調査A地区北東側で平成19年度に藤野町教育委員会によって行われた範囲確認調査ではピットが検出され、山茶碗や15~16世紀代の土師器羽釜等が出土しているが、遺構・遺物の密度は低いと判断されているようである。

### 第3節 掘立柱建物の構造と位置づけ

掘立柱建物については、柱穴のみが検出されることが通有であり、その上部構造を知ることは困難である。中世の建物については絵巻物等に描かかれているものも多く、そうしたものから検出された遺構の上部構造について推定することも可能であるが、検出された遺構から建物の上部構造について推定する手がかりを得ることも必要と思われる。

そこで、大久保遺跡第3次調査では、検出された掘立柱建物のほとんどの柱穴の土壌断面図を作成し、柱穴に関する情報をできるだけ多く収集するよう努めた。このデータを利用して、総柱建物であるSB310とSB314の2棟について、柱穴の規模、柱穴底面の標高、柱痕あるいは柱の抜き取り痕の有無について整理し(第15表)、これを元に掘立柱建物の上部構造に関する手がかりを得ることを試みた。

#### ① SB310

**柱穴の規模と深さ** 柱穴の規模をみると、一定のまとまりを示しており、似たような規模のものが多いことが分かる(第50図)。柱穴は適当に掘られたのではなく、一定の規格を念頭に掘られていたと考えられる。

一方、それらよりも大きい一群と小さい一群も存在する。大きい一群については柱の抜き取りによる影響を考える必要もあるが、小さい一群については、そこに立てられた柱の機能の違いを示す可能性もあるだろう。

また、柱穴底面の標高をみると、76.83~76.96mの13cmの間に集中しており、柱穴は底面の高さを揃えて掘られていることが分かる(第50図)。ただし、少數のみ浅い一群と、深い一群が存在する。

**柱穴の状況と建物構造** これらの情報を、柱痕や抜き取り痕の有無とともに掘立柱建物の模式図上に示

した(第50図)。

これを見ると、深い柱穴はP4~24の柱筋に集中している。このうち、P4・9は柱痕状の土層が確認でき、柱の抜き取りが行われていたとしても、柱穴の規模や深さを大きく変えるようなものではなかったと考えられるため、元から深く掘られていた蓋然性が高い。

深い柱穴が柱をしっかりと立てるためのものであったとすれば、この柱筋が、屋根など上部構造を支える上で重要な役割を果たす柱通りであった可能性がある。柱上の梁の配置などを考える上で参考になるかもしれない。

一方で、浅い柱穴はSK307・308付近にみられ、これら土坑の存在と何らかの関係があるとも考えられる。壁部分にあたるP6も浅いことから、一概に東柱であったとは言いたいが、屋内に何らかの機能を持った土坑を設けるため、建物もそれに合わせた構造となっていた可能性を指摘しておきたい。

なお、P13は小規模で浅い上に、柱筋も通っておらず、他の柱と同様の柱であったとは考えにくい。東柱であるとも考えられ、この柱付近に広めの空間が設定されていた可能性が考えられる<sup>1)</sup>。

#### ② SB314

**柱穴の規模と深さ** SB314の柱穴の規模は、SB310よりもややばらつきがあるものの、一定のまとまりを示す(第50図)。柱穴には土層断面に柱の抜き取り痕跡が明瞭に観察できるものが多いことから、こうした点が影響している可能性もある。

そして、SB310と同様に、それらよりも大きい一群と、小さい一群とが存在するが、大きい一群は他の柱穴との規模の差がそれほど明瞭ではない。

また、柱穴底面の標高をみると、77.14~77.35m

第15表 S B310・314柱穴一覧表

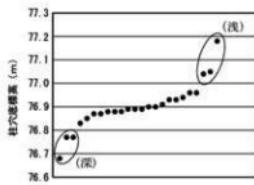
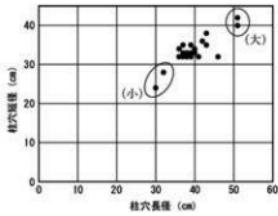
S B310

柱穴番号	底面標高(m)	柱穴規格			柱痕	抜き取り痕	備考
		長径(cm)	短径(cm)	平均(cm)			
P1	76.87	39	35	37	×	△	
P2	76.88	43	38	40.5	—	—	土層図なし
P3	76.83	42	36	39	△	△	抜き取り痕の可能性高いか
P4	76.77	36	32	34	○	×	
P5	76.85	37	35	36	×	○	
P6	77.05	36	34	35	×	○	
P7	77.04	37	33	35	×	△	
P8	76.90	40	33	36.5	○	×	
P9	76.68	39	32	35.5	△	×	柱底まで達せず
P10	76.94	30	24	27	×	○	
P11	76.93	51	40	45.5	○	×	底面段状
P12	76.88	41	32	36.5	×	○	
P13	77.18	32	28	30	×	×	柱の通りやや悪い
P14	76.89	43	35	39	×	○	
P15	76.90	37	32	34.5	×	○	
P16	76.96	51	42	46.5	×	△	
P17	76.93	46	32	39	○	×	
P18	76.89	39	33	36	○	×	
P19	76.88	40	34	37	×	○	下部別道構は元の柱穴の可能性あり
P20	76.96	36	32	34	×	△	
P21	76.89	38	33	35.5	×	○	
P22	76.87	38	32	35	×	○	柱穴もう少し小さい可能性あり
P23	76.91	38	32	35	○	×	
P24	76.77	43	38	40.5	×	△	

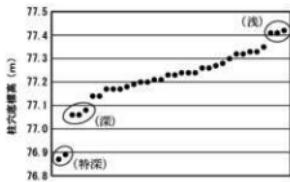
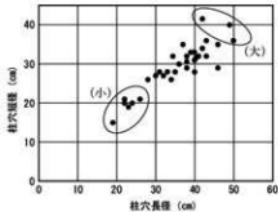
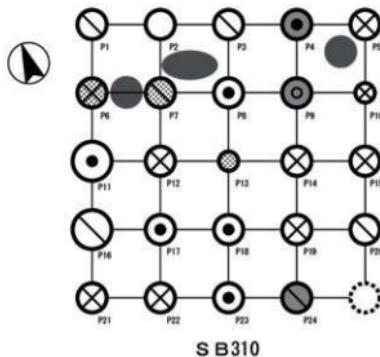
S B314

柱穴番号	底面標高(m)	柱穴規格			柱痕	抜き取り痕	備考
		長径(cm)	短径(cm)	平均(cm)			
P1	77.32	28	26	27	△	×	柱痕ブロック混土
P2	77.19	31	28	29.5	△	×	柱痕ブロック混土・底面段状
P3	77.23	30	27	28.5	×	○	
P4	77.18	32	27	29.5	×	△	
P5	77.14	40	31	35.5	×	○	
P6	77.24	50	36	43	×	○	
P7	77.26	38	32	35	×	△	
P8	77.06	31	28	29.5	×	○	
P9	77.17	22	20	21	×	△	
P10	76.89	38	29	33.5	×	○	
P11	76.87	35	28	31.5	×	△	
P12	77.28	34	26	30	△	△	抜き取り痕の可能性高いか
P13	77.06	46	29	37.5	×	○	
P14	77.17	43	37	37.5	×	○	
P15	77.23	43	36	39.5	×	○	
P16	77.26	37	35	36	×	○	
P17	77.30	40	33	36.5	×	○	
P18	77.24	39	33	36	×	○	
P19	77.33	42	34	38	△	?	上半土層図なし
P20	77.27	46	35	40.5	×	○	
P21	77.24	36	30	33	×	△	
P22	77.14	49	40	44.5	×	○	
P23	77.17	41	32	36.5	×	○	
PA	77.20	19	15	17	×	△	
PB	77.33	24	20	22	×	△	
PC	77.08	26	21	23.5	—	—	土層図なし・底面掘り過ぎか
PD	77.20	23	19	21	×	△	
P1	77.21	22	21	21.5	—	—	第2次調査検出
PII	77.21	42	42	42	—	—	第2次調査検出
PIII	77.32	34	32	33	—	—	第2次調査検出
PIV	77.35	40	28	34	—	—	第2次調査検出
PV	77.42	40	32	36	—	—	第2次調査検出
PVI	77.41	38	31	34.5	—	—	第2次調査検出
PVII	77.41	33	28	30.5	—	—	第2次調査検出

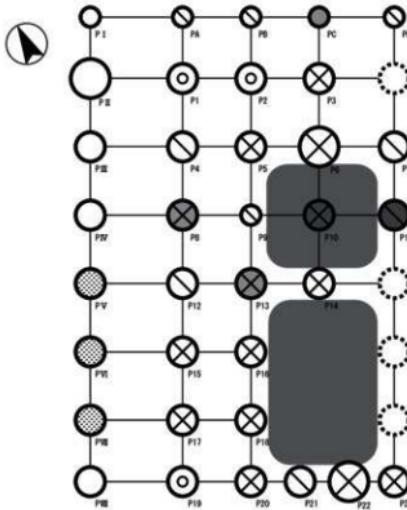
※○は明確なもの、△は可能性があるもの



S B310



S B314



■ 土坑 ● (特深) ○ (深) △ (浅)

◎ 柱底あり ◎ 柱底あり? ◎ 拔き取り底あり ◎ 拔き取り底あり?

第50図 S B310・314柱穴属性グラフ・模式図

の21cmの間にほとんどが集中しており、柱穴の底面はほぼ高さを揃えて掘られているといえる（第50図）。ただし、浅い一群と深い一群、そして特に深い一群が存在する。

**柱穴の状況と建物構造** これらの情報を、柱廻や抜き取り痕の有無とともに掘立柱建物の模式図上に示した（第50図）。

これをみると、まず、北縁の柱列の柱穴はすべて小さい一群に属しており、他の柱筋とは機能が異なっていたことが明確である。この柱列は、庇などを支えるものであったと考えられ、下屋状の空間が存在していたと推定される。

深い柱穴や特に深い柱穴は、P IV～11の柱筋とその付近に集中している。いずれも柱が抜き取られた可能性があるが、土壠断面からは、抜き取りに伴つて柱穴が大きく掘り返されたとは考えにくく、元から深く掘られていたと考えられる。S B310同様に、建物の上部構造を支える上で重要な役割を果たす柱通りであった可能性があろう。

ただし、その中にあってP 9が小さい柱穴であることは、隣接する土坑S K315への出入りなど空間利用に関わる問題から、柱の立て方に工夫が必要であったことを示すかもしれない。

柱穴配置からみても、S K315・316という二つの大きな屋内土坑の存在もあって、S B314はS B310に比べて複雑な構造をしていたものと考えられる。

P VII～23の柱筋には、S K316脇に他の柱筋より1本多く柱を配置しており、S K316の機能上、その内部に柱を立てることが困難であったことや、それを補うために南縁に柱を増やして補強を行っていることなどが推測できる。そして、このS K316の西側には屋内へ上がるためのステップと考えられる段状部分があることから、S K316から屋内へ出入りする通路が固定されていたこと、そのため、P B～20の柱筋に屋内柱を増やしてS K316付近の補強を行うことが困難であったことも推測できよう。

また、西端と東端一間分は柱間が他より広いことも注目される。この部分の上屋の構造や、空間利用とも大きく関わるだろう。調査時の事情もあって確實ではないが<sup>22)</sup>、浅い柱穴はすべてP I～囁の柱筋に集中しており、西端一間分については上部構造が

他の部分とは異なっていた可能性も考えられる。

### ③中世的な建物形式の導入

**S B310・314の建物形式** 古代末～中世前期にかけて総柱式の掘立柱建物が住居として広く普及していくことは、これまでにも指摘されてきた<sup>23)</sup>。

こうした総柱建物については、古代の掘立柱建物の系譜上にない、全く異なる新しい形式の住居建築とも評価されており、その場合、総柱型住居と呼ばれている<sup>24)</sup>。

この総柱型住居は、柱間寸法が2m前後か2.4m前後、柱径が12～20cmと細く側柱と屋内柱で差がない、柱間規模が桁行2～10間で梁間は2～5間、主屋と付属屋で規模の差がある、といった特徴を持つとされる。

本節で分析した大久保遺跡のS B310・314は総柱式の掘立柱建物であり、母屋と考えられる部分については、柱間はほぼ2.2～2.4mである。こうした柱間寸法や、規模、柱の太さなどの特徴から、総柱型住居の範疇で捉えることができる。

**総柱型住居の導入とその背景** こうした総柱型住居の出現時期は、平安時代後期～末とされている。平安時代末～鎌倉時代前期と考えられる大久保遺跡第3次調査の総柱型住居は、総柱型住居が出現した後、各地で採用されていく段階の事例となろう。

伊勢地域においては、大久保遺跡以外でも当該期の総柱型住居が確認されている。いくつかの遺跡では11世紀頃に出現していると思われるが、津市雲出島貴遺跡では12世紀を境に集落が総柱型住居を主体に構成されるようになっていくようであり<sup>25)</sup>、およそ12世紀代に伊勢地域でも総柱型住居が一齊に普及していくものとみられる。

こうした総柱型住居の普及にあたって、どのような社会的背景があったのかは今後の検討課題といえるが、これに関して大久保遺跡の調査成果から注意しておきたいのは、S B310・314の柱穴の規模や底面深さに一定のまとまりがあることである。

長さにばらつきのある柱材で建物を建てようとすれば、柱穴の深さによって柱の高さを調整することになる。逆に、柱穴の規模や底面の深さにまとまりが見られることは、これらの建物の建築にあたって

ある程度長さ・太さの揃った柱材が調達された可能性を示唆する。

総柱型住居の普及に際しては、柱径の矮小化や角材の使用など建築材料における変化があったとされる<sup>6)</sup>。また、文献史学においては、畿内周辺では12世紀頃に袖山で商品として生産された規格材を流通させるような交易活動が発展していったことが指摘されている<sup>7)</sup>。それ以前の時期の建物との比較も必要だが、大久保遺跡S B310・314にみる柱材の規格性からは、伊勢地域においても12世紀頃に建築技術、木材加工技術、材木流通などに変化があり、それが総柱型住居の普及と関連していた可能性を考え得るだろう。

このほか、他地域では古代末～中世前期において階層の高い集落から住居として総柱建物が導入されていくという指摘もあり<sup>8)</sup>、集落の位置付けと併せて考えていくことも必要である。

#### 註

- P13がSB310の柱穴ではない可能性もあるが、柱跡上に他の柱穴は確認できなかつたため、そのように考えた場合、こ

の位置には柱がなかったことになる。

- 西端のP1～7の柱筋については、第2次調査で掘立柱建物の一部であることが判明していない段階で調査されており、十分なデータを得ることができていない。
- 高橋與右衛門「中世の建物跡」『輪廻時代の考古学』 高志書院 2003。
- 宮本長二郎「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－閑口欣也先生追憶記念論文集』 中央公論美術出版 1999。
- 三重県埋蔵文化財センター『嶋坂II』 2000、河北秀実「第10章 平安時代の地方政治と社会経済 第6節 人々の暮らし」『三重県史』通史編原始・古代 三重県 2016。
- 堀内明博「近畿地方における古代から中世の掘立柱建物－京都府・滋賀県・兵庫県の場合－」『埋もれた中世の住まい』 同成社 2001。
- 高橋一樹「中世権門寺社の材木調達にみる技術の社会的配置－中世前期を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第157集 国立歴史民俗博物館 2010。なお、寺社による材木調達システムの大きな転換は13世紀後半にあるとされる。
- 前川要「中世の家族と住居」『考古学による日本歴史』15家族と住まい 雄山閣 1996。

## 第4節 中世の土地開発と大久保遺跡

本章第2節で整理したように、大久保遺跡では集落の形成が12世紀頃に始まる。それ以前の古代の遺物・遺構の存在は非常に希薄で、人間活動が活発に行われていたとは考えにくい。

したがって、12世紀頃に新たに人が居住するようになった背景には、何らかの社会的な要因があつたものと想定される。11～12世紀には、伊勢国において莊園・御厨・御園の設置が活発化していることを踏まえれば<sup>1)</sup>、中世前期における土地開発のあり方が関わっている可能性があろう。

こうした点において、大久保遺跡の集落の形成との関係が注目されるのは、当該地に存在が推定される、伊勢神宮を本家とする潤田御厨である。

**潤田御厨** 潤田御厨は、文献では『吾妻鏡』<sup>2)</sup>や『神鳳鈔』<sup>3)</sup>、『外宮神領目録』<sup>4)</sup>等にその名を見ることができる。

文献上の初見は、『吾妻鏡』の文治6年（建久元年）（1190年）4月19日の造太神官役夫工米地頭未

济成敗の記事である。

ただし、『吾妻鏡』は14世紀初頭頃の成立である可能性が高く、建久3年（1192年）の『伊勢大神宮神領注文』<sup>5)</sup>には潤田御厨の記載がないことなどもあり、この記事から12世紀末に存在していたと考えるには、やや確実性を欠く。

しかしながら、『吾妻鏡』と同じく14世紀に成立したとされる『神鳳鈔』にはその名があることから、少なくとも14世紀初頭までには存在していたと考えられる。

**御厨と土地開発** 三重郡や朝明郡、員弁郡は郡都となっていたこともあり、北勢地域には平安時代後期～鎌倉時代前期に多数の御厨・御園が設置されている。田畠や經營する集落の位置が特定されているものはないが、名称とそれに対応する地名等からおよその所在地が判明しているもの多く、その中に大久保遺跡のように段丘上や扇状地上に立地したと推定されるものもある。

『神鳳鈔』によれば、潤田御厨が存在する三重郡内でも沖積地に立地する智積御厨は、田積が180町ある。潤田御厨は26町であり、それに比べるとかなり狭いが、郡内では広い部類に入るようである。その他の三重郡内の御厨には、高角御厨の15町、栗原御厨の3町など、それほど広くないものが目立つ。これは、広い沖積地ではなく、河岸段丘上や扇状地端部、扇状地を開析する谷沿いなどを中心に、生産城が設定されていたことを示すのではなかろうか。

中世前期における土地開発にあたっては、小規模な集落による山寄りの谷などを中心とした開発が積極的に行われたとみられることを踏まえれば<sup>6)</sup>、大久保遺跡についても、付近の竹谷川やその支流を生かした土地開発を行うことを目的に成立した集落であったとも考えられる。

実際に、SK316から出土した集落外から持ち込まれた土壌に由来すると推定される土壌の中にはイネやソバの花粉が含まれており<sup>7)</sup>、大久保遺跡の集落の住民は、付近で田畠の経営を行っていたとみられる。

こうしたことから、大久保遺跡第3次調査で確認された集落は、周辺地域の土地開発に際して形成さ

れたものであり、それは潤田御厨の成立とも関わっていた可能性があると考えておきたい。

## 註

- 1) 稲本紀昭『伊勢国』『北陸地方の莊園・近畿地方の莊園 I』講座日本莊園史6 吉川弘文館 1993。
- 2) 国史大系刊行會『国史大系』第22巻 1932。底本とされた北條本では「潤田御厨」となっているが、吉川子爵家所蔵本では「潤」の字が「潤田」になっている。旧伊勢國内では「潤田御厨」は他に確認できないことからも（国立歴史民俗博物館『日本莊園データ1』国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書6 1995）、「潤田」は「潤田」の誤りとみてよいだろう。
- 3) 統群書類從完成会『群書類從』第1輯 1932。
- 4) 統群書類從完成会『続々群書類從』巻1 1970。
- 5) 竹内理三（編）『鎌倉遺文』古文書編第2巻 東京堂出版 1972。
- 6) 島田次郎『小村=散居型村落』『中世史ハンドブック（第8版）』近藤出版社 1985、藏持重裕『中世村落をいかに把握するか』『争点 日本の歴史』第4巻中世編 新人物往来社 1991。
- 7) 第VI章第2節参照。

## 第5節 結語

大久保遺跡が存在する菰野町では、古代や中世の様子があまり文献史料として残されておらず、発掘調査による成果の蓄積もまだ少ないため、縄文時代の集落や生活、古代から中世にかけての地域社会については十分明らかになっていない。こうした中にあって、今回の大久保遺跡の発掘調査成果は、地域史を豊かにするための大きな材料となる貴重なものといえる。

調査によって得られた成果としては、縄文時代における地形環境の形成や、平安時代末～鎌倉時代前期における土地開発と集落の展開といった点が明らかになってきたことなどがあげられる。また、検出された掘立柱建物や溝の主軸方向が、現在の付近の土地の地割り方向とかなり一致していることも分かってきた。

こうした成果からは、当該地域が現在のように人

が住みやすい安定した地形環境になっていく経過、潤田地区の現在の集落が形成されるに至る端緒など、現在の潤田地区または菰野町の成り立ちについて考えていくことも可能である。

また、平安時代末～鎌倉時代前期における土地開発と集落の展開との関係については、この時期の莊園・御厨の全国的な広がり等とも関わる問題であり、伊勢地域あるいは日本列島全体の社会の動向とも併せて考えていくべきものである。

このことは、県内各地で行われる遺跡の発掘調査は、それぞれの地域の歴史像を豊かに描き出すだけでなく、地域史と日本史とをつなぐための橋渡しにもなり得ることを、明確に示している。

今後、こうした大久保遺跡の発掘調査による成果が活用され、当該地域における地城史のさらなる充実につながっていけば幸いである。

## 附章 茜野町内の中世遺物

### ①報告の経緯

茜野町内では、これまで本格的な発掘調査が行われた遺跡は少ない。そのため、大久保遺跡周辺にも古代～中世の遺跡が複数存在するにも関わらず、その様相は必ずしも明らかになってはいない。

大久保遺跡から4kmほど北に位置する杉谷中世墓跡は、発掘調査によって複数の蔵骨器や火葬土坑等が検出されており<sup>1)</sup>、現在も五輪塔や宝瓶印塔が多数残されているなど注目される遺跡である。この杉谷中世墓跡の周囲の尾根上には、杉谷中世墓跡とも関係すると考えられる杉谷城跡や觀音寺跡が存在するが、土塁や曲輪、礎石等の遺存が確認されるのみで、やはり詳しいことは分かっていないかった。

しかしながら、近年、杉谷城跡と觀音寺跡で採集された陶器や瓦などの遺物が三重県埋蔵文化財センターに寄贈されたため、これらの遺跡の内容について知る手がかりを得ることができた。

以下、これらの遺物について報告し、大久保遺跡の発掘調査成果とあわせて茜野町内の中世を考えるための資料としたい。

### ②遺物

**杉谷城跡採集遺物（第51図1・2）** 1は古瀬戸の平碗の口縁部片である。城跡北東部で採集された。灰釉が施されているが、風化によりほとんど剥離している。口縁部はまっすぐのび、口縁端部付近の外側にはやや強くナデが施されている。14世紀後半～15世紀前半のものと思われる<sup>2)</sup>。

2は常滑産の甕の口縁部片である。城跡北東部で採集された。口縁端部は下方へ折り曲げられ、口縁部外側と接着する。15世紀代のものと思われる<sup>3)</sup>。

**觀音寺跡採集遺物（第51図3～5）** 3は軒平瓦である。瓦当は平瓦端部の下面に瓦当部を貼り付ける顎貼り付け技法<sup>4)</sup>によって作られており、瓦当の接合部を瓦当裏側に粘土を貼り付けて補強する。瓦当は外区を突線で囲い、内部に唐草文を配する。焼成はやや軟質である。

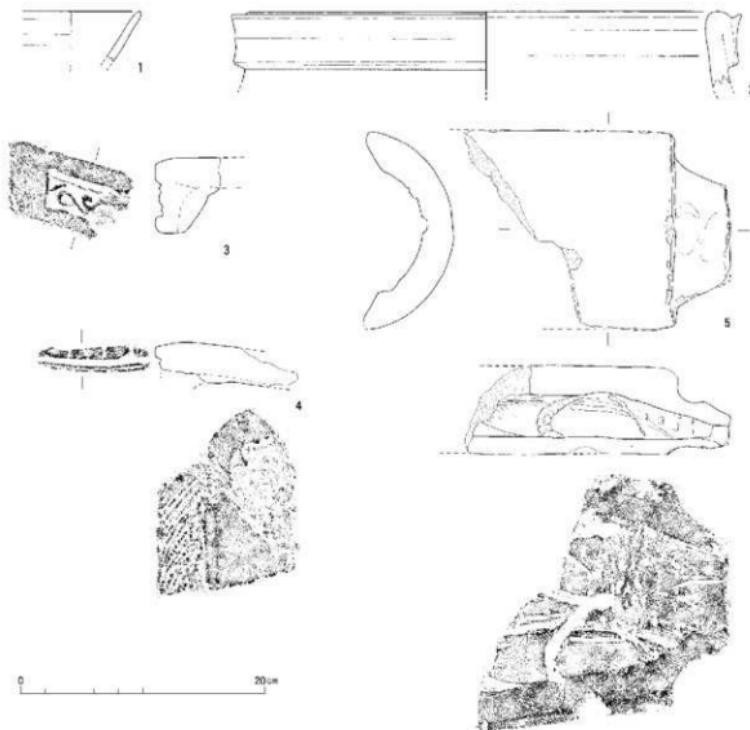
4は軒平瓦である。瓦当は顎貼り付け技法によつて作られており、貼り付け部分で剥離して欠損している。剥離した部分には瓦当と平瓦部の接合を強固にするために施された綾杉状の接合沈線が認められる。瓦当の文様はほとんど遺存していないが、外区の突線が残り、ごくわずかに唐草文の一部と考えられる盛り上がりも認められることから、3と同様の文様を持つ瓦であったと推測される。焼成は堅緻である。瓦当の製作技法等の特徴から、15世紀末～16世紀頃のものと思われる。

5は丸瓦である。玉縁をもつ。内面には吊り紐痕が明瞭に残る。吊り紐痕は大きな波状となっている。焼成は軟質で、灰色を呈する。

以上のように、採集された遺物はいずれも15世紀前後のものと考えられ、杉谷城跡と觀音寺跡の存続期間の一端を示すものと思われる。杉谷中世墓跡から出土した蔵骨器等の陶器類の多くは13世紀～15世紀に位置づけられることから、杉谷城跡と觀音寺跡、杉谷中世墓跡は同時に機能していた時期があったと考えられる。これらの城・寺・墓が相互に関連しながら存在していたことが、より明確になっただろう。茜野町の中世社会を考える上で、貴重な情報といえる。

### 註

- 1) 茜野町教育委員会『こもの文化財だより』第13号 1998、  
神田麻『杉谷中世墓』『三重県史』資料編考古2 三重県 2008、  
正式な発掘調査報告書は刊行されていない。
- 2) 麻津良祐「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム  
中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 全国シ  
ンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実  
行委員会 2005。
- 3) 愛知県史編さん委員会（編）『愛知県史』別編窯業3中世・  
近世常滑窯 愛知県 2012。
- 4) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59  
冊 奈良国立文化財研究所 2000。



第51図 杉谷城跡・観音寺跡遺物実測図 (1:4)

第16表 杉谷城跡・観音寺跡探集遺物一覧表

【凡例】

非記載項目等については第1表に準じる。

掲図 番号	実測 番号	探集地	種別・器種	法量 (cm)	調整	色調	残存度	備考
1	013-02	杉谷城跡	陶器 平瓶	残存高 4.2	(外) ロクロナダ (内) ロクロナダ	(輪) 地灰 (輪) オリーブ褐	10YR6/1 2.5YR4/3	口縁部 小片 窓戸産
2	012-01	杉谷城跡	陶器 壺	口径 38.0 残存高 6.4	(外) ロクロナダ (内) ロクロナダ	(外) 地褐 (内) 黒褐	7.5YR4/2 10YR3/1	1/12 常滑産
3	012-01	観音寺跡	瓦 軒平瓦	残存長 5.4 残存幅 11.0 高さ 6.2	(凸) ナダ? (凹) ナダ?	にぶい種	7.5YR7/4	瓦当部 小片 唐草文
4	012-02	観音寺跡	瓦 軒平瓦	残存長 11.6 残存幅 11.4 残存高 3.8	(凸) ナダ? (凹) ナダ?	にぶい種	7.5YR7/4	平瓦部 小片 唐草文?
5	011-01	観音寺跡	瓦 丸瓦	残存長 21.8 幅 16.4 高さ 7.3	(凸) ナダ? (凹) 布目・吊り繩痕・ニ ビキ痕	灰	N8/0	半欠 玉縁

第17表 大久保遺跡第1次調査出土遺物一覧表

【例】

※注記等には遺物に添付されたラベルの内容を記載している。出土した調査区やグリッド、遺構、または実測番号等を示すと思われる。  
※その他の記載項目等については第1表に準じる。

掲出番号	注記等	種別・器種	法量 (cm)	調整	色調	残存度	備考
1	MS-15	土師器 小皿	口径 8.2 器高 1.4	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ヨコナデ・ユビオサエ	浅黄橙	10YR8/4	完存
2	A III i-29 No. 9 M.K.-38	土師器 小皿	口径 9.0 器高 1.1	(外) ヨコナデ・ユビオサエ (内) ナデ	浅黄橙	7.5YR8/4 8/12	口縁部
3	A-I P143 Y-34	ロクロ土師器 小皿	口径 8.4 器高 1.7	(外) ナデ (内) ナデ (底) 糸切り	橙	7.5Y7/6 11/12	口縁部
4	K.S-46	土師器 内耳鍋	口径 24.4 器高 11.0	(外) ロクロナデ (内) ヨコミガキ	灰黄	2.5Y7/2 2/12	口縁部 内耳2箇所 外腹ス付着
5	A I g-12 M.S-16	陶器 小皿 (山茶 皿)	口径 9.0 器高 1.6	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	2.5Y7/1 4/12	口縁部
6	A II f-14 M.K-42	陶器 碗 (山茶 碗)	残存高 3.2 高台径 6.4	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	10YR8/1 4/12	底部
7	A I f-13 14 Y.K-23	陶器 碗 (山茶 碗)	残存高 1.6 高台径 7.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	2.5Y7/1 5/12	底部
8	A I f-14 M.K-41	陶器 碗 (山茶 碗)	残存高 2.0 高台径 7.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	2.5Y7/1 5/12	底部
9	A I e-11 K.S-51	陶器 碗 (山茶 碗)	残存高 2.0 底径 6.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2 5/12	墨書き?
10	A II g-19 No. 12 K.S-48	陶器 碗 (山茶 碗)	口径 14.8 器高 5.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	にぶい黄橙	10YR7/2 2/12	口縁部
11	A III S628 K.S-47	陶器 碗 (山茶 碗)	口径 13.6 器高 4.9	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	2.5Y7/1 2/12	口縁部
12	A III g-31 No. 13 Y-37	陶器 碗 (山茶 碗)	口径 13.4 器高 5.1	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	10YR7/1 2/12	口縁部
13	A II h-24 No. 14 M.K-37	陶器 碗 (山茶 碗)	口径 13.6 器高 4.8	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2 2/12	口縁部
14	A III SB-3 No. 18 Y-36	陶器 碗 (山茶 碗)	口径 13.4 器高 5.1	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰白	10YR7/1 2/12	口縁部
15	A I f-14 M.K-40	陶器 級?	残存高 2.4 底径 9.6	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り	灰黄	2.5Y7/2 4/12	底部
16	A III g-28 M.K-39	陶器 級	残存高 4.0 底径 10.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 糸切り?	褐灰	10YR6/1 4/12	底部
17	—	陶器 摺り鉢	口径 32.0 器高 12.6	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	(胎) 浅黄橙 (釉) 赤灰	10YR8/3 2.5YR4/1 10/12	瀬戸産
18	A II h-23 Y.K-21	陶器 盆	口径 10.8 残存高 7.0	(外) ロクロナデ・工具オサエ (内) ロクロナデ	(外) 暗赤褐色 (内) 黒褐色	5YR3/2 10YR3/2 2/12	口縁部
19	A III i-28 No. 4 K.S-50	陶器 底口壺	口径 20.6 残存高 7.0	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	(外) にぶい赤褐色 (内) 褐褐色	2.5YR5/3 5YR5/2 2/12	常滑産

写 真 図 版





調査区全景（南から）



調査前風景（北から）



調査区北壁土層（東から）



S B301 P 6 付近調査区東壁土層（西から）



調査区南部東壁土層（西から）

写真図版2



東壁サブトレーナー北端部土層（南から）



S B302 P 6 土層（南から）



S B302 P 8 土層（西から）



S B302 P 8 遺物出土状況（南から）



S B302（東から）

写真図版 3



S B310 (東から)



S B310 P13土層 (西から)



S B310 P18土層 (西から)



S K307 (西から)



S K307土層 (西から)

写真図版 4





S B314 (西から)



S B314 P 5 土層・遺物出土状況 (南から)



S B314 P 6 土層・遺物出土状況 (南から)



S K315・316 (西から)



S K315西半部土層 (南から)

写真図版6



S K315遺物出土状況①（北から）



S K315遺物出土状況②（北から）



S K316西半部土層（北から）



S K316北半部土層（東から）



S K316東端部床面断ち割り状況（北から）



S A317（北から）



S K316土塊出土状況（南から）

写真図版 7



S A317 P 1 土層（西から）



S A317 P 2 土層（西から）



S D303検出状況（東から）



S D303西端部（東から）

写真図版 8



SD303西部土層（東から）



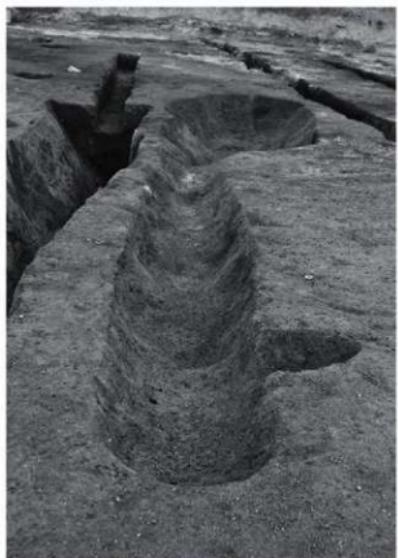
SD303東部土層（東から）



SD304土層（東から）



SD305土層（東から）



SD304（東から）



SD305（東から）

写真図版 9



SK 306土層（北から）



SK 312（北から）



SK 313土層（北から）



A41Pit 1 土層・遺物出土状況（南から）



調査区西部落ち込み棱出状況（北から）



注口土器出土状況（南から）



調査風景（南から）

写真図版10 出土遺物①



1



3



2



4A面



4B面



5



6



9



7

内面



9



7

外面

写真図版11 出土遺物②



8



10



11



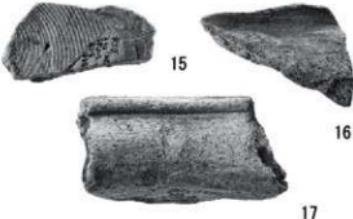
12



13



14



15

16

17



19

18

写真図版12 出土遺物③



20



21



22



23



鉄滓①



24

鉄滓②



25



26



26墨書

写真図版13 出土遺物④



27



28



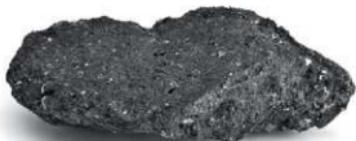
35



29



30



31



32



33



34

写真図版14 出土遺物⑤



青磁碗



36



38



37



39



40



41



42



42 黒書



43

写真図版15 出土遺物⑥



44



47



45



45面



46A面



46B面



48



49

写真図版16 出土遺物⑦



50



52



55



56



54



53



57



58



59



60



61



62



63



64

## 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告372

## 大久保遺跡（第3次）発掘調査報告

2017年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 光出版印刷株式会社

---